



少林寺拳法部創立50周年 記念誌



平成26年6月21日
防衛大学校少林寺拳法部
防衛大学校少林寺拳法部奥平会

目 次

1	実行委員長挨拶	奥平会会長	佐藤 秀幸・・・2
2	少林寺拳法部部长挨拶	少林寺拳法部部长	高橋 信明・・・3
3	創立 50 周年に寄せて	防衛大学校長	国分 良成・・・4
4	少林寺拳法グループ総裁祝辞		宗 由貴・・・5
5	少林寺連盟会長祝辞		新井 庸弘・・・7
6	創部 50 周年を祝して	前奥平会会長	石渡 幹生・・・9
7	創部 50 周年を祝して	前少林寺拳法部部长	菅野 等・・・10
8	先生からお祝いの言葉	正範士 七段	神田 憲和先生・12
		准範士 六段	頼富 英武先生・13
9	各期寄稿 10-59 期生・・・・・・・・・・・・・・・・		14
10	国際貢献活動で活躍する OB から イラク派遣隊長 25 期生	小野寺 靖	・・・ 89
11	「創立 50 周年」お世話になった恩師を偲ぶ・・・・・・・・		90
12	防大少林寺拳法部の今・・・・・・・・・・・・・・・・		97
13	現役から一言・・・・・・・・・・・・・・・・		98
14	思い出写真館 ー各期から寄せられたスナップ写真集ー		・・・ 110
15	防衛大学校少林寺拳法部 50 年の歩み・・・・・・・・		・・・ 118
16	防衛大学校 50 周年記念大会委員・・・・・・・・		・・・ 128
17	編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・		・・・ 129

実行委員長挨拶



50周年をむかえて

奥平会会長・記念行事実行委員長

SHORINJI KEMPO UNITY 佐藤 秀幸

合 掌

ここに、防衛大学校少林寺拳法部が創設50周年を無事に迎えることが出来たのは、偏に、創始者奥平先生をはじめとした先輩諸氏の皆様、部運営に直接携わって来られた方々、これまで種々支援をされてきた方々、そして開祖、総裁を始めとしたご指導をいただいた方々のお陰と考えております。

50年の間には創生期、発展期、充実期等、様々な時期を経て今日に至っておりますが、私自身、学生時代を振り返ってみて深い感慨を抱いております。我々が学生の時には、修練（練習）場所もままならず、当時の人文館の屋上（雨天時は廊下）、飛び込みプール横の芝生等で練習をしていた懐かしい思い出があり、道衣もすぐに黒くなりました。こうした環境下でも校友会の部のなかで最大人数を誇り、大会でも上位入賞等を果たせました。50年のほんの一ページではありますが、防大少林寺拳法部の拳士であったことに誇りをもっております。そして今でも現役として活動できているのは、少林寺拳法の技も然ることながら、教えである「自己確立、自他共楽」の精神が普遍的なものであるからこそと確信しております。「どこに行っても仲間がいる」「理解し助け合うことができる」ことが少林寺拳法を通して得た大きな財産であると考えています。今回の記念行事の準備の際にも皆様が快く協力していただいたことは力強い限りでした。本当に感謝申し上げます。

さて、我が国は、少子高齢化等、社会環境が大きく変わりつつあり、尖閣諸島問題等、周辺環境も厳しさを増す中で、国自体がいろいろな意味で変わっていかねばならないのが現状です。少林寺拳法においても、社会情勢の急激な変化等に伴い、組織機構改革が数年前から着手されており一定の成果をあげてきております。50年を経た防大少林寺拳法部は、当然こうした流れの中にあります。

50年の大きな節目にあたり、防大少林寺拳法部のこれまでの輝かしい歴史、伝統を振り返り、その実績を称えるとともに、今後の部の更なる発展を期していかねばならないと考えております。奥平会の目的を明確にしつつ今後とも努力していきたいと考えておりますので、皆様のご支援、ご協力を引き続きお願い申し上げます。

結 手

少林寺拳法部部長挨拶



防衛大学校少林寺拳法部 50 周年に寄せて

防衛大学校少林寺拳法部 部長
通信工学科 教授 高橋 信明

合 掌

故奥平正人先生の指導のもと少林寺拳法会として出発しました防衛大学校少林寺拳法部は昭和 40 年度に発足しましたので、平成 26 年度に創部 50 年という記念すべき節目を迎えることになります。この間、多いときには 1 学年人数が 30 名を超えることがあった一方、少ないときには 1 学年 4 名しかおらず団体演武を組むのも容易ではなかったという厳しい時期も経験してきましたが、全体としましては防衛大学校校友会の中でも大きな部として存在感を誇っています。存在感は部員の数ばかりでなく、少林寺拳法部は 40 部ある校友会運動部等の中でも伝統的に好成績を挙げる部として知られており、防衛大学校の誇る代表的な運動部となっています。

一般私立大学等とは異なり、特待生制度を持ち合わせない防衛大学校の運動部としましては少林寺拳法経験者は少なく、多くの部員は入部時において初心者です。それにも拘わらず、防衛大学校少林寺拳法部は少林寺拳法関東学生大会や全日本学生大会において歴代素晴らしい成果を挙げており、置き場に困る程多くのトロフィーやカップが部室に並んでいます。数々の輝かしい成果により、毎年のように学校長から校友会褒章を授与されており、団体としての校友会褒章の受章回数は校友会の中で群を抜いて第一位です。また、全日本レベルの成果を挙げているということに基づき、地元横須賀市からは横須賀市スポーツ栄光章を平成 23 年度及び 25 年度に表彰されています。これらのことは、歴代の先生の指導のもとでの現役諸君の弛まぬ努力に加え、OB・OG 等の熱き支援があったればこそその賜物と感謝している次第です。

防衛大学校少林寺拳法部は陸上、海上、航空の各自衛隊で活躍する多くの有為の人材を半世紀に亘り輩出してきました。少林寺拳法が教授するものはまさに自衛隊が隊員幹部に求めるところのものであり、心・技・体の全てにおいて先輩諸兄姉の基盤となっています。これからも現役学生諸君が稽古に精進し、防衛大学校少林寺拳法部が益々栄え、幾十年経っても多くの人から愛される存在であり続けること祈念致します。

結 手



防衛大学校少林寺拳法部創部 50 周年に寄せて

防衛大学校長 校友会会長
国分 良成

防衛大学校少林寺拳法部創部 50 周年おめでとうございます。防衛大学校を代表して関係者の皆様に対し心よりお慶び申し上げます。

防大少林寺拳法部は昭和 40 年、当時、本校訓練部第 4 大隊指導教官であった奥平正人 2 等空佐が 4 年生に創部を呼びかけたことが始まりであると聞いております。その後、昭和 43 年 5 月に同好会、昭和 49 年 2 月に部に昇格し現在に至っており、少林寺拳法部は 50 年に及ぶ歴史を経て防大校友会における主要な課外活動として確固たる地位を築かれました。

この間、昭和 43 年の関東学生大会における団体乱捕準優勝を皮切りに昭和 47 年には同大会団体乱捕優勝を勝ち取り、「乱捕（らんどり）の防大」と言われる時代を迎えました。演武についても昭和 40 年代から近年に至るまで全日本学生大会において最優秀の成績を挙げるまでの実力を持つようになり、全日本学生大会 5 連覇を成し遂げる等、学生少林寺拳法界において数多くの栄光を築くとともに歴史と伝統を継承して参りました。これも 800 余名におよぶ幾多の諸先輩方によるご貢献・情熱はもとより、多くの関係者の熱意あるご支援の賜であり、防衛大学校長として、また校友会会長として心から敬意と謝意を表したいと思っております。

さて、少林寺拳法は、戦後の荒廃した日本の現状を憂えた開祖宗道臣氏が、昭和 22 年に、すべては人の質が組織や国家の興亡を左右することを痛感し、武道を通じて自分を大切にしつつ他人をも思いやる心を持ち、勇気と慈悲心のある人間が一人でも多く育つことを願った人造りの行として創始したものです。まず自己を確立し、他人を思いやり社会に貢献できるリーダーを育てる武道であり、この理念は、幹部自衛官としてその職責を尽くし得る人格を育成するという、本校建学の目的と軌を一にするものと言っても過言ではありません。少林寺拳法を通じて自らの人生観を充実させるということは社会が多様化、複雑化する現在において大変貴重なことであり、引き続き少林寺拳法を通じ錬成と研鑽を積まれることを望みます。

最後になりましたが、この 50 周年という、素晴らしい節目を新たなるスタートとして、ますます自衛隊・社会の将来の担い手として、関係者各位・OB と現役との連携を密にしつつ、今後とも一層の発展を遂げられんことを心から祈念いたします。



祝 辞

少林寺拳法グループ
総裁 宗 由 貴

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年記念祝賀会が盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

防衛大学校少林寺拳法部は、昭和 40 年(1965 年)に、当時拳士でもあり第四大隊指導教官だった奥平正人先生により「少林寺拳法会」として発足され、わずか数年にして校内最多の人数を誇る支部になりました。開祖は「今後の日本の運命に 1 つの大きな影響力を及ぼすのが防大生、防大生出身者である」と、同支部の誕生と拳士の活躍に期待されていました。その後、様々な障害や困難を克服しながら活動され、50 年という長きにわたり、連綿と活動を続けてこられた現役拳士、OB・OG 拳士の方々に敬意を表しますとともに、これまで活動を支援してくださいました防衛大学校関係各位、そしてご支援・ご協力いただきました皆様方に、厚くお礼申し上げます。

SHORINJI KEMPO (少林寺拳法) は、1947 年、日本において創始者宗道臣 (開祖) が、「平和で豊かな社会を築くために、社会で役に立つ人間を育てたい」という志を持ち、創り出した人づくりのシステムであり、独自の固有の文化をもった流派が無い世界で一つのものであります。そしてその人づくりの為、これまでの 67 年の間に一般社団法人 SHORINJI KEMPO UNITY、金剛禅総本山少林寺、一般財団法人少林寺拳法連盟、学校法人禅林学園、少林寺拳法世界連合の 5 つの団体が組織され、現在では世界 36 ヶ国に広がりを見せています。

人々が共に生きていく現代社会は日々変化し、様々な問題が取り沙汰されています。日本国内では超少子高齢社会が深刻化し、孤独に苛まれる高齢者やネットいじめで傷付けられる子どもなど人間関係に苦しむニュースが後を絶ちません。世界を見れば国と国の緊張関係を伝える情報が毎日のように伝えられています。こうした現状を皆さんはどのように受け取られているのでしょうか。

他人に対して無関心では、多くの問題に対しても感性を働かせることはできません。「他人のことが本気で考えられる人間を育てたい」という少林寺拳法の願いに共感されましたら、その次には実際に行動できる、頼りにされる存在へと変わっていく自分を楽しみ、そこに集う助け合える仲間との出逢いを実感して頂きたいと思えます。

日本で生まれた少林寺拳法グループ各団体は、創始者の志を受け継ぎながら、社会に貢献できる団体として、それぞれの特色を生かし、地域の皆様が「生きる力」を養い、「感性」を磨くための環境づくりを目指します。

防衛大学校少林寺拳法部の皆様におかれましては、これからも多くの先輩方の努力によって築いてこられた50年の歴史を大切にするとともに、60年、70年と新たな歴史を積み重ねていかれますことを期待しています。

最後に、OB・OG、現役拳士の皆様のご尽力に敬意を表し、これまで防衛大学校少林寺拳法部にご支援を賜りました関係者の皆様には、今後とも同様のお力添えを頂きますようお願い申し上げます、お祝いの言葉と致します。

合 掌



祝 辞

一般財団法人 少林寺拳法連盟

あらい つねひろ
会 長 新井 庸弘

防衛大学校少林寺拳法部創部 50 周年おめでとうございます。

1965 年の設立以来、故・奥平 正人 先生をはじめとする草創期の皆様と、その伝統を守り、発展させてこられた各代の皆様、そしてその活動を永年にわたりご支援いただきました関係各位の皆様のご尽力に敬意と感謝の意を表します。

少林寺拳法は 1947 年、宗 道臣 開祖により「人づくりによる国づくり（理想境建設）」を目的に香川県において創始されました。

「国づくり」とは、テロや紛争・戦争のない、平和で物心ともに豊かな社会の実現に貢献することです。「人づくり」とは、自分の可能性を信じ「半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せを」考えて、信念を持って行動できる、リーダーシップをもった人を一人でも多く育てることです。従って少林寺拳法の修行は、相手に勝つことを目標にするのではなく、自分の可能性を信じ、相手の存在を認め、尊重し、協力関係の中で切磋琢磨し、真の強さ、真の優しさ、そして人間としての生き方の規範を身につけるための「人づくりの行」であります。

現代社会に目を向けますと、いじめ、いきすぎた体罰、指導者の暴力行為が問題視され、日本体育協会を中心に各スポーツ、武道団体において「暴力根絶」の運動が展開されています。

かつて宗 道臣 開祖は「いかんことはいかんと言える勇気のある正義感の強い人間にならなければいけない」と言っています。

私たちの身近で起こっている「いじめ」や「暴力行為」、各種ハラスメントと言われる「理不尽な行為」に対し、見て見ぬふりをせず、仲間と協力して「いかんことはいかん」と言い、「正しいことが正しい」で通るような、そして皆が安心安全に過ごすことができる家庭や学校、職場や地域社会を作っていこうではありませんか！

「国家百年の計」は教育にありと言われていています。宗 道臣 開祖が「人、人、人、すべては人の質にある」と喝破された通り、「人づくり」こそが国づくりの基であります。

今後とも、自信と信念と誇りを持って少林寺拳法の修行に励み、自己確立に努めるとともに、苦楽を共にできるよき仲間を増やしていこうではありませんか。

組織というものは、指導的立場にある人から大きな影響を受けます。そのために質の高いリーダーが求められます。

防衛大学校の拳士の皆様は、卒業後、幹部自衛官になる方が多いと思います。身体の強さはもとより、豊かで魅力的な人間性、大局的に物事を見ることができる見識、そして判

断力と決断力が求められます。防衛大学校少林寺拳法部においては、そのことを見据えて
厳しい修練に励まれ、信頼し、協力し合える人間関係を築かれてこられたことと存じます。

また、貴少林寺拳法部は、永きにわたり輝かしい歴史を築かれてきました。創部 50 周
年を契機に、防衛大学校少林寺拳法部のますますのご発展と、少林寺拳法部 OB・OG 並び
に部員の皆様のますますのご活躍をご期待申し上げ、祝辞とさせていただきます。

合 掌



創部 50 周年を祝して

奥平会

前会長 石渡 幹生

母校少林寺拳法部が創部 50 周年を迎えたことに、心からお祝いを申し上げます。

防衛大学校少林寺拳法部は、幾多の困難を乗り越えて、今日まで赫赫たる成果を収めてきました。校友会活動部の中でも毎年全国大学大会レベルでトップを競っている数少ない部であり、他大学からも一目も二目も置かれる存在であります。この伝統が 50 年にわたり受け継がれてきていることは、驚くべきことであり、誠に嬉しい限りです。その時その時の最上級生を中心とした部員の努力の賜物であり、歴代の部長や指導者・顧問皆様のお陰と深く感謝いたします。

さて、振り返ってみれば、私が防衛大学校に入校し入部した昭和 44 (1969) 年当時は、練習場は 3 階建て人文館の屋上にあり、未だ同好会の時代でありました。どうしたわけか、この年の入部者は軽く 50 名 (2 年、3 年も数名) を越え、一気に部員数が膨らみ、次年度以降も暫く 100 名を越える大所帯の部であり続けました。「数は力」の上に個人の努力もあって、演武、乱捕りともに素晴らしい成果を収めていました。その後、指導官として再び母校に戻ったところ (昭和 53 (1978) 年) は、団体演武部門で連続最優秀に輝き、取って当たり前というような雰囲気でした。しかし練習場は依然として人文館屋上であり、新体育館建設の暁には是非とも場所を確保したいとの思いが強く、そのためには成果を出さねばとの必死の思いが部員に共通した意識でありました。

今や、総合体育館フロアの半分を使っての練習が可能となり、女性拳士の入部、新防具の採用、ロゴの変更、大会種目や内容の変化、採点法の充実などなど、ここ十数年の練習環境の変化がある中でも状況に的確に対応して活動し、部員数を 70 名前後に維持しているのは頼もしい限りです。OB 会会長として、学生大会を観戦した時、我々の時代と違って拳士達の上達が早いと感心する事しきりでした。

我国を取り巻く安全保障環境はかつてないほどの緊張状態が続いています。防衛省・自衛隊、中でも防衛大学校学生に対する国民の期待は、学生が思っている以上に大きいものがあります。学生諸君には在学 4 年間で、幹部自衛官としての基礎をしっかりと作って欲しいと思います。

創部 50 周年が、これからの 50 年に向けての始まりであり、防衛大学校少林寺拳法部の益々の発展を心から祈念する次第です。



創部 50 周年に寄せて

防大少林寺拳法部
前部長 菅野 等

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部が、創部 50 周年と言う節目の年を迎えることは嬉しい限りである。運動神経が極めて鈍い私が、防衛大学校でも学外で屈指の実績をあげていた少林寺拳法部の部長を引き受ける事になったのは、防衛大学校に移って官舎に住む事になったときに、初代の部長である丸川武志先生が 1 階で私が 3 階に住む同じ階級を使う関係になったのが契機である。防衛大学校に移って 2 年目だったと思うが、丸川先生から「自分は数年で定年を迎えるが、少林寺拳法部の部長を後釜として引き受けてくれないか」と相談された。運動部などとは全く無関係に過ごしてきた私が、武道系の運動部の部長を引き受けるには、大きな躊躇があり、ワイフなどは大反対であった。丸川先生の一番の心配は、当時教官で少林寺拳法部の顧問にふさわしい方が丸川先生ご自身のまわりに見当たらなかったということであった。丸川先生が定年後も部が引き続き適切に運営されるようには是非引き受けてはくれないかということであった。数ヶ月いろいろ悩んだ後に、部外の先生である田村、神田両氏のご指導、部の OB のサポート体制もしっかりしているので、引き受ける事にした。

当時防大少林寺拳法部は、全日本学生大会などでは、団体演武は最優秀賞を獲得するのは当然視されており、他の種目でも最優秀を幾つか取る事が普通であった。部員数も 70 名以上であった。このままの状態が続けば万々歳であったが、防衛大学校に女子学生が入るようになってから部員数が減る事になってしまった。最初の年に女子学生の入部希望者が数人あったとのことであるが、部の女子学生に対する指導体制が整っていないと言う事で、入部を断わってしまったとのことである。これが契機となって少林寺拳法部は少し特種な部であるとのうわさが立って男性部員の入部も少なくなってしまうことにもつながり、少林寺拳法部の部員数が少ない状態が続く事になった。幸いな事に、私が部長を辞めて高橋先生に部長をお願いする頃には部員数も増えてきて、現在では部員数も元に近い数になっている。

長い間学生を指導してくださった田村先生は 80 歳を越える頃から、体調を崩されることが多くなり、平成 13 年にお亡くなりになられたが、それまでは学生に対して少林寺拳法の技の指導はもちろん、精神訓話もしてくださった。少林寺拳法部が防衛大学校の代表的な部に成長して隆盛を保っているのも、田村先生と弟子であられる神田先生が一貫して熱心に指導してくださったおかげである。神田先生は現在も少林寺拳法部の先生として、

頼富先生と一緒に学生を熱心に指導してくださるのは心強い限りである。初代の部長で少林寺拳法部を防衛大学校有数の部に育てあげた丸川先生は、残念な事に平成 19 年にお亡くなりになられた。

創部 50 年を迎えた少林寺拳法部が、これからも防衛大学校を代表する部として隆盛を保ち、立派な幹部自衛官の雛を養成し続けることを祈念して、私の創部 50 周年に寄せる文としたい。

結 手



防大少林寺拳法部 50周年に寄せて

東京小平道院 道場長

正範士 七段 神田 憲和

防衛大学校少林寺拳法部が創立50周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。また、少林寺拳法部50周年を迎えられたことにあたり、今日まで部を支えられた歴代の部長、OBなど奥平会並びに関係者の皆様に敬意を表します。

少林寺拳法は1947(昭和22)年、創始者宗道臣により「人づくりによる国づくり」を目的に創始され67年余、あらためて「人づくり」の重要性が今求められています。その「人づくり」のための少林寺拳法が防衛大学校で50年もの間、卒業までの4年間近くの短い間ですが、少林寺拳法の修業を通して、少林寺拳法の教えを寄りどころとした多くの防大生を送り出してきたのではないかと考えております。

1978(昭和53)年9月、当時少林寺拳法部を指導しておりました元三多摩道院長 故田村倉蔵先生の薦めで少林寺拳法部に携わって以来、あっという間の36年でしたが、まさに毎年1年、1年が私と部員達との「人づくり」のための日々の修業だったのだと思います。

毎年、多くの新入部員を迎えておりましたが、少林寺拳法経験者、初心者を含めこれから卒業までの4年近く、部を辞めないで、やり遂げられるかが大きな関心事でした。新入部員の中には高校時代運動部にも属さず、ほとんど運動しなかった者、道院、高校少林寺拳法部で活動した者など様々です。毎年新入部員の人数は15人くらいから30人余の間で推移しておりましたが、卒業時にそのまま30人余、ほとんど残った時がある一方、5人程しか残らず部の存続の危機の時も有りました。まさにそれは、全日本学生大会団体演武で7年連続最優秀の時代、団体演武を同期で組めない時代が何年か続いた時もあった36年間でした。そのような新入部員達が日頃の練習、ランニング、体力づくりや春・夏・冬の校内合宿、昇級、昇段試験の準備、関東、全日本学生大会、自衛隊大会などへ出場を目指す部内の演武練習などで、お互いに励まし合い、助け合い、切磋琢磨する中で日々人間として成長している姿が手に取って分かりました。特に団体演武は毎年、3学年を中心として団体を組み、部一丸となって団体演武を練習することによって、同期の連帯感と絆がさらに深まり、大会の結果によっては泣き、笑い、一喜一憂して、さらに強さと優しさを兼ね備えた自信にあふれた防大生に育っていくのを実感してきました。ただ一つ残念でならないのは、この間、女子部員だけによる団体演武が夢で終わったことですが、このことはこれからの部員達に託したいと思います。

最後になりましたが、次の50年目指して、これから何年続けられるか分かりませんが、体の続く限り、この素晴らしい少林寺拳法部の活動に少しでも携わって参りますので、今後とも皆様のご支援、ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。



防大少林寺拳法部 50周年に寄せて

准範士 六段 頼富 英武

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創部 50周年記念おめでとうございます。50周年という長い歴史を築いてこれたのも、OBや現役拳士の努力はもちろんのこと、歴代部長・監督・各顧問の先生方のたゆまぬ努力と支援があつてのことと深く敬意を表します。

さて、防衛大学校少林寺拳法部は昭和40年に当時第4大隊指導教官だった、故奥平正人先生（航空自衛隊小牧支部で、高橋法昇氏、森健太郎氏に師事）が少林寺拳法会として発足させ、当時10期生（香川出身者）を中心に活動を開始したのが始まりであります。その後、昭和43年に同好会、49年に部に昇格しましたが、もっぱら練習場所は屋上・芝生の上などでした。このような中、昭和48年関東大会新人戦での優勝を皮切りに、各学生大会等で輝かしい成績をおさめて来ました。昭和58年には総合体育館が完成して、雨風の心配をすることなく練習ができるようになり、現在に至っております。また開祖は生前良く「今後の日本の運命に一つの大きな影響を及ぼすのが、防大生・防大出身者である」と、口癖のように云っていたのを思い出します。現在も常にその技術レベルは高く関東、全日本、全国大会、全自衛隊大会などでは数々の入賞等を果たしていることは全国に知られています。

私は昭和32年、陸上自衛隊善通寺部隊に勤務中に本部道院に入門（106期生）し、当時は開祖を始めとして、そうそうたる先生方が多く居られて、相当に鍛えられる毎日でした。翌年4月に旧武芸専門学校第2期生6号生徒として入校しました。同期には、同じ自衛隊員として「北海道の開拓者」として名高い西内一、後に高知後免道院の西村達夫（山崎先生の高校生時代の道院長）等、多士済済の拳士がいました。当時は別派・破門事案等々いろいろなことがありました。昭和34年には許可をいただき、陸上自衛隊少年工科学校（現在の高等工科学校）の顧問を経て、防衛大学校には創立30周年の頃（平成6年頃）から練習に参加させていただいております。

さて、現役拳士の皆様方に言いたいことは、自己の可能性を信じ、信念を持って行動し、半ばは他人（ひと）のことを考えられる優しさを持った、社会に必要とされるリーダーになれるように頑張ってください、ということです。最後になりましたが、各OB・OG・現役の皆様のご尽力に敬意を表し、これまで防衛大学校少林寺拳法部にご支援を賜りました関係者の皆様には今後も変わらぬご指導と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

結 手

各期寄稿（代表からひとつ）

10-59 期生



※ 在りし日の練習場・練習風景

上段左：芝生場は現在総合体育館のある場所で、昭和 57 年頃までお世話になった（後方は 6 号学生舎）。

上段右：手前の 2 棟が旧人文館。さらに奥に旧本館、左奥に防衛学館と続く。芝生場および防衛学館・旧人文館および学生舎屋上は、少林寺拳法部学生の鎮魂・演武・乱捕すべての修行・練習場所となる。

下段左：1～8 号舎舎前突き進み。現道場（総合体育館）がない時代は、舎前・学生舎屋上・旧人文館各階や屋上・防衛学館、ラグビー場・アメフト場・陸上競技場等すべてが練習の場であった。

下段右：旧人文館における基本練習・突き進み（手前は 25 期生坂本氏）。雨天時は旧人文館廊下および階段（体力練成）を使用してダッシュ・サーキット・ウサギ跳びなど、あらゆることを実施した。壁に体がぶつかりそうな中での壮絶な若人の気合い・声が大きすぎて、人文学教官の苦情を受けたこともあった。



故奥平先生の情熱に導かれた少林寺拳法部

10 期生 主将 三井 光夫

合 掌

「君は確か丸亀の出身だったね。」「はい。そうですが-----。」

昭和 40 年のある日、5 大隊所属の私は 4 大隊指導教官に呼ばれた。何かと駆けつけた私をソファーに座らせたその大隊指導教官は、おもむろに口を開いた。このやりとりが防衛大学校少林寺拳法部 50 年の歴史を創り出す口火となったのである。

大隊指導教官として着任されたばかりの奥平正人 2 空佐は、少林寺拳法の本山が多度津市にあることから、隣の丸亀市出身の私は少林寺拳法についてよく知っているはずだと思われたのだ。それで少林寺拳法部の創設を託そうとされたのである。ところが、私は多度津に少林寺拳法の本山があるということぐらひはさすがに知っていたが、それ以外何も知らなかった。中学校時代は地元の丸亀高校進学が、そして高校時代は大学合格が目標で、他に目を向ける余裕などなかったのである。周囲ではそれが普通だった。こんな私だから、当然、やんわりとお断りをした。私は当時、軍事史研究部の部長で夏休みには地方で合宿もしなければならなかった。しかし、幸いなことにその部のお陰で運動部は同好会よりもっと束縛のないサークルに入っていた。そのため運動部の転部で生じる問題はなかった。

奥平指導教官からそれ以降も呼び出され、少林寺拳法がいかに防大生にはうってつけの武道であるかを懇々と説かれた。結局、私は説得されることになるのだが、同教官に一本気な男気を感じたからだったと思う。

少林寺拳法のサークルを始めるにあたって問題は、まずは同志（部員）を集めること、次に練習場所を確保することであった。いずれも厄介な問題で、殆どの学生はいずれかの運動部に所属し、練習場所も体育館等は既存の運動部や同好会に占拠されていた。しかも、当時、学校は多くの運動部の存在は対外活動を弱めるので、運動部は整理統合し減らすべきだという考えに支配されていた。

このような逆風のなかで、同志を集めることは容易ではなく、参集してくれた同志も他部から転じた者が多かった。しかし、これがそうでなくても格闘技の部の新設ということで対抗意識剥き出しの空手部との間で、感情的対立をさらに深化させる一因ともなった。私と同期の K 君は人文科学館の屋上で深夜、彼等と一触即発手前の状況になったこともある。今も残念ながら彼らに対する感情には、同期でありながら心にながしかの障壁がある。だが本当に心理的に苦労したのは、先輩から圧力を受けたに違いない 11 期、12 期、13 期の後輩の同志であっただろう。しかし、彼等から弱音を一言も聞いた記憶はない。

練習は人文科学館等の屋上や校庭で行った。そのうち幸いなことに合気道部から不要に

なった量を譲り受けることができた。これで人文科学館屋上での寝技の演練にも支障をきたさなくなった。次第に同志も増え、練習環境も格段に良くなっていった。練習の指導者は勿論、奥平教官で多忙な業務の合間を縫っては姿を見せ、課題を与え熱心に指導された。やがて奥平教官が外部から少林寺拳法の諸先生方を招請された。これより先、部長の重責は宮田教授（卒業研究指導教官）にお引き受けいただいていた。こうして体制が整う中で練習も一段と身が入るようになり、夏の合宿時頃には、防大少林寺拳法部としての形を取り始めていた。奥平教官や諸先生方のご尽力もあり、秋になると、初めて昇段審査にも参加できるようになった。

この頃になると同好会への昇格願望が一層強まっていた。だが、創設初年度でこの願いは遂に叶わなかった。しかし、それだけに当時の同志諸氏の頑張りや団結力には迫力があった。黙々と励む彼らの姿を思い出すと、今でも彼らにはただただ頭が下がる。

50年前の記憶を正確に思い出すことは容易ではない。しかし、奥平先生の小柄で物静かな体躯に秘める熱い一本気な闘志はいまなお鮮明に思い出す。私の結婚式にも参列していただいた（写真）。奥平先生が亡くなられたことを知ったのは遺憾ながらつい最近のことである。先生のご逝去に対し、心の底からお悔やみを申し上げたい。

今日、少林寺拳法部は防衛大学校でも代表的な運動部に成長したと聞く。これは故奥平先生の少林寺拳法にかける熱き思いが連綿と続いていること、少林寺拳法連盟の諸先生方の熱心なご指導や歴代部長のご支援の賜物であること、そして何よりも多くの後輩諸氏のご努力の結果だと思う。改めて50年間の成果と発展に対し、ご祝辞を申し上げる。

「君は確か丸亀の出身だったね。」

「はい。そうですが-----。」

筆を執った時、故奥平先生のどっしりとしたあの声が今一度聞こえてきた気がする。

結 手



【 結婚式にかけつけてくださった奥平先生（左） 】



草創期

11期生 主将 上田 勇作

合 掌

2学年の時だった、少林寺拳法とやらの同好会ができると聞いた。

少林寺拳法？どこかで聞いた名だ。興味に惹かれて説明を受けたが、武道で柔・剛併せ持つのは珍しい。男子として人並みに強くありたかったし、成る程面白そうだと興味を持った。それが少林寺拳法との付き合いの始まりだった。10期生で3学年の三井先輩がキャプテンとなって纏めることになったが、合わせて30人くらい集まったろうか。

顧問は大隊指導官の奥平2空佐で、学生舎の屋上で練習がスタートし、やがて人文館の屋上へ移る。

東京の道院から定期的に先生(加藤先生、阪東先生など)が来られて拳法の基礎を教えて頂いた。時折東京に出向いて、三崎先生から手ほどきを受けるなど、少しずつ技量の向上を図っていくことになるが、いずれにせよ手さぐり状態の出発だった。10期生は苦労されたことと思う。それでも毎日の練習で、少しずつ技量も上がり翌年には多くの学生が黒帯となる。

私は自分なりに熱心に練習したが、3学年の夏休みを郷里鹿児島で過ごすうちに、ふと「帰校の途中本部に顔を出してみよう」と思った。新学期が始まる10日程前に多度津の本部道場を訪ね、事情を説明して練習に加わらせて頂いた。当時の本部道場はまあまあの広さで多くの拳士が練習に励んでいた。そのうち開祖宗道臣先生から呼ばれた。

「そうですか、防衛大学から来ましたか。本部の雰囲気味わって下さい。国の防人として武道はとても大事です。ぜひ頑張ってください」と励まされた懐かしい思い出。

町の飲み屋で宗道臣先生について聞いた。「昔はこの辺りも結構やくざがいてね、あの先生がやくざと大立ち回りをしたのを見ましたよ。大勢の相手を道路や川に次々に投げ飛ばしてそれはすごかった。以来やくざも大人しくなったね。」と女将が言った。よほど強かったのだろう。本部道場にはかれこれ5日ほど通わせて頂いて防大に帰った。

2学期になると運営が11期生に引き継がれたが、私が2代目のキャプテンに指名され、坂元正昭君を副、佐藤正秀君をマネージャーに決めそれぞれの任を負ってもらった。

こうして少林寺拳法も徐々に基礎を固めるが、何と言っても奥平会長のお力が大きい。陰に陽にお力添え頂いて今日がある。

私ももう七十を数え、卒業以来お目にかかる機会がなかったことが悔やまれる。

防大少林寺拳法部の伝統を守り、一層の活躍を希望して止みません。

結 手



多くの好意と情熱に支えられて

12期生 副将 橋田 典幸

合 掌

東京オリンピックと言えば50年前の1964年秋、あの感動的な開会式の入場行進において各国のプラカードを持ち堂々の先陣を切ったのが当時1・2学年の12・13期生でした。そして、この感動の秋のイベントと入れ替わるように防大少林寺拳法部が小原台に産声を上げたのです。

昨年、2020年の夏季オリンピック開催地が「おもてなし」で象徴される招致チームのすばらしいプレゼン効果もあり、50年振りに東京に持ち帰ることが出来ました。しかし、おもてなしの気持ちだけで厳しい招致合戦を乗り切れた訳ではないでしょう。招致チームを動かすスタッフ陣に全力を振り絞らせ、主役であるプレゼンターの潜在能力と招致に対する意識を呼び覚まさせ活性化した結果が招致成功につながったものと考えられます。

奥平指導教官主導により創設された防大少林寺拳法の特徴は、突き蹴りと投げ固めの組み合わせによる剛柔一体の技術内容と肉体と精神のバランスをとり修養する拳禅一如の人づくりを重視したものであり、その内容の濃さとユニークさは他の校友会活動では例を見ないものと言えました。

もともと野球一筋で体力測定1級の体育会系を自認する私は大学では個人競技にトライしてみたいという強い願望を持っていました、しかし、意中の部活に巡り合えないまま硬式野球部に籍を置いていました。そのような状況下の1学年の後半、少林寺拳法設立の案内を耳にし、期待と若干の不安な気持ちはありましたが躊躇することなく4大隊屋上の練習場を覗いてみました。コンクリートの道場では奥平教官の先導による唱和「己こそ己の寄るべ己をおきて誰に寄るべぞ。よく整えし己こそまこと得難き寄るべなり」に続き、蹴り投げ固めの基礎練習と一気に少林寺モードに誘い込まれました。薄っすらと汗をかきお互いに合掌しその日の練習を終えた時、日々の学生舎生活の多忙さを忘れ、無心になっている自分に気付き、何とも言えない充実感を感じたものです。

少林寺拳法部に入部する動機は人それぞれであり、千差万別であったかと思えます。防大少林寺拳法部は創設時から常に主役である参加部員の期待と充実感に対する潜在意識を呼び起こしてくれました。奥平教官は柔和な表情、穏やか大分弁の表面的印象とは裏腹に組織(選手)管理の最先端をいくといわれるカウンセリングマインドの啓発と陽転思考(プラス思考)を先取りして実践していました。また、当時、少林寺拳法連盟から派遣されてくるコーチ陣は技の真髄に迫るきめ細かな指導をされ常に部員の新鮮な練習意欲を啓発するものでした。そして何よりも増して部員一人一人がこの少林寺拳法部の発展定着に丸

となって努力している姿に接し、多くの人々に支えられ防大少林寺拳法部が成り立っているのだと強く感じました。

そして、12期生として先人のこのような立派な伝統を引き継ぎ、常に実力(体力・技量・気力)の向上と少林寺拳法部の発展を願い日夜努力をしてきたと自負しています。4年生の夏合宿は総本山お膝元の多度津で実施し灼熱の炎天下、金毘羅宮までの往復24キロを道着・草履で隊伍を組み走破したこと等が懐かしく思い出されます。何よりも、新入学生に対する校友会活動の一環としての合同の部活紹介に初めて参加を許され、主将と二人で組演武を披露したところ、その迫力ある演武をみて入部を決めたと15期生数名が入部を申し込んできた時は後継者の育成に形ある貢献が出来たと、今でも感慨深いものがあります。

結 手



※ 【 スナップ② 創設期における夏季合宿風景 】

1968(昭和43)年、当時13期生政権であったが、高本主将(平成18年逝去)の故郷である岡山県高梁市にて実施された。現在は校内合宿が主流であるが、30期生代初頭までは校外合宿を行うのが普通であった。創設期の校外合宿風景がわかる貴重な写真である。上段は地域の方々とのふれあい。下段は演武会の風景である。



防衛大学校少林寺拳法クラブ時代の思い出

13期生 副将（乱捕担当） 白石 克成

防衛大学校少林寺拳法部の部員・OB及び指導者の皆様におかれましては、御家族共々御健勝のことと拝察いたします。

さて、今般、第13期生あてにも「防衛大学校少林寺拳法部50周年記念行事記念誌」原稿提出依頼がありました。本来ならば、主将であった高本俊之君が寄稿されるべきではありますが、誠に残念ながら、7年前に急逝されたため、小生が代わって、高本君の思い出等を主体に申し述べます。

昭和40年、当時第4大隊指導官の奥平2空佐が、学生の徳育・体育の育成を狙いとして、少林寺拳法による修練の場（道場）を防大に立ち上げられました。創設時は、全学年同時に鍛錬を開始し、最下級生である13期生は、後に主将となる高本君、マネージャーとなる戸田君及び小生の3名でした。当時は、周囲からは、単なる同好の士の集まり（クラブ）と見なされ、学校からも校友会活動として認められていませんでした。更には、部員確保の競合等の理由から、既存の各部から、わがクラブの生存に関わるような、いわれ無き圧力等も受けておりました。しかしながら、大半のクラブ員は、臥薪嘗胆の心境で「自分の意志でこの道（少林寺拳法）を選んだ」として認めさせるというプライドを保持しつつ無心に鍛錬に励んでいました。高本君は政権交代の折、少林寺拳法鍛錬の環境を整える為、学校側にクラブを「少林寺拳法同好会」として認めさせるという明確な目的をもって主将に上番しました。そして普段の鍛錬、対外試合での成果獲得及び代議員の信任を基本方針として、一切の妥協を排して、クラブを運営しました。

この為、他の部から「生温い練習だ」と指弾されない為の、休日無しの鍛錬日の設定、春休み全期間を充当した春合宿及び前・後段2回の夏季合宿等シゴキに近いハードな鍛錬並びに成果獲得の即効性を期す為の、演武要員及び乱捕要員の特化施策等、いま振り返ってみれば、かなり過激なやり方であったと思われれます。もちろん、当時の後輩諸兄の無理を強いた面も有り、その副作用として、皆から「鬼の高本、般若の白石」と呼ばれたのも致し方が無かったと思っております。

その結果として、クラブ員の急増、15期生の関東新人大会新人戦団体乱捕優勝ひいては念願の同好会への昇格等高本君の智略・努力が実を結びました。「以逆境 為順境」と言いますが、少林寺拳法クラブ創成期の主将として責任を果たした高本君の達成感に満ちた清々しい笑顔は、約50年を経た今でも小生の脳裏に交わっています。

10期生からの設立の歴史は逆風の中からはじめましたが、現在防大少林寺拳法部は部員他関係者の方々のお力により順風満帆です。奢る事無く、更なる高みを目指して日々修行に精励されんことを第13期生一同、祈念いたしております。



創立 50 周年を記念して

14 期生 副将 中原 勇

合 掌

(元奥平会会長)

4 大隊屋上で産声をあげた防大少林寺拳法部・奥平会が 50 周年を迎えることができ、感無量です。

防大卒業から 43 年、学生時代が懐かしく思い出されます。

昭和 41 年夏、奥平先生が 4 大隊の大隊指導官（2 等空佐）をされており、小生は 1 学年で 423 小隊に所属しておりました。クラブ活動は、当初軟式テニス部に入っておりましたが、小隊の同期生に「軟派テニス、軟派テニス」と言われ、ひそかに部を替えようかと考えている頃でした。

ある日、トイレで、奥平大隊指導官が隣で用を足しながら「君、少林寺拳法をやらないかね」と語りかけられたことが、人文館屋上に足を運ぶキッカケとなり、当時、同好会にもなっていなかった防大少林寺拳法愛好会(?)に入ることとなりました。

13 期生が 4 学年の時に「同好会」として認められ、本格的に胸を張ってクラブ活動に専念できるようになりました。

14 期生が 4 学年となり、クラブ活動の紹介の場があり、私と今井拳士が演武を披露。部の紹介をした高須主将が「少林寺拳法部に入れば、中原学生のように学生隊学生長になることができます。是非、人文館の屋上に見学に来て下さい。」と PR。

翌日から、来るわ来るわ、50 人を下らない新入部員を迎えることとなり、4 学年の指導部はてんやわんやの大忙し。数年後には部員数が 100 人を超えるというような人気ぶりでした。忙しい中にも新入部員たちの指導に汗を流し、日々充実した部活動でした。

昭和 52 年、防大の小隊指導官として再び小原台で勤務する機会を頂き、21 期生から 24 期生の皆様と拳法の練習をさせて貰いましたが、この頃の防大少林寺拳法部は「団体演武最優秀」「組演武最優秀」などと防大少林寺拳法ここにありの勢いのある、実に逞しく、新たな伝統を築き上げていました。学生達のたゆまぬ修行と三崎先生、田村先生、神田先生などのご指導の賜であったことを思い起こしている昨今です。

陸自での勤務間、少林寺拳法の修行を継続することができなかつたことが、退官後、悔やまれる所ですが、現在、陸海空の各部隊において、後輩拳士諸官が隊員の皆様や子供達と盛んに修行に励んでいると聞きおよび、防大少林寺拳法部の OB の 1 人として、大変心強く思っております。

奥平会の会員の皆様が、防大をはじめ各部隊等において、今後も益々ご健勝でご活躍されんことを祈念して、50 周年記念にあたってのご挨拶とさせていただきます。

結 手



少林寺拳法部創立 50 周年によせて

合 掌

15 期生 主将 花房 晃夫

防大少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。

今年は 62 期生が入校・入部されたわけですが、創部 50 年かと思えますと小原台で部長・監督・顧問・先輩の方々のご指導を頂きながら心身鍛錬した青春時代が走馬灯のごとく浮かんでまいります。

思い出すままに当時のことを書いて見たいと思います。我々 15 期生時代は、もちろん同好会であり、旧人文館屋上で日々練習し実績を積み上げ、部に昇格することが最大の目標でありました。それがため邪道とは認識しつつも、実績をあげんがために、演武グループ、乱捕りグループに区分して組織化し、練習に励んでいたところです。

また、部昇格の基盤を充実すべく校友会の運動専任委員として少林寺拳法同期の三嶋君に頑張ってもらいました。

更に淡路島での夏合宿では引率いただいた 4 大隊指導官から折角の機会だから鳴門の渦潮見学を企画したらどうかということで、会計係の岡君を大いに悩ませましたが、往復の駆け足での見学を実施し合宿の良き思い出に成りました。

全日本大会乱捕りの部において、最優秀賞を受賞するとともに関東新人戦大会乱捕りの部において、我々 15 期の新人戦優勝に引き続き、後輩諸君が優勝という実績を挙げてくれました。おかげで神奈川大学から合同合宿の依頼があり、初めて他大学との合同練習をお互いの学校において実施するようになりました。

我々 15 期ではまだまだ実績不十分で、部昇格は後輩の皆様をお願いすることにしましたが卒業数年後、北海道勤務中に部昇格の連絡を頂き本当にうれしく思いますとともに感激したことを思い出します。

今後とも益々の少林寺拳法部のご発展を心から祈念申し上げます。

結 手



【スナップ③ 練習場周辺の状況】 左：現球技体育館・防衛学館の手前には飛び込みプールがあり、その左となりに「芝生道場」が見える。右：防衛学館は昔 L 字形だった（15 期生山崎先輩提供）。



防大少林寺拳法の思い出

16期生 主将 芦岡 広明

合 掌

防大少林寺創立 50 周年を迎え、心からお祝い申し上げますとともに、一人の拳士として、創立 50 年間の一時期の青春において、その活動を担ってきたことを誇りに思うとともに、良き汗を流したものとして誠に、感無量を覚える次第です。

思い起こせば、昭和 43 年 4 月、山口県岩国市の田舎から、国家防衛の任に燃えて（？）防衛大学校に入校し、これからどのような生活になるのか不安を持ちながら毎日過ごしていた時を思い浮かべます。

その時に偶然同じ部屋であった 13 期の先輩から人文学館屋上で少林寺拳法の稽古見学を案内され、なんとなくこれからの武人として生きるべき道の必要性を感じ、自己改革を目指し入部したのがきっかけでした。

当時は、少林寺拳法の活動 6 年目で、まだ部ではなく同好会でした。それから 4 年間、人文館屋上での毎日の練習、そして厳しくかつ楽しい思い出となった夏の合宿を、先輩、後輩そして同期生に助けられ無事に、拳士としての試練を成し遂げることができたことに感謝しています。特に記憶に残っているのは、2 年生の時関東大会の団体乱捕りで 3 位入賞になったこと、3 年生での香川県の多度津において初代の宗道臣先生から直接指導を受けたこと、そして 4 年生の時、全日本大会において個人乱捕りで 17 期の後輩を日本一の栄光を獲得したことを今でも思い出します。又、これらの先輩等が残した輝かしい成果をいかに反映するかを考え、当時 100 名以上の同胞が集う同好会（防大最大の規模）としていかに部への昇格を目指すべく、同窓会役員に同期生の配置をもくろみ、その礎を築き後輩に託し、何年後、その実を結んだことを知りました。

防衛大学校卒業後も、少林寺拳法の教えを自衛官の心の支えとして勤務して来ました。その教訓とは、「己こそ己の寄るべ、己をおきて誰に寄るべぞ、良く整えし己こそ誠得がたき寄るべなり」又、「半ばは他人のために、半ばは己の為に」でした。今もってその言葉は心の奥に生きています。

最後になりましたが、これからの防大少林寺拳法部の益々のご活躍とご発展を祈念いたしますとともに、防大少林寺拳法部の仲間のご健勝を祈願し、創立 50 周年のお祝いの言葉といたします。

結 手



部創立 50 周年によせて

17 期生 主将 澤 博海

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。

これもひとえに、顧問、監督の先生方を始め、その年その年に政権を担った皆様方や関係者の努力と鍛錬のたまものとお慶び申し上げます。

創立 50 周年によせて何かということですが、私が在籍した昭和 40 年半ばごろの防衛大学校や少林寺拳法部の思い出を述べてお祝いのお言葉に変えさせていただきます。約 40 年前ですので思い違い、勘違い等もあるかと思いますがご容赦願います。

私が入校した昭和 44 年当時、日本は 70 年安保闘争の学生運動が非常に激しく、東大安田講堂事件で東大入試が中止になったり、その前年の秋には新宿闘争で騒乱罪が適用され、多くの逮捕者が出たりして、日本の世情が何かと騒々しく落ち着かない毎日の連続でした。

世界に目を転じると、ベトナム戦争が泥沼化し、横須賀が母港の空母エンタプライズがベトナム戦争からの修理や一次休養で横須賀に帰ってくるたびに、反戦団体の抗議デモが行われ、また、横須賀の夜の盛り場では、米兵が飲んで暴れてアメリカ軍の MP が取締りをしていたりで、非常に物騒だったことを思い出します。

防衛大学校は、学生隊は 5 大隊編成で、1 部屋 8 人、1 年生から 4 年生まで各学年 2 人ずつの構成となっていました。

少林寺拳法部は、まだ同好会で部昇格を目指して、部員数の拡大と猛練習での対外試合で好成績をあげることを最大の目標において、日夜一生懸命活動していたように思います。なかでも、最大の思い出は人文館屋上のコンクリート製の道場です。夏は日光でコンクリートがやけてとても暑く、冬は気温の低下で大変冷たく感じながらの練習でした。雨が振れば、人文館の 4F が、急遽、室内練習場となります。練習環境は決して恵まれたものではありませんでしたが、部の先輩諸氏の明るい雰囲気での指導や、常に前向きに部の発展を目指したひたむきな思いでの活動で、時には厳しいながらも、とても楽しくなごやかに練習していたことが思い出されます。

17 期は、1 年生が多数（約 50 人）入部し、部員数が一挙に増大したと当時の高須主将（14 期）が大変喜んでおられました。さらに、猛練習の成果も少しずつ出はじめ、対外試合での成績も徐々に良くなり、17 期が在学中 4 年間では、2 年生の時に（昭和 45 年）、関東学生新人戦で団体乱捕優勝、団体演武 3 位、3 年生の時に（昭和 46 年）、全日本学生個人乱捕優勝、関東学生個人乱捕準優勝、4 年生の時に（昭和 47 年）、全日本学生団体乱捕準優勝、関東学生団体乱捕優勝と好成績を残し、関東地区での強豪校の足掛かりを作ることができたと感じています。

在校中の少林寺拳法部の活動を通じて、厳しい練習の中、楽しい仲間とのふれあい、そして素晴らしい先輩後輩と巡り合うことができ、少林寺拳法の教えとあわせて、その後の自分の人生の基礎を育んでくれた4年間であったと大変感謝しております。

最後に、今までの50年以上に、今後の50年さらにその先も、防衛大学校少林寺拳法部がますます発展することと、顧問、監督の先生方、先輩、後輩、同期の諸氏の方々のご繁栄とご健康をお祈りしてお祝いのお言葉といたします。



【 スナップ④-1 旧人文館における練習風景 】

左：旧人文館練習風景。中：指導をする政権学生（15期生） 右：旧人文館での集合写真（17期生）。当時は直接コンクリートの上で練習することが多かったが、時々古絨毯を使用することもあった。コンクリートで足は鍛えられた（？）。



【 スナップ④-2 】

17期生政権時のスナップ
左：教場におけるミーティング風景
右：夏季合宿における修行風景



【 スナップ④-3 大会時の出場風景】

17期生政権時のスナップ





防大少林寺拳法部の 50 周年記念に寄せて

18 期生 副将（演武担当） 笠原 久

合 掌

防大少林寺拳法部の創立 50 周年を、お祝い申し上げます。思い起こせば、18 期生は昭和 45 年 4 月に入校し、折からのブルースリー映画「燃えよドラゴン」の影響もあってか、当初 50 名以上の同期が少林寺拳法同好会の門を叩きました。卒業時には、22 名になりましたが、ずっと生涯の仲間だと思っています。本投稿は、18 期の総意に基づいて記述したいところではありますが、投稿までの時間が限られているため、笠原の独断と偏見に満ちた文章になることをお許しください。さて、私が校友会で一番苦しかったことは、1 年生の淡路島にける夏合宿で、私の人生で体力的に一番苦しかった記憶です。その後の Cutter 訓練や断郊訓練の何と楽に感じたことか、また、自衛隊生活を通じても夏合宿以上の苦しさはありませんでした。また、思い出深いことは、4 年生の全日本大会での上田正文君と白数裕樹君との 3 人掛け演武でベスト 4 になり、結局、ベスト 4 になった各大学の演武に甲乙付けがたいということで、優勝演武が無かったことです。また、その年の自衛隊音楽祭りに、儀仗隊とともに防大の代表として参加し、東京都体育館でスポットライトを浴びたこともありました。

4 年間は、15 期、16 期、17 期の偉大な先輩方を始め、優秀な 19 期、20 期、21 期に支えられ、対外試合の好成績とともに部員数で防大随一の同好会でした。特に乱捕り（3 年生までの大会では種目としてあった。）では、向かうところ敵無しで、ほとんど優勝し、2 位以下になることは稀なことでした。一方、演武の各大会における成績については、全く記憶がありません。18 期主将の勘米良幸一君（平成 13 年に逝去）は、「気は優しく、力持ち」を絵に描いたような人物でした。ひとり少林寺ばかりでなく、他の部からも一目置かれ、航空要員でしたが陸や海の学生からも慕われていました。当時も今も「適わないなあ」という感想です。彼の人望で、明治大学や慶応大学等に呼びかけ、6 大学の練習会（乱捕りが主体）をやることになったのも、4 年生の時でした。

ここで、昭和 48 年以来 40 年間、ずっと思っていたことを記します。4 年生になって、21 期生が 60 名を越えるほど入門してきました。夏合宿（相模原青年の家）までに「やる気のある奴を絞ろう。」ということで、乱捕り担当副主将の長尾齊君と相談し、勘米良主将に談判して、約 1 ヶ月間、2 人で 21 期生を鍛えました。千本突きや千本蹴りを本当にやり、拳立ては毎回 100 回以上です。長尾君も私も、体重が 5 キロ減りました。21 期生諸君、長尾君と私は諸君を虐めたのではなくて、諸君を心から鍛えようとしてやりましたが、少し度が過ぎたことを、この場を借りてお詫びします。

私は少林寺拳法の教えの中で「己こそ己の寄るべ、己をおきて誰に寄るべぞ、よく整えし己こそ、まこと得難たき寄るべなり」という言葉を心に刻み、日々生活しています。今の時代、世の中の所為や、政治の所為にして権利のみを主張し、義務を果たさない者が多いように思います。まず、義務を果たしてしかるべき後に権利を主張すべきと考えます。そのためには、自己の確立が何よりも大切ではないかと考えています。

最後に、これまで多くのご指導ご鞭撻を頂いた方々に感謝し、防大少林寺拳法部の益々の発展と、ともに道を目指した皆様のご健勝を祈念して、お祝いの言葉とします。

結 手



【 スナップ⑤ 】

上段：1973（昭和 48）年全日本大会
時の三人掛演武

左から上田将文、笠原久、白教
裕樹の 3 氏

中央：左から笠原久、勘米良幸一（主
将・故人）両氏

下段：1973（昭和 48）年春の
本山合宿で本山門前

最前列：上田将文、上田の直後：川
原彰（故人）、後列右から：笠原
久、平原誠、近藤清司、麩澤章
雄（故人）の各氏





部昇格の年に改めて感謝！

19期生 前之園 敏雄

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年、誠にありがとうございます。私たち 19 期生が共に励んだ時から数えて 30 数年という年月の長さにあらためて感慨にふけるとともに、直接お世話になった 16 期、17 期、18 期の先輩諸氏そして 20 期、21 期、22 期の後輩の方々に感謝するのみです。すでに還暦を過ぎて数年経ちました。定かではない記憶に耽ってみたいと思います。

なんと言っても当時は、「人文館の屋上（コンクリート）」と「その周辺の芝生」更に「人文館（教室・廊下・階段）」全体が道場でした。

初めて、「目から火が飛ぶ・光線を放つ？」経験をしたのも人文館の教室で、2 年の時、17 期・18 期の先輩方との乱捕りの練習中のことでした。

当時「乱捕りの防大」の異名を放つに相応しい 17 期・18 期の先輩の方々に一矢を報いることのみ考えて、向かっていったことを思い出します。

残念ながら、乱捕りは、当時不幸なことが続発し、公式試合からは姿を消してしまいました。「乱捕り」の代わりにと記憶していますが、「那羅延演武」として種目が設定され、私は、同期の「園山」、「園部」と、或る人曰く「凸凹サンゾノ」として、関東大会をはじめ、多くの試合にも出させていただきました。

また、現在では、想像もできない「自衛隊音楽まつり」に防大少林寺拳法部が、「団体演武」で出演の機会を与えられたこともありました。

防大卒業後の数年間は、少林寺拳法に向き合うこともありましたが、残念ながら、ここ数十年は、その機会もなく、ただただ申し訳ない限りです。

そのような状況の中、平成 21 年から 3 年間、福祉施設の現場で働く機会を得ました。グループホームという認知症の高齢者の方が、共同で生活をされる施設です。当然、身体介護もありますので少林寺拳法で学んだことが多少なりとも活かされました。

最後に、少林寺拳法同好会の部昇格にあたり、温かい目で見守っていただいた校友会をはじめとして多くの関係者の方々、そして防大少林寺拳法部初代監督の赤瀬先輩、歴代第 4 大隊指導教官、森田顧問、田村監督、そして今は亡き丸川部長（先生）にあらためて御礼申し上げる次第です。

防大少林寺拳法部現役の皆様は、部創立 50 周年、そして 100 年に向かっの輝かしい年に道場を建てることを誇りに精進していただきたいと思います。

結 手



防大少林寺拳法部 50 周年に向けて

20 期生 主将 仲原 久晃

防大少林寺拳法部の皆様、創部 50 周年を迎えますこと本当におめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

私は 20 期学生として防大少林寺拳法部に在籍しておりました仲原と申します。このたび 50 周年を迎えるという話を聞きまして、50 年という時の重みをひしひしと感じております。

確か 10 期の先輩が部を創立し（当時は同好会でしたが）19 期の先輩の時に部に昇格したと記憶しております。私たち 20 期学生は先輩方が苦勞して苦勞して作り上げた少林寺拳法“部”をこれから受け継いでさらに発展させてゆくと、強い思いを抱いたことを今でもはっきりと覚えています。

その後、後輩の皆様がしっかりとその思いを受けつぎ、確固とした伝統を築き上げて下さったことは、本当にありがたく、また頼もしく感じています。

さて、20 期学生はほとんどが 60 才を少し過ぎた年齢になっております。もちろん私もそうですが、この年になりますと人生を振り返るにちょうど良い年だと思い、ずーっと振り返ってみることが多くあります。

その中であって、防大の 4 年間は異色の色彩を放っています。特にクラブ活動における 4 年間はそうです。

それはなぜでしょう。そしてどんな色彩を放っているのでしょうか。それまでご縁のなかった全国各地で生まれ育った若者が防大に集まります。そして偶然のようにクラブ活動を選びます。そして 4 年間苦しいことも楽しいことも共有し、ときに切磋琢磨します。

それだけでその期間が人生の中でひときわ輝くのでしょうか。否そうじゃないと思います。私はかつて TL 人間学の提唱者高橋佳子氏より「人間は魂存在である」ということを聞きました。今そのことを実感することが多くあります。防大の 4 年間のクラブ生活、それは、人間としての存在の大河の脈々たる流れと魂の系譜による累々たる日々の交点に出会った仲間との日々。

その仲間との間に生まれる友情・絆。人間としての深い出会いと一つの場(クラブ)において同じ目的と志をもって生きる日々は決して忘れることができず、心に刻印されています。暖かい光を放っています。

それは今になるととてつもない人間的郷愁と喜びの時となって、心の中にどっしりと居座っています。それこそが私の大切な心の宝です。それは魂と魂との出会いを少林寺拳法の技と心の鍛錬を通して、仲間との出会いを通してできたからに違いないと思うのです。

後輩のみなさん、様々な大会で成果を残すことも大事だと思います。でももう一つの大切なものを忘れないでください。外に現れる成果だけを求めるのではなく、内にある大切なもの、友情・絆・そしてそこから生まれる伝統。その脈々たる伝承があって初めて、今日の50周年を迎えることができたのだと思います。

さて後輩のみなさん、あなた方は何を残しますか？何を伝えますか？何を守りますか？10年・20年たつとその成果が表れます。

私は本当に防大少林寺拳法部が大好きですし、誇りに思っています。その様な同志が全国にたくさんいることを忘れないでください。どうか「防大少林寺拳法部の神髄はこれだ」というものを育み引き継いでいってください。どうぞよろしく願いいたします。最後に「防大少林寺拳法部に栄光あれ！！」



【 スナップ⑥ 20期生の勇姿 】



創立 50 周年を祝して

21 期生 湖崎 隆

はじめに

創立 50 周年、誠におめでとうございます。関係者のご尽力に心から感謝いたします。

私の郷里は香川県坂出市で、本部のある多度津市とは目と鼻の先です。父が開祖の直弟子であり、小さいころから少林寺拳法には興味があったのですが町の道場に通うまでには至らず、防大に入学してから始めました。50 周年の記念誌に投稿するにあたり、当時の思い出を紹介したいと思いますが、特に、印象の強かった事項について思いつくまま述べたいと思います。

満を持しての入部

小さいころから格闘技が好きで、また体が小さいので舐められたくないという思いも強く、入校してすぐ少林寺拳法の門を叩きました。当時はブルースリーの人気も手伝って、新入部員は 50 人を超え、部員総数は約 120 名で校友会最大ではなかったかと思います。校内を部員全員で隊伍を組み、大きな声で駆け足すると、みんながふり向くほど、その存在感は絶大でした。

初の全日本制覇！

何と言っても、第 10 回全日本学生大会において団体演武で初めて最優秀の成果を収めたことです。20 期生の指導の下、21 期生でチームを組み、来る日も来る日も練習に明け暮れたのを思い出します。当時の練習場所は旧人文館の屋上でしたので、団体演武をするのには狭く、専らプールサイドが我々の道場でした。同好会から部への昇格の関係もあって、全日本制覇に向けて必死に取り組んだことを思い出します。その後、後輩たちがこれに刺激されて全日本制覇を続けてくれたことを心から嬉しく思っている次第です。

下級生に対し「喝」注入

記念誌に相応しくない話題ですが、反省の意味を込めて紹介します。それは、外出帰りの下級生の態度が目にも余るので、ある部員が思わず蹴りを入れた事件です。その日のうちに当直幹部に報告され、ついには学校長の耳まで届く事件となりました。学校長は、「そんな暴力クラブは潰してしまえ」と怒りを露わにされ、我が少林寺拳法部は廃部の危機に晒されたのです。部員全員が頭を丸め、長期の外出禁止等深く反省の態度を示し、何とか許して貰いました。如何なる理由があろうとも暴力はいけません。部員全員が改めて心の鍛

錬のやり直しを覚悟した事件でした。蛇足ですが、21期生の卒業アルバムには、我が部員は全員丸坊主で写っており、反省は今も続いております。

おわりに

半世紀の間には、数々の栄光に隠れて何度か廃部の危機がありましたが、関係者のご努力で見事に乗り越えてきました。少林寺拳法部の教え、同門のつながりは素晴らしいものがあります。今祖50年、100年と膨大校友会の有力なクラブとして、真に有為な人材を育成する役割を果たして欲しいと願っています。

この度、私は全自衛隊少林寺拳法連盟の顧問を拝名し、再び少林寺拳法とお付き合いをさせていただくことになりました。微力ではありますが、防大少林寺拳法部の充実・発展に、少しでもお手伝いすることができれば至上の喜びです。



1975年度夏季防衛大学校合宿参禅記念

【 スナップ⑦ 1975年 本山夏合宿 20期政権 】



防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年に寄せて

22 期生 主将 吉岡 聖二

防大少林寺拳法部は昭和 40 年に少林寺拳法会として発足し、今年で創立 50 周年の節目を迎えることとなりました。私達 22 期生が 1 年生として入校した昭和 49 年は、少林寺拳法同好会としての活動の成果が認められ、念願の少林寺拳法部への昇格を果たした年でもありました。19 期から 22 期迄の部員 120 名で祝杯を挙げた時の様子が昨日のことの様に思い出されます。この半世紀に及ぶ歴史と伝統を受け継ぎ日々研鑽されている現役拳士の方々に敬意を表しますと共に、意義ある節目に 50 周年の集いを企画された実行委員会の皆様のご尽力に深謝致します。

防大卒業後、久しく少林寺拳法の活動から遠ざかっていたところ、縁あって地方協力本部長として香川県に赴任する機会を得ました。その時の金剛禅総本山の思い出について触れてみたいと思います。着任の前年となる平成 20 年初春に少林寺拳法全国自衛隊大会が、地元香川県善通寺駐屯地で開催（24 期主将出口 OB 他の尽力）されたこともあり、本山でご活躍されている先生の方々と公私にわたり懇意にさせていただきました。

本山の恒例行事である達磨祭、新年の鏡開き、演武大会、武専の入校・卒業式等の数多くの行事に来賓として招待頂き、自衛官の制服で出席すると共に懇親の場においては、開祖がご健在であった頃の思い出話で盛り上がるのが常でありました。また、30 年ぶりに仰ぎ見る本堂は、その格式と重厚さにおいて変わることなく、二階中央に位置する講堂に足を踏み入れた時には真夏の酷暑の中、他大学の学生と共に練習し開祖の話に聞き入った若い日の記憶が鮮やかに蘇りました。一方、多度津の町並みはその趣を変え夏合宿で毎年利用した木造二階建て宿と、それらが連なる情緒溢れる風景は既に無く少しばかり残念でもありました。

防大で少林寺拳法を学んだ多くの皆さんも同じだと思いますが、少林寺拳法の理念である「半ば自己の幸せを、半ば他人の幸せを」との教えは防大卒業後、社会人になってからも心に残る言葉となりました。思い返せば、人文館のコンクリートの屋上で日々唱和する聖句、道訓、信条等が厳しい練習で疲れた身体に心地よく共鳴し、4 年間の部活を通じて少しずつ心の中に凝縮していったのかも知れません。それらの言葉はいつの間にか社会の中で組織人として生きてゆくうえでの大切な道標となり、バランスのとれた人間関係を作り、社会と調和した人生を歩むための貴重な教えとなりました。

早いもので、22 期生は昨年で全員が定年を迎えました。同期は何歳になっても気持ちが通じ合う、かけがえのない仲間です。定年となり住む場所、仕事の業種も様々となりまし

たが、これからも連絡をとり合い、刺激し合い、励まし合って共に豊かな人生を過ごしてゆきたいと思う今日この頃です。

最後になりますが、本記念行事が 50 周年を祝う素晴らしい会になりますとともに、これからの 50 年、少林寺拳法の進むべき方向についても語り合える有意義な機会となれば幸いです。

—合掌—



【スナップ⑧-1 1976年 本山春合宿 防衛大学校 松陰女子学院生とともに 合同合宿 22期政権】



【スナップ⑧-2】

22期政権
夏合宿風景





防衛大少林寺拳法部入部の思い出

23 期生 主将 三木 元秀

「おい、大丈夫か？がんばれ！」

昭和 50 年 8 月の 1 年生の夏合宿で、京都府宇治市の黄檗宗万福寺の修練道場で行われた合宿において、京都の暑い夏とともに、百人を超える部員が千本蹴り、千本突きはもちろん、拳立て、腹筋、屈伸蹴りと繰り返される体力運動、型の練習、上級生との乱捕練習に加えて、天ヶ瀬ダムまでのランニング、そして座禅修行も取り入れられたもので、熱い思い出が残っています。

その時上級生から掛けられた激励の声で夏合宿を乗り切りことができ、そして 1 年生～2 年生～3 年生、上級生へと学年が進むにつれ指導的立場になって行き、部のことを推進していくときにも、エネルギーの源となる言葉になりました。

当時、すでに全日本学生大会、関東学生大会等で、立派な活躍をしていた先輩たちに続けと、よく練習したと思います。

その甲斐あって、そして先輩方や同期はもちろんのことですが、後輩たちの力強い応援バックアップもあり、全日本学生大会団体演武最優秀、関東学生乱捕大会優勝等の経験をする事ができました。

本当に良い経験ができたと思いますし、その源となったのは、「先輩、後輩そして同僚」がお互いに気遣う声（心の声も）を掛け合っていたからではないかと思います。

23 期同期の陸幕長・岩田清文君、中央即応集団司令官・日高政広君も、全日本一の経験を踏まえて、堂々とした指揮官振りを発揮されていると思います。

今後とも、部の伝統を継承されて、大学少林寺拳法界に屈指の存在感を保ち、そして後輩の方々が陸に、海に、空に、存分の活躍をされますように祈念申し上げます。



【スナップ⑨ 左:23 期生一同 右:第 13 回全日本大会(昭和 52 年) 団体演武最優秀(23 期生)】



50周年に寄せて

24期生 主将 出口 潔
(榭見)

合 掌

防大少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。

24 期生が卒業して 34 年、時間が経つ早さを実感しています。入校当初、少林寺拳法部に入部した同期生は 40 名以上いたと思います。当時はブルース・リーや空手ブームだったので、大学日本一の少林寺拳法部に憧れて情熱を抱いて入部した者が多くいましたが、卒業時には二十数名になっていました。しかし、後輩期が毎年数十名入部していたので、常に部員が 100 名を超える防大一の大所帯のクラブでした。

1 年生の時は、4 年生の先輩方の強靱な肉体と威力ある突き蹴りに憧れ、体力増強に明け暮れ、また納得いくまでサンドバッグを突き蹴りする毎日でした。2 年生の時は、3・4 年生のキレと冴えのある演武に魅了されました。鏡の前に立ち、上級生の剛法や柔法を、見様見真似で繰り返し練習する毎日でした。3 年生の時は、関東及び全日本大会での団体演武の連覇、そして学生乱捕大会での常勝の伝統を守るために必死でした。人文館屋上やプール横の芝生で血まみれ泥まみれになりながら練習し、さらに毎晩消灯後に学生舎屋上に通って、堅い胴が壊れるまで突き蹴りに励みました。4 年生の時は、24 期政権として先輩期が残された伝統を継承していくために、24 期生一丸となり、後ろを振り返らずひたすら走り続けたように感じます。

21 期生の、関東及び全日本大会で話題になった三人掛。強烈な印象が残る演武中での飛び後ろ廻し蹴りとトンボ返りによる後方への受身。22 期生の、関東乱捕大会での絶対的な強さ。必ず勝つという安心感のある先輩方の戦い。そしてグラスファイバーの堅い胴を蹴り割る威力。23 期生の、少林寺拳法 30 周年記念式典での一糸乱れぬ団体演武披露。防大の名声を更に高めた素晴らしい演武。私は学生生活を共にした諸先輩方の素晴らしい後姿を、ずっと追いかけていたように思います。24 期生政権の初めての大会であった関東学生乱捕大会は、全国各地の乱捕大会等での事故のため中止。また、関東及び全日本大会も、他大学の少林寺拳法部の事故等のため中止となりました。24 期生政権として担う大会が全て中止され、目標を見失いかけた時期もありました。

そういう状況にあって自衛隊の大会に参加したのは 24 期生の時からでした。小牧基地で開催された第 6 回全自衛隊大会に特別に参加させていただいてから、防大と自衛隊少林寺拳法の繋がりができて現在に至っています。また、本山夏合宿で開祖から直接ご指導いただき、防大生に四段の特別昇格考試の機会を与えるとわれ、三段と四段の昇格審査を続けて受験する貴重な体験をすることができました。開祖のご指導には、自衛隊幹部とな

る防大生に対する強い期待と熱い思いが込められており、それを直に感じる事ができました。

4年間の防大生活は、少林寺拳法で始まり、少林寺拳法で終わりました。常に良き仲間と素晴らしい先輩・後輩に恵まれた貴重な時間でした。今後も防大少林寺拳法部の良き伝統のもと、益々発展していくことを祈念しております。

最後に、私が防大の卒業アルバムのコメント欄に書いた言葉で締めくくります。

「防衛大少林寺拳法部に栄光あれ！」

結 手



【 スナップ⑩-1 仁部・村野両先生（三崎敏夫先生の弟子）による柔法指導 】



上右は、防大合宿を伝える
地元新聞

【 スナップ⑩-2 24期政権 下関合宿（昭和54年8月 「青年の家」） 】



創立 50 周年に寄せて

25 期生 主将 内山 哲也

海自 海上訓練指導隊群司令 (横須賀)

合 掌

防大少林寺拳法部創立 50 周年を迎え、25 期生を代表し心よりお祝い申し上げます。私ども 25 期生は防大少林寺拳法部の輝かしい歴史のちょうど真ん中の時期に小原台、かつての人文館屋上において若く力あふれる青春の日々を過ごしました。入部当初は防大で最もきついクラブであった我が部において先輩方の厳しい指導になんとかついてゆくことで必死でしたが 3 年、4 年になると当時全日本 4 連覇という我が部の名誉と誇りを守ること、4 年間の集大成として少林寺拳法を通じた自己の陶冶を実現することに一生懸命だったような気がします。

なにぶん 25 年前の事ゆえ記憶が正確ではありませんが、25 期政権時代前後にはいろいろなことがありました。昭和 54 年、団体演武において全日本学生大会を目指して毎日練習に没頭していたころですが、ある大学の夏合宿が川口湖湖畔で行われた際に悲しいことに部員が亡くなる事故が起きました。結局この事故が原因となりその年 10 月に予定されていた全日本大会は中止となってしまいました。防大生活のほとんどすべてを全日本連覇にかけていた我々にとっては痛恨の出来事でした。

また昭和 55 年 3 月 29 日、本山合宿においては開祖宋道臣先生が様々な大学が集っていたにもかかわらず防大のみを特別室に招かれ、2 時間余りの法話をいただきました。お話の内容は法話はもちろんですが先生の満州におけるご経験、国の防衛のあり方等多岐に及ぶものでありました。管長先生の我々防大生に対する熱い期待を肌で感じた次第です。大変残念なことにその直後の同年 5 月には突然、先生が逝去されてしまいました。その直前にこのような機会を得られたことは、何か運命的なものを感じました。

思い出はまだまだつきませんが、今小原台での 4 年間の生活を改めて振り返ると、学業や学生舎生活よりも少林寺拳法部部員として過ごした時間の重みが圧倒的に大きいことを改めて思い知らされます。私自身は本当に幸せであったと思います。人はそれぞれの人生のなかで「日本一」とか「世界一」といったことを目指すチャンスは簡単には得られません。しかし我が部に入ったおかげで自分の人生の中で本気で「日本一」を目指すという時間が持てたことに心から感謝しております。もちろんそれだけが目的ではありません。修行を通じて「信条」の教えを信じるべしという管長先生の言葉はいまも耳に残っております。これからも防大少林寺拳法部がますます発展し、部員一人一人が真の武人になれんことを祈念いたします。

結 手



創立 50 周年に寄せて

26 期生 主将 道満 誠一

合 掌

海上幕僚監部監察官（市ヶ谷）

26 期主将道満です。この度は、防衛大学校少林寺拳法部創部 50 周年、誠におめでとうございます。諸先輩、後輩拳士のご努力はもとより、歴代部長、監督のご尽力、そして先生方から賜りました親身なご指導に心からの謝意と敬意を表する次第であります。

さて、我々 26 期は、昭和 53 年入部、部員数は全学年で 120 名に及ぶ大所帯でしたが、道場はまだ整備されておらず、人文館の屋上と廊下で鍛錬しておりました。団体演武は、飛び込みプール横の芝生上で、芝生がなくなるほどの練習をしておりました。

この他、数々の思い出がありますが、何と言っても印象に残っておりますのは、3 年の本山合宿において、開祖宋道臣先生の最後のお姿に接することができたことです。開祖は防大生が合宿していると気付かれるや、特に時間を割いて防大生のみを別室に呼ばれ、法話をされました。「私は戦後の荒廃した日本を立て直すため、若者を健全に育てるべく少林寺拳法を興したが、その若者の中でも最も重要な存在とも言えるのが自衛隊員である。君たちはその隊員達の指導者としての自覚を持って、しっかり修行してほしい。そのために必要な段位は 4 段でも 5 段でも授けよう。」という主旨の法話でありました。当時は、自衛隊への世間の風当たりは、まだ厳しいものが残っておりましたが、この開祖のお言葉に身の引き締まる重責を感じたことを鮮明に覚えております。

私自身は卒業後、海上自衛隊に進み、遠洋練習航海の訪問国で、副将の杉山君と組演武を展示する機会がありました。しかしその後、潜水艦乗り組みとなったため、練習の場もなく、少林寺拳法を続けることはできませんでした。それでも今振り返りますと、色々厳しい勤務も経験しましたが、防大少林寺拳法での修行とあの時の開祖のお言葉が大きな支えとなって、何事にも正面から取り組むことができたものと確信しております。

26 期生の中では、陸の米山君と石山君が長く監督を務めました。海の相良君は、監督を務めた上、現在も修行を続けております。全自大会にも度々参加してきておりますが、近年ではマスターズ千葉県大会で優勝し、世界大会にも出場するという目覚しい活躍をしております。

ここで、相良君の後輩への言葉を紹介し、26 期生から現役拳士諸君へのはなむけとし

たいと思います。「少林寺拳法の修行は、まず必ず相手とともに練習し、お互いを高めるように練習できます。また、体力に応じて年をとっても相応の修行ができます。そして、特に年を重ねてからは、技術のみならず精神や人間性の修行にその重点が移っていきます。後輩諸君も是非少林寺拳法を一生続けていって下さい。」

最後に、50周年記念事業にご尽力された関係各位に改めて感謝いたしますとともに、防大少林寺拳法部及び奥平会の今後益々のご発展を祈念申し上げます。

結 手



【 スナップ⑩ 25～26期生 】

上段 25期生：左 昭和55年春本山帰山時 上段右：芝生場での団体演武練習の合間の一コマ。
 中段 26期生：左 団体演武練習の合間の一コマ 当時はラグビー・アメフト・サッカーの部活同様、
 道着と脚は泥にまみれ汚れがひどく、部外試合の時、綺麗なものに着替えた。右：合宿千本突き。
 下段 27期生：左 全国大会出場時 中段右：6号学生舎練習時の合間の一コマ



少林寺拳法部の思い出

27期生 副将 益田 徹也
情報本部 統合情報部長 (市ヶ谷)

合 掌

「部の伝統をお前達の代で終わらせるのか！」関東学生大会団体の部で優勝できなかった際の26期の先輩の指導。当時、その指導自体の迫力もさることながら、「このままでは27期の代で、本当に伝統が途切れてしまう」と、恐怖感で全身が戦慄したことを今も覚えています。その後の全国大会で挽回、「優勝...防衛大学校」の発表を聞いた時には、「どうにか伝統が繋がった...」との安堵感で完全に腰が抜けてしまいました。この度、記念誌に寄稿させて頂く機会を得て、改めて私共27期生が「伝統の襷」を引き継ぐ役目を果たしていた事実を思うと、この30数年前に味わった“安堵感”が再び蘇ってまいります。

防大で何をしたらと問われれば「少林寺拳法」。何を学んだ？「剛法と柔法、そして整法を少々」。防大生活のすべてが少林寺拳法を中心に回り、“校友会活動を乗り切るために昼間の授業中にしっかりと睡眠をとる”これは当時、自他ともに認める不文律でした。

共に鍛えあった同期の姿...構えや突き蹴りの癖、体力錬成時の絶叫の場は今なお脳裏にはっきりと残っています。甲斐君の伸びる回し蹴り...足首がいつの間にか目の前に迫る。行事君の下からくる蹴り...分かっているけど止められない。角南君のローキック...くらったら最後立ち上がることは困難。身体が大きい五領君が窮屈なまでに腰を落とす...でもそのシルエットが格好良い。山之上君の尽きることない体力...どれだけ同期が鼓舞されたことか。舞原君のスピードに兼古君の流れるような技、濱田君の軽快さ。同期全員の記憶を掘返すと枚挙にいとまがありません。

少林寺拳法は人作りといわれますが、今自らを振り返ってみても、自身の体と脳細胞の何十パーセントかは4年間の荒行とも言える部活動の中で作られたことは間違いないと思っています。30数年前のことを今なおはっきりと覚えていることは、少林寺拳法が自らのDNAにまで沁み込んでいる証左でしょう。私自身、再び胴衣に袖を通すことはないかもしれませんが、少林寺拳法に出会えた「運」に感謝するとともに、校友会活動を通じて巡り合った人との「縁」を大切にしつつ、これからも後輩達を応援してまいりたいと思っています。

最後になりますが、鍛え導いて頂いた先生、先輩の方々に改めて御礼を申し上げますとともに、防大少林寺拳法部が次の50年も更に発展されんことを祈念いたします...既に逝去された同期の緒方君、元木君とともに。

「緒方君、美しい蹴りだ。お見事！」「元木君、いいねえ。もう少し肩の力を抜けば完璧だ！」

結 手



防大少林寺拳法部の思い出

28期生 主将 湯浅 悟郎
陸上幕僚監部 装備部長（市ヶ谷）

合 掌

防大少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。防大少林寺拳法部賀、半世紀にわたる歴史と伝統を刻んできたことに対し、私もその一員として誇らしく思いますし、同時に、我々をご指導いただいた多くの先生方や、部の運営を支えていただいた部長をはじめとする諸先輩方に対し心より感謝申し上げます。

さて、この度、少林寺拳法部に関する思い出について原稿提出のご依頼をいただきましたが、振り返るといろいろ思い出されます、

一年生時代の厳しい体力練成（我々は根性シリーズと呼んでおりましたが）を乗り越えたこと、3 学年時に関東学生・全日本・全国大会における団体演武を 5 連覇したこと、4 学年時に 3 段以上の部の組演部で発の総理大臣賞を獲得したこと、新体育館（総合体育館）が完成し、これまでの野外・芝生の練習場所から初めて道場をいただいたことなど、本当に大切な思い出が多くあります。

ただ、最も大切な財産は何かといえば、それは、厳しい試練に立ち向かい、そしてそれを乗り越えることにより得た「自信と誇り」であり、そして「共に苦勞し闘った信頼できる永遠の友」であると思います。

試練の中でも、最も印象に残っているのは 1 年の時の夏合宿です。赤城青年の家で行われた夏合宿では、強烈な体力練成で毎日体が悲鳴を上げておりましたし、同期の何人かは意識を失って倒れました。拳立てや屈伸蹴りなどが始まると「端から番号はじめ！」との号令が掛かり、肉体的苦痛もさることながら、いつ終わるかわからないことによる精神面の試練はかつて経験したことのないものでした。そのような状況の中、同期で声を掛け合い、励ましあって夏合宿を乗り越えられたことは、1 年生だった我々にとって自信につながったと思います。合宿の最後に、当時副将だった 25 期の坂本さんが「お前たちは、少林寺の夏合宿を乗り越えた。今後はどんなことでも乗り越えられる。胸を張っていけ。」と仰ってくださったことで、皆、言いようのない誇りを感じたと同時に、一緒に試練を乗り越えた同期の強い絆を感じたことを今でも鮮明に覚えています。

私にとって少林寺拳法は、自己修養の中心的存在でした。

困難に自ら立ち向かいそれを克服する強靱な精神力と強くたくましい肉体を持ち、他人の幸せを願い、正義のために力を養う集団である少林寺拳法部。その一員であったことを誇りに思うと共に、そこで得た生涯の友を今でも誇りに思っております。創立 50 周年に際し、防大少林寺拳法部が、今後も更に素晴らしい歴史を刻んでいくことを祈念申し上げます。

結 手



第 29 期少林寺拳法部の思い出

29 期生 主将 坂井 辰也

合 掌

防大少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。

我々 29 期は、昭和 56 年、タイ王国留学生 3 名を含む 30 数名で入部したと記憶しています。当時の部員数は 120 名を超え、政権は 26 期生、それはそれは、もう錚々たる方々ばかりでした。もちろん先の先輩方も、また 27 期、28 期の方々も同様に、まさにツワモノぞろいでした。まあ我々 29 期も同じように思われていたと信ずるばかりですが（笑）

思い出の中で欠かせないのが合宿です。中でも夏合宿は「妙高」「磐梯」「赤城」と続き、我々は「飛騨」を選びました。5 日間の計画は先輩に倣い、2 日目のランニングや最終日の根性シリーズ、そして騎馬立ち、そのキツさは今でも記憶に新しいです。休憩時のカルピスのうまかったことといったらもう（笑）。春合宿のゴジラ海岸もなつかしいです。

最大の思い出は、なんといっても全日本・全国大会だと思います。団体演武”8 連覇”という目標が重くのしかかる中、アメフト場の片隅や柔道場等を借りて、諸先輩同様、怪我を忍び、泥と汗まみれの練習でした。日曜日に弁当食だけでしのいだ日もあり、さすがにその時はブツ倒れそうでした。たまに気持ちが落ち着いたのは、田村先生や神田先生が見えた時で、その時だけはゆっくり時間をかけて技を研究し、ご指導を仰ぎましたね。全日本 12 名、全国 8 名と 2 チーム体制でしたが、双方が励まし合う日もあれば、顔も合わせない日、いがみ合う日等もあり、この 8 ヶ月間の厳しさはハンパなかったですね。ただひたすら練習の毎日でしたが、間違いなく言えるのは、29 期全員が一丸となって栄光を掴んだということ、これは一生忘れることはないでしょう。

忘れてならないことの一つに、28 期政権時の「道場」の完成があります。当時は、人文館や学生隊舎の屋上で練習してましたから、完成時の感慨深さは相当なものでした。それまでの先輩方の功績が認められた証であり、受け継いだ我々 29 期も、この道場に恥じない成果を修めていかねばならないと心を新たにすることを思い出します。

50 年という防大少林寺拳法部の伝統に敬意と誇りを感じざるを得ません。これからも一年一年各期の修行が積み重ねられ益々発展されんことを願っています。

結 手



創立 50 周年に寄せて

30 期生 主将 福田 洋司
北海道補給処装備計画部長(島松)

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。

少林寺拳法部 30 期生は当時 30 人が在籍し、現在ほとんどの者は 50 歳ですので、少林寺拳法部の歴史が自分達の人生と重なる感じがします。

さて、我々 30 期生が少林寺拳法部に在籍したのは昭和 57 年から昭和 61 年までの 4 年間です。何もわからず防衛大学校に入校し 4 月少林寺拳法部に体験入部をしました。当時の練習場所は人文館と 6 号隊舎屋上でした。部員 120 名を抱えながら練習場所は十分なものではなかったと思います。総合体育館が完成してからはアリーナが道場となりました。しかし 120 名の練習場所としてはアリーナも狭く（当時は体操部とバトミントン部と共同使用）3 年の団体演舞練習はアメフト場横の芝生の上で道着が真っ黒になっていました。

人生で厳しい体験をしたのが夏合宿です。場所は、磐梯、赤城、乗鞍、岩手山青少年の家でした。あと何日と思いながら練習をしていたことを今でも思い出します。

そのような厳しい練習があったので 30 期生の大会成果は、全日本学生大会団体演武（12 人）7 連覇、全国大会団体演武（8 人）最優秀、全日本学生大会三人掛け 3 連覇等であり、先輩方からの伝統を引き継ぎ、日本一を獲得できたことが今でも誇りです。

陸上自衛隊では格闘検定を実施していますが、今でも突き・蹴り・受け身・関節技等を隊員に教えてしまいますし、団演のパートをまだ体が覚えています。自衛隊で勤務をしていても、クラブの先輩・同僚・後輩に会うと何故かほっとします。当時の仲間にあうと思わず合掌をしてしまい、気持ちはいまだに学生なのかもしれません。クラブ活動の苦楽をともにした仲間、何物にも替えがたい物を得たと痛感しております。

これからも少林寺拳法部は良き思い出であり、すばらしい仲間を大切にしていきたいと思えます。

結 手



防大少林寺 31 期の思い出

31 期生 主将 吉武 辰明

陸上幕僚監部装備部輸送室(市ヶ谷)

合 掌

昭和 58 年、総合体育館が落成し、1 階アリーナが少林寺拳法部の道場となって初めて入部したのが、我々 31 期である。高校時代に本山協力の中国映画「少林寺」を見てきた年代であり、二段 2 名、初段 2 名、茶帯 1 名を含む総員 34 部の入部だった。

【地獄の夏合宿（各地「国立青年の家」）】

1 学年時は赤城青年の家。初日到着後、直ちにウォーミングアップ。基本の突き蹴りは無きに等しい程度で、ほとんど拳立てと屈伸蹴り。わずか 1 時間足らずのウォーミングアップで、合宿が地獄であることが知らされた。

2 学年時は乗鞍青年の家。3 日目のランニングは、高原特有の急勾配コース。往路は下るのみで、復路は逆に延々と登る。部旗持ち担当の 2 学年にとって、標高差数百メートルの復路はこれまた地獄。最後は 2、3 人で持ち回し、何とか部旗を保持しているような状態だった。

3 学年時は岩手山青年の家。前年の夏合宿において、夏季訓練から遅れて参加した 3 年生拳士がえらくしばかれているのを目撃していたので、何はともあれ合宿地最寄りの部隊実習先の確保が一大事。他部の同期をシバいて、東北周辺の実習先を確保したものだっ

た。

4 学年時は赤城でやりたかったけれども、予約が取れずに磐梯青年の家。諸事情により半日のバス研修を入れた合宿は、下級生にとってさぞかし天国だったことと思う（昇天しそうな拳士もいたらしい）。

いずれにせよ、地獄の夏合宿を乗り越えた自信と同期の絆は、極めて大きなものだった。

【涙の「お太幸」と日本一の奪回】

3 学年時、全日本 8 連覇を目指した団体演武。大会を終えて武道館の帰り、祝勝会を予約した「お太幸」へ。予定では、連覇を祝い、師範や 4 年生拳士に謝恩の献杯を重ねて盛り上がるどころ。しかしその夜の我々は、膳を前にうな垂れて何も言えず、歯を食いしばって涙に堪えるばかり。見かねた 4 年生が、逆に慰めの盃を差して回る始末。堪えきれずに涙が盃に零れた。あの日の悔しさは一生忘れない。

政権交代後、本山に帰山した際、新井先生（現連盟会長）に詰め寄った。「なんであんな

演武が最優秀なんですか。全国の大学生拳士は勘違いしますよ。本山は防大に恨みでもあるんですか」と。若気のあやまち、汗顔の至りであるが、当時は見境も怖いものもなかった。

汚名を纏った31期政権は「日本一の奪回」に精力を注ぎ、翌年の全日本学生大会では32期に団演最優秀を取らせ、併せて中拳士自由組演武で最優秀・内閣総理大臣賞も奪回した。

【現政権期へ】

「先輩から受け継いだものを、更に高めて後輩に譲り渡す」ことを使命として、「全大学少林寺拳法部の頂点に立つ防大こそが全国の基準である」ことを目標として、また、体力、気力の限界を求めるほどの厳しい練習により磨かれた「本山をも唸らせる技術力」をもって、歴代政権期は部を運営し、その伝統を受け継ぎ、送り継いできた。どうか君たちも、この誇り高き伝統の継承者であるということ、またそれだけでなく、将来の日本のリーダーとして開祖が特に期待をかけた防衛大学校少林寺拳法部員であるということを忘れず、日々の修練、後輩の育成に励んでもらいたい。奮闘を期待する。

結 手



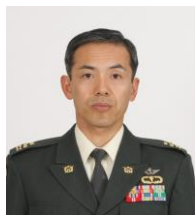
【スナップ⑫ 28～31期生】

上段左：祝勝会 走水荘において28期生一同

上段右：総合体育館道場にて29期生一同

下段左：30期生一同2年赤城夏合宿の一コマ

下段右：31期生昭和58年赤城夏合宿根性シリーズ後



防衛大学校少林寺拳法部 50 周年記念行事記念誌寄稿

32 期生 主将 平田 雄嗣

北部方面隊冬季戦技教育隊長（真駒内）

1 はじめに

防衛大学校少林寺拳法部創部 50 周年大変おめでとうございます。月日の経つのは早いもので、私達が防衛大学校 1 年生の時に創部 20 周年記念行事が開催され、お手伝いしたことを覚えています。

2 思い出

私達の期は、1・2 年生の頃は各種大会で全く入賞できず、ずっと「下手だ！」と言われていたので、3 年時の団体演武も死にものぐるいで練習しました。田村・神田両先生をはじめ先輩方のご指導のお陰で全日本学生大会において最優秀が獲れましたが、政権を担ってからも皆が基本を真面目に練習したがっていたため。「後輩の育成にあたれ！」と強制的に後輩指導に尽力したことを覚えています。

また、夏合宿真っ最中の青年の家の集いの夕べにおいて、ピコレット一座で当時流行っていた『北斗の拳』を取り入れて披露し、大受けしたのも良い思い出です。3 年生の時の本山合宿においては、「防衛大の人達の技は力任せだね。」と指導者の方に言われ、「そんなことはありません。『あらはん』も勉強し、理に合っているはずです。」と反論したところ、「君達は体力があり過ぎるから、力に頼っているのがまだわからないんだろうね。」と軽く返され、ぐうの音も出なかった記憶があります。

学生時代の鎮魂行等により『聖句・誓願・信条・道訓』に加え『6 つの特徴』は私の精神の一部となり、部隊勤務・隊員指導の上で大きな一助となっています。

近年では、同期の澤本拳士が平成 21 年 3 月 24 日に永眠されましたので、東京近郊の同期で平成 23 年 9 月 11 日に菩提寺にて一同合掌礼拝して参りました。

3 修行の継続

正統少林寺拳法は、文武両道の教えを实践でき、生涯修行するに足る“武”であると同時に、そこで触れあう多くの拳士達との交流の中で、人間形成のための調和力が磨かれる“行”です。

また、修行を再開して 10 年、東京、千葉、熊本、北海道と転勤を重ねてきましたが、どこの道院に行っても合掌礼一つで仲間に入れていただける喜び！というものを何回も経験しました。そこにはやはり根底に、『自己確立から自他共楽を通じて人間形成による理想郷建設』という調和を重視する金剛禅の仲間意識があるものと確信しました。

皆さん、金剛禅運動を推進しましょう！



防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年を迎えて

33 期生 主将 川崎 英幸

合 掌

本日ここに、防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年記念式典が挙行されますことを、心よりお慶び申し上げます。また、奥平会 OB や現役部員各位のたゆまぬ努力と、関係各位より賜りましたご支援ご協力に対しまして、心から敬意を表し感謝申し上げます。

我々 33 期が少林寺拳法の道を志したのは、今から 29 年前。多くの校友会の中でも、最も厳しく、過酷な部であるという周りの声をよそに 29 名が入部しました。新しい道着に身を包み、不安と期待を胸に道場へ足を踏み入れました。卍の紋章と黒帯姿の先輩達は、気迫に満ちあふれ、道場のピンと張り詰めた空気を今でも覚えています。

1 ヶ月後、新入部員である我々 33 期に対するお客様扱いのおもてなし練習は終わり、噂通りの厳しい練習が来る日も来る日も続きました。拳立てに拳の皮はめくれ、終わりのない腹筋、屈伸蹴り、バービージャンプ。体力には誰よりも自信があった私のプライドは、ボロ雑巾のようにズタズタになったことを記憶しています。しかし、入部当時の練習は、それから 3 年間に渡って続く修行の、言わばストレッチみたいなもの。学年が上がり昇段していくにつれ、大会の組演武侯補にも選ばれ、何度も何度も繰り返し練習に励みました。相手との息が合わないことにイラついた私を 31 期藤岡先輩は一蹴し、「一人で演武は出来ねえ！」と一喝されたことを覚えています。

3 学年の団体演武では、道場がアメフト場になり、毎日泥まみれ…白い道着もいつしか真っ黒になり、その頃には甘っちょろい考えをもった同期は一人としていませんでした。3 学年の使命は、全日本で勝つことはもちろんですが、如何に全員が心をつにし、チームとして熟成していくか。次期政権のしっかりとした土台を作ること。それが最大の使命でした。

田村、神田両師範には何度も防大まで駆けつけていただき、まさに「目から鱗」の技と、忘れてはいけない心を、親切・丁寧にご指導いただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。

4 学年で憧れの政権を執るまでに、何人かの同期が道場を去り、寂しい思いもしましたが、厳しい練習を通じて心と体を鍛え、技を磨き、仲間との絆を強く出来ました。この時、防大少林寺拳法部に脈々と受け継がれる伝統と大いなる大義を継承したことを実感しました。いつしか我々 33 期は、本当に強い防大少林寺拳法部目指そうと話すようになりました。「強い少林寺」これが 33 期の旗印です。

「己こそ 己に寄りて 己をおきて 誰に寄るべぞ

よく整えし己こそ まこと得がたき寄るべなり」

我々の4年間で、開祖 宗道臣が求めた「人づくりの行」としての少林寺拳法であったかどうか分かりませんが、4年間の防大少林寺拳法部での「行」は、我々の骨格であり、33期を繋げているかけがえのない教えです。決して防大少林寺拳法部の傳承者であることを忘れてはならないし、その「誇り」をもって、世の中の役に立つ。

今回50周年を迎えるにあたり、民間企業にいる私に寄稿依頼をいただき、改めて防大少林寺拳法部の歴史を振り返り、考える時間をいただいたことに感謝申し上げます。

最後に、防衛大学校少林寺拳法部がより一層発展することを願い、合わせて関係各位の皆様のご健勝を祈念し、33期代表のお祝いの言葉とさせていただきます。

結 手



【 スナップ⑬ 32～34期生の集合写真 】

上段：32期生一同 中段：33期生一同 下段 34期生一同



変化への対応

34期生 主将 松永 康則
陸上幕僚監部広報室長（市ヶ谷）

我々34期生が防衛大学校を卒業したのは、平成2年3月です。平成2年というのはどういう年かという、冷戦が崩壊した年です。歴史的な転換点だったと思います。このため、安全保障・防衛政策等はこの後、大きく変わっていくことになるのは皆様ご承知の通りです。

防衛大学校少林寺拳法部という視点に立つと、我々が現役学生としての過ごした時代は、「部員が減少し始めた時代」です。我々以前は、1学年30名程度を誇る巨大な校友会でしたが、我々以降1学年20名を割り始めました。ある意味、少林寺拳法部にとって歴史的な転換点だったと思います。部員が減少した理由は明確にはわかりませんが、今回の焦点ではないので割愛しますが、大げさに言いますと、我々以降は、部の運営を変革することが求められたのだと思います。練習方法を例にとります。我々が1・2年生までは、1・2年生は、体育館で練習し、組演武が目標。3年生は、部員数が多くて体育館で練習できずアメフト場で練習し、12人と8人の団体演武を別々につくって切磋琢磨し、全日本大会での優勝を目指す。4年生は指導。おおざっぱにいうとこんなところでした。

しかし、我々が3年生になると、20名いない訳ですから、12人の組演武1つのみを作って予備が少ない中で勝利を追求しなければならない状況でした。プラス面とえば、人数が少ないので、体育館で練習はできました。4年生になると、部員数は70名位になっていたと思います。私たちの1年生の時は100名を超えていたのでその差は歴然です。その当時の私たちは、やはり過去のやり方が最良だと思ってやっておりました。マンパワーがないので個人の能力アップのために何が必要かとか、団体演武に4年生を入れる時代なのかもしれないといった発想はありませんでした。

私が卒業した以降も、部員数では厳しい状況が続き、練習のやり方以外にも、資金の問題や指導官の確保の問題等があったと思います。一方、女性の入部により出場分野が広がったという喜ばしい面もあったと思います。最近やっと、諸先輩の努力で部員数が増加していることは嬉しい限りです。部が創立50周年を迎えた現在も素晴らしい後輩たちを育て続けているのは、我々34期生では気づかなかった変化を後輩たちが気づき、それに対応した結果だったと思います。併せて、師範・部長はじめ多くの方々のご指導のおかげと感謝しております。変化に対応できなければ、組織は崩壊するとよく言われます。これまで同様、少林寺拳法部が、現役学生を中心にしているいろいろな変化に対応していけば、今後も少林寺拳法部は素晴らしい部であり続けることと思います。私も微力ながらご支援させていただきます。



防衛大少林寺拳法部 4 年間の思い出

35 期生 主将 戒田 重雄
第 14 普通科連隊長（金沢）

この度は、防衛大学校少林寺拳法部創部 50 周年、誠にめでたうございます。今さながらに、このような素晴らしいクラブに所属させて頂いたことを有難く感じております。特に、部長、監督、師範や先輩・後輩はもとより、厳しい練習を通じて培った同期との信頼関係は、それこそ何物にも代え難いものがありました。

私共、35 期生は 1 学年時 4 月の入部者数が 40 名を超えたにもかかわらず、卒業時は 17 名と半分以下にまで少なくなってしまいました。中には久保田君のように本人は熱心に練習に通われたものの、ガンにより若い命を落とされた悲しい例もあります。

しかし、残された 17 名は、本当に気心が知れたメンバーばかりとなったことから、様々な局面で互いに助け合い、励ましあって、幾多の厳しい局面を乗り越えることができたように思います。

仮に、我が同期に対して 4 年間のクラブ生活で何が一番思い出に残っているかと問えば、間違いなく 2 学年時の 33 期による厳しい練習と、3 学年時の団体演武練習が挙げられるでしょう。

2 学年時は、学年係であった富樫・御厨両先輩の激しすぎる優しさにより、練習中に何度も限界に挑戦させて頂きました。中には本当に三途の川を渡りかけた者もいたと聞きます。一方で、黒帯をとった喜びや合宿を乗り越えた感動もひとしおのものがありました。

3 学年時には、全日本大会が 11 月下旬という長過ぎる目標に向かって、ひたすら練習の日々が続きました。開校記念祭前後は自習時間使用が許されるという最高に有難い御配慮もあり、通常の 16 時から 18 時に加えて 19 時から 21 時までも練習に取り組みました。更に、週休 2 日制の導入により、土日祝日は 9 時から 17 時まで練習していた訳ですから、よく発狂しなかったものだと思います（笑）。

お陰様で、全日本優勝後の政権交代時の感動も、これまたひとしおのものがありました。その後の同期の練習参加率は、他の期に比しても良かったように思いますし、4 学年時の戦績も全日本優勝を初めとして、十分なものを残すことができたように思います。当時から不思議だったのですが、「今日の練習に行くのは嫌だな」という気持ちはありましたが、「辞めたい」と思ったことは一度もありませんでした。今日も厳しい練習となることが分かっているのに、風呂道具を片手にわざわざ走って道場に向かう同期、土日の朝、長い練習が始まる前のドンヨリとした雰囲気の中にも、真っ直ぐに向かってくる同期、この「決して裏切らない連中」との間の奇妙な連帯感こそが、クラブ生活 4

年間の最大の醍醐味だったように思えてなりません。木場君、中村君、坂本君、森泉君、安藤君、堀君、中澤君、三浦君、(故)柚之原君、瀬戸口君、中本君、川嶋君、福本君、馬淵君、中原君、加藤君、私が4年間続けることができたのも、みんなのお蔭です。本当にありがとう。そしてこれからもよろしく。



【 スナップ⑭ 35期生の集合写真 】

上段左：2学年夏合宿時 33期生富樫・御厨氏と。中央：34期生富山氏と。右：春合宿ランニング休止点

中段左：4学年時の道場で 中央・左：夏合宿ランニングでの一コマ

下段左：4学年時夏合宿終了時



少林寺拳法部 50 周年記念誌寄稿文

36 期生 主将 藤岡 史生
第 16 普通科連隊長 (大村)

合 掌

少林寺拳法部創部 50 周年、誠におめでとうございます。これもひとえに少林寺拳法部員はもとより、これまで部を支えてこられた歴代の部長、奥平会会長の方々、OB 諸先輩のご尽力の賜と深く感謝申し上げます。

さて、私が入部したのは昭和 62 年の春です。当時、少林寺拳法部は 100 名を超える防大最大の部員数を抱え、更に全日本学生大会や関東学生大会では輝かしい成績を収める名実ともに防大の代表的校友会ではなかったでしょうか。

そのような比類なき校友会に入部を決意した時、私は「将来の二人の自分」を想像していました。一人は、先輩たちのような「逞しくなった自分」、もう一人は「高校時代に運動部にも所属しなかった自分が厳しい練習に着いていけるかという不安を抱える自分」です。「将来の二人の自分」、その「将来」は思いの外すぐに訪れました。正式入部前、とある先輩は「今は以前のような理不尽な練習は少なくなった。」とか、「最近科学的なトレーニングも取り入れるようになった。」とか、言葉巧みに、そして優しく練習内容を説明して頂きました。ところが正式入部が決まると状況は一変、あの優しく科学的な先輩は何処へいったのか。かつて経験したことのない驚天動地の猛練習が始まり、そこには想像したとおり「練習に不安を抱える自分」が存在していたのです。冷静に考えてみれば、入部部員の 8 割以上が未経験者である防大少林寺拳法部が緩い練習で全日本学生大会や関東学生大会で優勝できるはずもなく、理不尽な練習は減ったものの、無くなったとは言われていない。科学的な練習も取り入れるようにはなったが、全て科学的とも言われていない……。入部当初、人生の厳しさと切なさを少しだけ学んだような気がしました。

それから 2 年間、同期に支えられ練習にも何とか着いていけるようになり、心も技も充実してきました。そして 3 学年になった我々 36 期は、関東学生大会、全日本学生大会、全国大会での団体演武最優秀を目標に掲げました。その頃から少しずつですが、やらされていた練習から目標に挑む練習に変化したことを実感していました。練習の甲斐あって、目標の 3 大会全てにおいて最優秀賞を獲得することができました。賞を受賞したことはもちろんのこと、同期で目標を掴んだことへの達成感、その後も私の人生に大きな影響と自信をもたらしました。やがて、4 学年となり部運営を任される立場となってからの経験、つまり厳しさの裏側にある緻密で細心の練習管理や部員の心情把握、部外との連絡などは、間違いなく自衛官人生の原点になったと思います。

そして部運営を後輩に託した 4 学年の秋になって初めて、入部当初に想像したもう

一人の、やや「逞しくなった自分」を感じることができたと思います。

これからも少林寺拳法部が益々発展していけるよう微力ながら尽力して参ります。

結 手



【 スナップ⑮-1 36期生集合写真 】



50周年に寄せて

37期生 主将 平瀬 義
陸上幕僚監部（市ヶ谷）

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創設 50周年おめでとうございます。

先輩方が築かれた名誉ある防衛大学校少林寺拳法部を年々後輩が引き継ぎ、現在に至ってなお発展しておりますことを心よりうれしく思います。

月日が経つのは早いもので、40周年をお祝いしたのもつい最近のような気がします。

高橋部長をはじめ、小原台にあって奥平会、部の運営を支えていただいている顧問の皆様深く御礼申し上げます。

さて、執筆依頼をいただきましたので学生時代の思い出について一つ二つ振り返りたいと思います。

まず、一つ思い出に残っているのは2学年の時の国立赤城青年の家（現国立赤城青少年交流の家）で行われた夏合宿です。1・2学年当時の私は、「合宿」といえば“身の毛がよだつ”感覚があったように覚えています。始まってしまえば勢いで過ぎてしまうものなのですが、何とも形容し難いものでした。私の緊張感は合宿が近づくにつれどんどん高まり、赤城への移動当日、ある事情で遅刻してしまい、その時点で最高潮に達しました。これを序章として思い出にのこる熱い夏合宿がスタートしました。この間、素晴らしい大自然の中で、時として女子高生、子供たちに囲まれキャンプファイヤーするなど異質のコラボレーションもありましたが、「同じ環境の下でこうも違う世界を共存させることができるのか！」と、まさに若き日に小原台から見た東京の夜景を眺めるような状況でした。

日中の練習では、拳立て、屈伸蹴り、バービージャンプのオンパレード、基本や突き進みは全く続かなかったですね。あと思い出に残っているのは部旗を掲げてのランニングでした。同期交代で部旗を先頭に維持し遅れないよう根性で駆けていました。

もう一つ思い出に残っているのは、3学年の団体演武です。夏合宿頃から秋に向け準備を始めたように覚えています。現在はどうかわかりませんが、当時は先輩の「通せ！」の一言で一通り演武を流していました。時には合気道場で、時にはラグビー場で午前・午後繰り返し、出来ていようが出来ていまいが、ひたすら身につくまで難癖付けて指摘し、繰り返させられていたように思います。疲労困憊し、練習時にズレたマット修正を口実に息をついたりしていると御見通しらしく、「すぐ通せ！」と喝が入ることもよくありました。一日何十回も通すとおかしくなりそうですが、その甲斐あって成果を出してきました。これを乗り越えるための基礎が、それまでの練習、合宿等で、同期で乗り

越え鍛えた根性だったように思います。

卒業して約 20 年が経ちましたが、今もなお馬鹿を言い合い、助け合える関係は当時の同期くらいでしょうか。

私の防大少林寺拳法部の 4 年間は、人生のかけがえのない 1 ページです。

結 手



【 スナップ⑬-1 37期生 】

上段右：2 学年春合宿 中央：3 学年関東大会前 右：3 学年春合宿集合写真

下段左：3 学年春合宿集合写真 右：4 学年夏合宿集合写真



防衛大学校少林寺拳法部 50 周年に寄せて

38 期生 主将 奇藤 浩
幹部候補生学校候補生隊長
(久留米)

合 掌

防大少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。会長、部長、先生、また諸先輩方には防大在学時代、大変お世話になり誠にありがとうございました。

防大を卒業して、既に 20 年も経ってしまった事が信じられない程、少林寺拳法部で部・同期一丸となり、汗を流していた事が今でも鮮明に、また懐かしく昨日のこのように思い出されます。

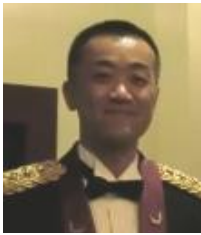
我々は、防大卒業後、国防の任務を担う職に就いたわけではありますが、自衛隊で勤務する上で、拳禅一如・力愛不二についてまさに実感するところです。また、「全ては人の質にある」ことは、東日本大震災災害派遣や伊豆大島災害派遣等でもご存じのとおり、自衛隊の実力発揮の力の根源になっていることは明確です。少林寺拳法を通じて学んだことは、拳士だけでなく世の中の全てに通ずることであると感じております。

また、私事ではありますが、これまでの部隊勤務間、特に第 21 普通科連隊（秋田）において中隊長上番間は、湯浅 悟郎先輩（28 期生主将）が連隊長であり、また、第 30 普通科連隊（新発田）において第 3 科長上番間は、谷 俊彦先輩（26 期生）が連隊長であり、厳しくも深い慈愛心をもってご指導をいただきました。この様に、この 20 年の間に、各勤務先や入校先において、諸先輩・同期・後輩にお世話になり、あるいは助けられ・助け合う場面が多々あり、数多くの OB が自衛隊のいたるところにいて、まさに防大少林寺拳法部の強みであると感じております。

最近、たまに拳立てをしたり、駐屯地体育館の片隅のサンドバッグをたたく程度であります。今後も少林寺拳法部出身者として己をよく整え邁進し、国の為、国民の為に役立つ様精進して行きたいと思っております。皆様もご健康に留意され、益々のご健勝をご祈念申し上げます。

また、現役少林寺拳法部の学生も、将来のためにしっかりと心身を練磨し、部・同期団結して引き続き頑張ってください。そして、防大少林寺拳法部の新たな半世紀を担っていただきたいと思っております。応援しております。

結 手



防衛大学校少林寺拳法部 50 周年をお祝いして

39 期生 主将 中村 公多朗
防衛駐在官

合掌

防衛大学校少林寺拳法部 50 周年にあたり、心よりお慶び申し上げます。この度の創立 50 周年記念誌は、少林寺拳法グループ総裁、少林寺拳法部長、奥平会会長等のお祝いの言葉をはじめ、各期の代表からの著述を取り纏めたものですから、防衛大学校少林寺拳法部のこれまでの歩みを回顧する貴重な記録となるとともに、新たな時代へ向けてさらに前進・発展していくための財産となるとと思います。私は現在、中華人民共和国日本国大使館において防衛駐在官として勤務しております。少林寺拳法部 OB の一員として本記念誌に投稿する貴重な機会を与えて頂き、誠にありがとうございます。

少林寺拳法部での思い出として、3 年生になって臨んだ全日本学生大会・団体演武に向けた練習が忘れられません。一人だけでは挫けやすい演武動作の反復も、優勝という目的意識を持った同期が互いに励まし合い、競い合い、切磋琢磨を続けるうちに全員が「心手期せずして、自然と身体が動く」までのレベルに到達しました。練習中の出来事として特に忘れられないのは、普段は大人しい九州出身の同期が、過酷な条件と慣れから同じミスを何度も繰り返す演武相手の同期に対して、「キサン殺すぞ！」と罵声を浴びせたことです。この言葉は「平常心の保持」という点では決して誉められるものではありません。しかし、緊張感を持続し「油断を決して許さない」という同期の表情は、私にとって気迫に満ちた「風格ある顔」に思えました。このような優勝に対する執念に満ちた練習風景は、他の校友会ではなかなか見られないものだったと思います。

私達 39 期生が勝ち取った団体演武「優勝」などの成果は、36 期先輩に基本・基礎を徹底的に教えて頂き、37 期先輩に気力と体力を鍛えて頂き、38 期先輩に技を磨いて頂いた、数々の「熱意」の集大成であったと思います。そして、私達が教える側に立った時、その伝統を受け継ぐ重責と困難さを改めて痛感しました。物事には「変えるべきもの」と「変えてはいけないもの」の二つがあります。伝統ある少林寺拳法部をさらに前進・発展させるため、同期と「本質は何か？何を残し、何を变えるか？」を真剣に考え、議論し、時には衝突したこともありました。私達 39 期生の校友会運営が良かったのか悪かったのかはわかりませんが、間違いなく言えることは、全員がよく考え前向きに取り組んでいたということです。主将として悩みと葛藤の毎日でしたが、未熟な私を支えてくれた同期全員に本当に感謝しております。

私は、部隊に配属されてからこれまでの間、困難や辛いことに直面した時、「聖句」を思い出し心の中で復唱しております。これを実行に移すことは本当に困難なことです

が、少林寺拳法部によって育まれた気力と体力を財産として、これからの勤務もやり遂げていきたいと思います。

最後に、39期を代表し、「練武の道場」であった防衛大学校少林寺拳法部に感謝を込めて、御礼申し上げます。

『鍛えて頂き、ありがとうございました。』

結 手



【 スナップ⑩-1 38期生 】



【 スナップ⑩-2 39期生 】

上段左：2学年夏合宿 上段中央：2学年夏合宿 上段右：4学年時

下段左：政権獲得時 下段右：4学年時



防大少林寺拳法部 50 周年によせて

40 期生 主将 上野 洋介

陸上幕僚監部人事部人事計画課企画班

(市ヶ谷)

合 掌

防大少林寺拳法部創立 50 周年、おめでとうございます。

高橋部長の下、我々を温かく指導してくださいました神田先生、頼富先生をはじめ、厳しい修練を乗り越え伝統継承の立役者となった OB の皆様、そして現役で日々精進している学生一同、全員の努力で成し遂げた輝かしい歴史と伝統であり、誇りに思います。この場を借りて、皆様のご尽力に感謝申し上げます。

さて、私が、今、改めて防大少林寺拳法部に入部して良かったと思うことは、なにより、たくさんの少林寺拳法部 OB が全国の部隊で活躍していることです。防大少林寺拳法部を卒業した我々は、世代こそ異なりますが厳しい練習を乗り越え、団体演武全国大会制覇という伝統継承のために日々精進・苦悩した戦友といった連帯感で繋がっている様な気がしております。例えば、幹部候補生として原隊に赴任する際、また若手幹部時代に新任地に異動する際は、不安を抱えて異動したのですが、異動先の部隊や駐屯地では、必ず少林寺拳法部の先輩が活躍しており、部隊勤務のイロハから生活指導に至るまで、色々と面倒を見てくださいました。また、私は現在陸上幕僚監部で勤務しておりますが、初めて陸幕勤務を命ぜられた時の不安は計り知れないものでありましたが、いざ勤務してみると、そこには多くの少林寺拳法部の先輩方が勤務しており、悩んだときには合掌礼で先輩の懐に飛び込み、人間関係を以って難局を打開できたことも多々ありました。とは言いつつも、皆様、信念を貫かれた猛者でありまして、礼儀を失する、また業務上逃げた姿勢を見せる等すると、必ず痛い目に合うこともご承知おきください。私も陸幕での勤務が 4 年経過し、後輩がどんどん陸幕で活躍するようになってきました。今度は自分が後輩の手本となり、また温かく指導をできるよう、頑張らなければならないと思っていますところでは。

防大少林寺拳法部の 4 年間は、毎日が死ぬほどきつく、大変な日々と思います。しかし、その貴重な経験は、世代を超えて盛り上がることのできる最高の話題（ネタ）となり、今後の自衛隊勤務における貴重な財産となります。任官以降は我々 OB がしっかりとサポートしていくので、学生諸官は一致団結して、当面の目標である団体演武全国大会制覇に向けて、全力で頑張ってください。

最後に、今後も引き続き「団体演武全国大会最優秀賞」という嬉しい報告を聞けることを楽しみにしています。

結 手



防大少林寺拳法部 50 周年によせて

41 期生 副将 中江 宏彰

陸上幕僚監部教育訓練部教育訓練計画課制度班

(市ヶ谷)

合 掌

防大少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。

防大少林寺拳法部を創立されました諸先輩方のご尽力に敬意を表しますとともに、高橋部長をはじめ後輩の指導・育成にご尽力していただいている神田先生、頼富先生及び部内外顧問の皆様、並びに部の伝統を脈々と受け継ぎ、日々修行している現役部員の諸官にご感謝申し上げます。

さて、防大少林寺拳法部 41 期生で一番心に残る思い出は、3 学年の関東学生大会において、団体演武の部で優秀賞をとり、とても悔しい思いをしたことです。これは、単に最優秀賞を逃したのではなく、今まで諸先輩方が築き上げてきた連覇記録を止めてしまいました。この諸先輩方に対する申し訳ない気持ちと悔しさは、今でも忘れられません。その後、みんなで頭を丸めて関東学生大会の結果を真摯に受け止め、次の全日本学生大会では絶対に最優秀賞を獲得することを誓い合い、後藤主将を核心に同期一丸となって厳しくてつらい練習を乗り越え、全日本学生大会の団体演武の部において最優秀賞を受賞しました。その時の嬉しさ、喜びは、私たち 41 期生の良き思い出となっております。

そして、これらの貴重な経験や防大少林寺拳法部で 4 年間継続してきたことが、自衛隊勤務で困難な状況や場面に遭遇しても決して弱音を吐くことなく、負けない強い心をもって職務を遂行する原動力となっております。

少林寺拳法が他の武道と違う点は、少林寺拳法修行の目的である「自己確立」と「自他共楽」にあります。「自己確立」とは、頼れる自分になること、「自他共楽」とは、自己確立した自分の強さで困っている人や苦しんでいる人を助けてあげることです。

防大少林寺拳法部の良き伝統は、厳しい練習を通じて、この「自己確立」と「自他共楽」の精神を修得することであり、防大少林寺拳法部を通じた人とのつながり、団結力にあります。4 年間の厳しい練習を通じて修得した「自己確立」は、自衛隊勤務における自信、不撓不屈の精神となり、また、同期や後輩が困っている時は助け、自分が困っている時には、同期、後輩、諸先輩方から温かい手を差し伸べ助けてもらえるという、「自他共楽」の精神が心の支えになっています。さらに、それぞれの勤務地には、支部会が開催され、防大少林寺拳法部の結束力が強化されています。

自衛隊の基地・駐屯地に少林寺拳法部があるところは限られており、防大卒業後、少林寺拳法を継続することは非常に厳しい状況ですが、現在は、全自衛隊支部があり、継続する意志があれば、全国どこにいても少林寺拳法を続けることができます。私も全自衛隊支

部に所属し、小学生の息子と娘を近くの道院に通わせながら、親子で一緒に少林寺拳法の修行に励んでいます。防大少林寺拳法部に入部していなければ、親子で少林寺拳法をすることは決してありませんでしたし、このようなすばらしい同期、後輩、諸先輩方に出会うこともありませんでした。この少林寺拳法を通じた縁をこれからも大切にしていきたいです。

最後に、防大少林寺拳法部の益々のご発展と、みなさまのご健勝・ご多幸を祈念致しております。

結 手



【 ⑩-1 40期生 】



【 ⑩-21 41期生 】



創立 50 周年に向けて

42 期生 主将 古賀 信之
第 6 後方支援連隊第 1 整備大隊長
(神町)

合 掌

防大少林寺拳法部創立 50 周年まことにおめでとうございます。

これも歴代部長、師範、監督、顧問の皆様方の御指導と御支援、そして諸先輩が築かれた伝統を脈々と継承してきた歴代部員の方々、そして現役の皆様の努力の賜物であると認識しております。また、私自身もその継承者の一員であったことを誇りに思います。

早いもので、私たち 42 期は防大を卒業し、約 20 年になりますが、防大での 4 年間はまさに少林寺拳法部での 4 年間そのものでありました。

「強くなりたい」との共通の価値を共有し、切磋琢磨した同期がいたからこそ、あの厳しい練習を乗り越えることができたのだと思います。同期の中には、体力が優れている者、技が上手い者、乱取りが強い者等それぞれ得意分野がある一方、それぞれ不得意な分野もあり、それらをお互いに補完しながら 4 年間でやり遂げることができました。

また、政権運営に当たっては、目標を掲げその目標を達成するために具体的に何をなすべきなのか等、組織運営のあり方を学ぶことができたと思います。

このように、少林寺拳法部での活動を振り返ると、防大少林寺拳法部での 4 年間は、修行を通じた「人づくり」そのものだったのだと思います。

先輩を信頼し真摯な態度で指導を受けること、お互いの個性を把握し、補完しあい、切磋琢磨すること、範を示し後輩を善導すること、そして、組織としての目標を掲げそのためになすべきことを日々積み重ねること等は幹部自衛官としての必要な資質であり、これらを知らず知らずのうちに学び、幹部自衛官としての原点を形成してくれたのが防大少林寺拳法部での 4 年間であったのだと思います。当時は、強くなりたいとの一心でしたが、今振り返ると、それ以外にも本当に多くのことを学ばせていただきました。

少林寺拳法部での活動を通じ、自己の気力・体力を培うのみならず、同期との絆や、先輩後輩との得がたい人間関係を構築することができました。陸海空が連携していくことが求められている統合運用の時代において、防大少林寺拳法部で得られた同期及び諸先輩方との絆は、陸・海・空それぞれの自衛隊に入隊してからも円滑な職務遂行の礎となっており、生涯の大きな財産となっております。

また、現在の厳しい任務においても、防大少林寺拳法部での厳しい練習は、任務完遂のための心のよりどころとなっております。

最後になりますが、防大少林寺拳法部での活動は「聖句」にあるとおり、自己確立を通じた「人づくり」そのものであると思います。このよき伝統が末永く継承されるとともに、防大少林寺拳法部が今後ますます発展することを祈念しております。 結 手



創立 50 周年に寄せて

43 期生 主将 廣瀬 繁
陸上幕僚監部 広報室(市ヶ谷)

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年、誠におめでとうございます。

第 43 期少林寺拳法部員を代表いたしましてお祝い申し上げますとともに、学生当時を振り返り、思い出を述べさせていただきます。

我々第 43 期生が防衛大学校に入校した平成 7 (1995) 年は、1 月に阪神淡路大震災が、3 月には地下鉄サリン事件が発生した年で、日本中が慌ただしい空気の中、小原台に足を踏み入れました。

少林寺拳法部に入部した我々は、世の中の喧噪をよそに、先輩方のご指導の下、拳立て、懸垂、ポンド階段等、日々厳しい修行に励みました。同期の部員数が少なかったのも、特に大きな部旗を交代で持つての駆足では、一人も脱落させないように互いに助け合い、励まし合いながら走った記憶が昨日のことのように思い出されます。このようにして、互いに切磋琢磨して心身を鍛え、技を修得し、2 学年時には黒帯を取得することができました。

ただ、3 学年時の団体演武ではこれまでの先輩方のように 12 人で組むことができず、初めて 8 人による団体演武として出場することとなりました。人数が少ない分、技の完成度を高めることが必要と考えられた先輩からの指示で、基本となる突き・蹴りを一から徹底的に反復練習することから始め、地道ながら段階的に技を磨いていきました。その結果、全日本学生大会では最優秀賞を獲得することができました。

この経験を通じて技の派手さよりも基本基礎を徹底することの大切さを学びました。また、最優秀賞の受賞を聞いた時には、これまでの積み重ねてきた努力が実ったということよりも、先輩方が築いてくださった伝統を護ることができたことが何より嬉しく、今でも最高の思い出として心に残っています。

政権を引き継いでからも、部員数は少ない状況は続きましたが、防大少林寺拳法部としての誇りを持ち、先輩から継承した基本基礎を徹底することを忘れず、厳しくも充実した日々を過ごしました。

この際、様々な出来事がありましたが、田村先生、神田先生、頼富先生をはじめ、監督・顧問の諸先輩方から温かいご指導・ご協力をいただき、また後輩たちも我々によくついてきてくれたことでこれを乗り越え、無事に防大少林寺拳法部を次の政権に継承することができました。今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

最後になりましたが、防衛大学校少林寺拳法部が良き伝統を継承し、これからも益々発展されることを祈念しております。

結 手



防衛大学校少林寺拳法部 50 周年記念に寄せて

44 期生 主将 渡邊 俊明

防衛大学校 1 大隊次席指導教官・前監督（小原台）

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年、誠におめでとうございます。私は、57 期、58 期、59 期政権と母校で勤務する機会を得ている 44 期 渡邊俊明です。

現在の校友会の状況ですが、高橋部長、神田先生、頼富先生を始め、顧問・OB・OG からのご支援を受けながら、日々の厳しい練成に自主積極的に取り組み、全日本学生大会を始めとした各種大会で常に好成績を残し続けています。近年には、開祖生誕 100 周年記念大会において防衛大学校が団体演武の模範演武を披露するなど、全国にその名を刻み続けているところですが。全校友会中、最多受賞回数を誇る校友会褒賞はもちろん、横須賀市民スポーツ章受章など、その勢いはとどまるところを知りません。部員についても、70～80 名を推移しており、活気があります。25 年度の全日本学生大会団体演武の部では、惜しくも 2 位ではありましたが。中央観閲式や開校祭の影響を受けながらもできるだけの努力はしていましたが、今回の反省を活かしてさらなる向上を目指していかせたいと考えています。

私達の学生時代を思い起こせば、ちょうど部員が激減した時期であり、校友会としての存続も危うかった印象があります。同期は当初 16 名入部しましたが逐次減少し、最終的に 10 名を切りました。各種大会に参加するのも一苦勞でしたが、良かったのか悪かったのか 1 人 1 人に対する手厚い指導を受けることができ、何の迷いもなく日々の練成に取り組むことができました。楽しかったことよりも、つらく厳しかったことのほうがより鮮明に記憶に残り、かつ、今となっては逆にそれが、自分にとって素晴らしい糧になっていると感じています。防衛大学校の指導教官として再度この小原台に足を踏み入れましたが、総合体育館や鉄棒周辺、ポンド坂・階段またはペリー記念公園付近を通る度、学生だった時の光景や感情がフラッシュバックします。今考えると、大会で成果を残すことを一番に考えていたつもりでしたが、実際は、修験道のような日々の練成を通じ、人格形成に多大な影響を与え、その後の勤務や考え方に好影響を与えていると実感しています。防衛大学校の各種行事の慌ただしい生活に加え、校友会で精神力・体力の限界まで追い詰められた時にはじめて「自分とは何か」「なぜこんなことをしているのだろうか」「健康であることは幸せだな」等々、自分と向き合うことができたのだと思います。1 学年時、授業の関係で校友会に遅れてきたとき、アップで 500 回バービージャンプしてから練習に入れと言われ、それだけで校友会が終わってしまった時。メロスで完全に握力が無くなって鉄棒にしがみついているとき。ポンド階段で何度も昇降している時。時間や精神的に余裕があるときには一切考えないことを、追い詰められたとき、自分の弱さを痛感することができまし

た。

卒業して、陸上自衛隊に任官後も防衛大少林寺拳法部で学んだことが大きく活かされました。少林寺拳法部で培われた気力と体力で、初級幹部時代はほとんどのことは乗り越えられました。また、部隊で出会う先輩や後輩にも色々と指導や協力をもらいながら勤務してきましたが、この少林寺拳法部の絆は防衛大学校の間だけではなく、一生続くものなんだと今更ながら痛感しています。この絆を大切にしながら、また、OBとして現役の学生達に支援できることは積極的に実施していきたいと考えています。

これからも、防衛大学校少林寺拳法部の発展と関係者各位のご多幸を祈念いたします。

結 手



【 スナップ[®] 42～44 期生 】

上段：42 期生集合写真

中段左右：43 期生集合写真

下段：44 期生



合 掌

防衛大学校少林寺拳法部の思い出

45期生 統制長 堤 允良

防大 44 中隊指導教官・現監督（小原台）

防衛大学校少林寺拳法部創部 50 周年を迎えるにあたり、心よりお喜び申し上げます。45 期を代表しまして、学生時代の思い出を寄稿させていただきます。

思い起こせば 17 年前、数ある校友会の中から少林寺拳法部を選び、入部いたしました。入部を決めた理由は、勧誘に来られた先輩の「日本一になれる」という言葉でした。

「日本一になる」ということを強く意識したのは、平成 9 年の関東学生大会及び全日本学生大会に臨む先輩方の姿を見た時でした。当時 3 学年であった 43 期の先輩方は、関東学生大会の団体演武において、惜しくも最優秀を逃されたものの、全日本学生大会でみごと最優秀を獲られました。関東で流された涙、「防大の団演にとって、最優秀以外は負けだ」との言葉が印象的でした。その後の全日本に向けた練習、迫力の演武、試合後の成績発表の際、優秀賞に他大学が呼ばれた瞬間、先輩方が浮かべられた歓喜の表情を今でも忘れることができません。「日本一になる」とは、こういうことかと強く感じた出来事でした。

「日本一」を目指す部だけあり、練習は非常に厳しいものでした。我々 45 期は、入部当初、仮入部を含め 15 名近くいた同期も、2 学年進級時には 4 名となりました。同期生が 4 名というのは、部の長い歴史において、最も少ないようです。当時は、部の存続や防大少林寺拳法部の象徴ともいえる団体演武への参加も危ぶまれる状況でした。

3 学年時には、44 期政権に加わって頂き、6 名で何とか関東学生大会の団体演武に参加となりました。全日本学生大会は、足の指の骨折が完治しないまま出場した記憶があります。45 期の成績は残念ながら、関東優良賞、全国敢闘賞と振るいませんでしたが、団演に出場できないという最悪の事態は回避されました。

政権となっても団演への参加は続きました。8 人で団演を組むため、3 年係兼団演係として 46 期の指導を行いつつ、選手として参加しました。少ない人数での政権運営に加え、団演の練習等、多忙な日々であったと記憶しております。結果的には団演係として、46 期を日本一にすることはできませんでした。しかし、卒業後 47 期が関東で最優秀、48 期が遂に念願の全日本で最優秀賞を獲得したことを聞き、防大少林寺拳法部の伝統と団演に懸ける思いを後輩に伝えることができたと考えております。また、4 名という少ない人数で政権を運営できたのは、辛い時期を共にやり抜いた我々 45 期の団結の強さと当時の部長を始め、師範の先生方、諸先輩方の御指導、御鞭撻、並びに後輩達の協力によるものと思っております。

現在、防大の指導教官として勤務する傍ら、校友会顧問として携わっておりますが、

今後とも諸先輩方から脈々と続く輝かしい伝統を受け継ぎ、政権を中心とした部務運営を尊重しつつ、必要な指導及び支援を実施していく所存であります。

結 手



【 スナップ⑩ 45期生 】



防衛大学校少林寺拳法部 50 周年記念行事に寄せて

46 期生 副将 坂井 旭

陸自 58 期指揮幕僚課程学生（目黒）

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年おめでとうございます。防衛大学校において少林寺拳法を修行した OB の一人として、この記念すべき節目に、目黒の陸上自衛隊幹部学校の指揮幕僚課程に在籍し、この行事に関われることは私にとって大変光栄なことだと感じています。半世紀にわたる防衛大学校少林寺拳法部の伝統を築けたのも、多くの諸先輩方が陰に日向にと少林寺拳法部を支えていただいたからだと思います。防衛大学校で少林寺拳法を学んだ者の一人として諸先輩方のこれまでの努力に対して敬意を表したいと思います。

この記念すべき節目において、私のような若輩のものが寄稿をさせていただくことは、僭越とは思いますが御依頼をいただきましたので、駄文ではありますが寄稿させていただきます。

月日がたつのは早いもので、私が防衛大学校を卒業して 11 年経ちました。この間部隊経験を重ねて来ましたが、今も思えば、私の防大時代で思い出すのは少林寺拳法部の拳士として、厳しくも楽しい鍛錬の日々のことばかりで、全日本大会に団体演武優勝を目指し、同期とともに汗を流し切磋琢磨した日々が懐かしく思えます。残念ながら私たちの期は優勝することができませんでしたが、現役の防衛大学校拳士が全日本優勝を目指して日々錬成している姿を見ると、心強くも頼もしくも思います。防大少林寺拳法部 OB の一人として、少林寺拳法部の伝統と精神がこの先も引き継がれていくことを切に願っています。

さて、私が防大を卒業して 11 年の間、部隊で様々な業務を実施してきましたが、防衛大学校での厳しい修行のおかげで、これまでの勤務を乗り越えることができました。また、私が 3 年前に UNDOF の要員として、ゴラン高原に派遣された際には、少林寺拳法の演武を他国軍人や地元住民に披露する機会を得て、文化交流にも一役買わせていただくこともできました。しかし私は防大少林寺拳法部で最も良かったと思うことは、全国の自衛隊の部隊・機関どこに行っても防大少林寺拳法部の諸先輩方がおられて、我々後輩に対し、温かいご指導、御助言を与えてくれるということです。当然私の部隊勤務においても数多くの少林寺拳法部の諸先輩方に様々な面で助けられて、少林寺拳法部の「人」の絆の大きさを常に感じていました。

現在、指揮幕僚課程入校中ですが、久々に動議を着て練習したところ、少林寺拳法部の技を習う楽しさ、また組手主体という人と人との繋がりを大切にする練習体系を改めて実感し、その素晴らしさを再認識しました。今後も、練習を続け、何らかの形で少林

寺拳法に携われるよう努力していきたいと思います。

また、将来にわたり防大少林寺拳法の伝統を築いていけるお手伝いをできればと思っています。全国の先輩方におかれましては今後ますます防大少林寺拳法部が発展していきますように現役部員も含めまして我々後輩を御指導・御鞭撻いただければ光栄です。

結 手



【 スナップ⑩ 46期生 】



【 スナップ⑪ 47期生 】



50周年に寄せて

47期生 主将 矢野 健一
第39普通科連隊（弘前）

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創立50周年おめでとうございます。47期生がその伝統の一部になれた事をうれしく思います。47期生を代表してお祝いの言葉を述べさせていただくとともに、以下寄稿にあたり、自らの思い出を述べさせていただきます。

まず、クラブに入って驚いたのは上級生の計り知れない強靱な体力です。それほど体力錬成をしていなかった自分には、いつも体操後のランニングについて行くのが精一杯でした。特に統制長の「1年、鉄棒の下！」という言葉は恐怖でした。しかしながら日々体力錬成を積み重ねるうちに、1学年の終わりには、他のクラブの同期より数段体力がついており、自分のクラブに対して改めて誇りを感じる事が出来ました。

そして2学年時には、カッター訓練後の黒帯になるための厳しい練習が果てし無く続きました。特に夏合宿においては同期の半分以上が倒れるという健康増進を超えるものでありましたが、体・心ともに日々追い込まれながらも同期全員の力で達成する事が出来ました。若い時期にあのような経験ができた事は、何物にも代えがたい貴重な財産となっています。

3学年時は関東学生大会・全日本学生大会と、団体演武中心の練習でした。関東学生大会で数年ぶりの最優秀を頂き、全日本学生大会でも奪還するぞ！という強い意気込みで練習に取り組みました。時には自習時間にも反省会を行い、指導官に見つかり反省文を書くという事もありました・・・結果は残念ながら優秀に留まり、本当に悔しかったことは忘れもしません。政権になってからは技術面での向上を重視し、神田先生・頼富先生や、その他の先生方・先輩方にご足労願ひ、ご指導頂きました。また、この年に全日本学生大会で最優秀を取れなかったら本当に防大は衰退してしまう、という危機感の下、今はできなくなった12人での団体演武を復活させました。このためメンバーは主将の私から2学年までの混成となりましたが、このお陰で部全体のレベルが上がったと思います。その甲斐もあり最優秀を5年ぶりに頂く事ができました。本当に4年間修業を続けてよかったと思うとともに、主将の役目を果たす事ができ安心しました。

このような4年間の経験から、少林寺拳法の自己確立・自他共楽の精神と、三徳を少しは兼ね備える事が出来たのだと思います。また、かけがえのない同期、先輩・後輩とめぐり合う事ができ、生涯の財産となりました。このようにすばらしい「縁」を導いてくれた防大少林寺拳法部が、今後もますます発展されるとともに、日本及び世界の平和に貢献できる自衛官・拳士が育成される事を祈念して、50周年に寄せるお祝いの言葉とさせていただきます。

再合掌



50周年に寄せて

48期生 主将 對比地貴行

第1空挺団普通科中隊長（習志野）

合掌 防衛大学校少林寺拳法部創部50周年、誠におめでとうございます。輝かしい伝統ある少林寺拳法部が一つの節目として創立50周年を迎えられることを、心からお慶び申し上げます。防衛大学校少林寺拳法部を引退して以来、早いもので約10年の月日が流れようとしております。その間、隊務の合間を見て防衛大学校に激励に行く機会がありましたが、そこでの後輩たちの練習に励む姿・大会での活躍ぶりを見て、防衛大学校少林寺拳法部の伝統がしっかり引き継がれており、本当に頼もしく思います。これも、少林寺拳法部グループ総裁、少林寺拳法部部长、奥平会会長等をはじめとした関係各位の皆様が防衛大学校少林寺拳法部に対する熱い御支援・御指導・御鞭撻の賜物であると深く御礼申し上げます。私もその一助となれるよう、今後とも尽くせる限り少林寺拳法部OBとして貢献していきたいと思っております。

さて、私は中隊長として、如何に隊員を統率するかを自問自答しながら日々精進しているわけですが、行きつくところはやはり防衛大学校少林寺拳法部で培った「人格」であり、それを部隊勤務の十分活かすことができていると自負しております。今思い出せば、一番の思い出はつらく厳しい黒帯自覚を同期とともに乗り越え、黒帯の授与式の時に同期とともに流した涙です。特に黒帯自覚の日々は忘れられません。練習前にはいつも憂鬱な気持ちで吐き気がしていたことを思い出します。その中で「自分の弱さ」を知り、そして、それを乗り越えることができたのは、仲間との「絆」であったと思います。特に「自分の弱さ」を知ることは、自分が強くなるための第一歩であり、また相手に対して優しくなれるのだと学びました。時には同期に助けられ、時には自分が献身的に先頭に立つ。こうして、つらい日々を同期とともに乗り越えてきたからこそ、黒帯授与式の時に自然と涙が溢れ出たのだと思います。少林寺の聖句にある「己れこそ、己れの寄るべ、己れを措きて誰に寄るべぞ、良く整えし己れこそ、まこと得難き寄るべなり。」今思えば、この聖句を実現するためには、まず「自分の弱さ」を知ることからはじまるのだと思返します。そして、良く整えし己れとは、自分の強さを誇示するものではなく、「自分の弱さを認め、日々精進し続けること」と「他人への優しさ（思いやり）」であると思います。今、中隊長として勤務しておりますが、私の信条は「隊員の上に立つのではなく、隊員の先頭に立つ」ことです。決して自分に驕ることなく、謙虚さと優しさ忘れず、隊員とともに苦楽を共にすることが大事であると確信しております。今後とも防衛大学校少林寺拳法部で培った「人格」に更に磨きをかけ日々精進し、部隊の精強化に貢献していきたいと思っております。

今後とも防衛大学校少林寺拳法部の更なる御発展・御活躍を祈念申し上げます。結手



50周年に寄せて

49期生 主将 房野 賢一
第1術科学校中級学生（江田島）

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創立50周年おめでとうございます。49期生一同心からお祝い申し上げます。合わせて、この50年間部が存続し伝統を築いてこられたのは、部の活動にご尽力下さった多くの方々のお陰であり、心から感謝申し上げます。また、50年という長い歴史の中の4年間を毎日必死に過ごし、先輩から後輩に伝統を受け継げたことを大変嬉しく誇りに思います。

学生時代を振り返ると、様々なことが思い出されます。49期生は人数は5名と非常に少なく、苦しい場面も多々ありました。しかし、先輩や後輩はもとより、多くの方々の支えにより、失敗しても何事にも前向きに向かっていくことができました。日々の練習においては、どうすれば技がうまくなるか、どうすれば大会で力を発揮することができるか、どうすれば仲間を増やすことができるか、といったことを常に考え、行動し、改善していくというサイクルの連続だったように思います。このような経験が、幹部自衛官として勤務する中で自らの支えとなっていることを今強く感じています。

現在の部を支える現役学生は、50年の歴史の中にある良き伝統を継承するとともに、柔軟な発想をもって、常に新たな挑戦を続けて下さい。また、多くの仲間と少林寺拳法ができる喜びを忘れず、切磋琢磨して下さい。

最後に、防衛大学校少林寺拳法部の今後益々の御発展をお祈り申し上げ、49期生からの
お祝いの言葉とさせていただきます。 結 手



【 スナップ② 49期生 】



創立 50 周年によせて

50 期生 主将 鳥居 悠希
海自 第 25 航空隊 (大湊)

合 掌 この度は創立 50 周年、誠におめでとうございます。

私は平成 15 年に防衛大学校に本科 50 期生として入校し、少林寺拳法部に入部しました。同部屋の上級生に演武の動画を見せてもらい、すぐに入部を決めました。高校まで 8 年間、野球を続けており、体力には多少自信がありましたが、入日当時は先輩についてゆくのがやっとの状態で、4 年間続けられるか不安を感じる部分の方が多かったと思います。

2 学年時の全国大会には、当時の部員数の少なさもあり、団体演武に出場させていただきました。4 学年の先輩と組むことが多く、自分にとって大変な挑戦でしたが、最後まで脱落せず、必死に練習を重ねました。しかし結果は優良賞。次年度には自分が中心となって、必ずや最優秀賞を勝ち取ってみせるという決意を固めました。また、部員数が当時は一つ上の先輩期が 5 名、部全体でも 30 名弱という規模の活動であり、将来の防大少林寺拳法部存続を意識するようになり、PR 動画を作成したり、毎年の部員確保に傾注し、下の期以降は毎年 15 名前後の部員を確保することができ、自分が 4 学年時には約 60 名程度の大きな規模の校友会へとすることができました。

3 学年時の全国大会では、前年度の悔しさをバネに猛練習を重ね、悲願の最優秀賞を獲得することができました。政権時には 50 期主将に任命され、大会での好成績を目指すのはもちろんのこと、1 人の人間として強く、そして人の痛みのわかる温かい人間性を持つよう、部の責任者として邁進していきました。最後の全日本大会では、3 学年中心の団体演武で最優秀賞を獲得し、2 連覇を達成。自分自身も組演武 3 段以上の部において敢闘賞を獲得することができました。これらの成果もすばらしい同期がいたからこそ得られたものだと思信しています。4 年間、苦楽を共にし、時には意見をぶつけ合い、切磋琢磨した思い出は一生の財産となっています。特に防大のお家芸ともいえる団体演武は、時にロボット演武などと揶揄されることも多かったのですが、どの大学にも負けない練習量と、防大でしか成し得ない団結力をもって、日本一となった自身は決して忘れることはできないでしょう。

私は現在の勤務場所の影響もあり、練習や試合を観戦することが殆どできずにいますが、防大少林寺拳法部の伝統を守って、必死に練習に励んでいる後輩がいることを誇りに思っています。団体演武の最優秀賞は至上命題かされている部分もあり、相当なプレッシャーとの闘いもあるでしょう。そういった闘いから決して逃げずに、一部員としてではなく、一人の人間として大きく成長して欲しいと切に願っています。監督や顧問として指導されている皆様におかれましても、今後の防大少林寺拳法部の発展と、部員の成長を願っておりますので、どうかよろしくお願い致します。 結 手



【 スナップ⑳-1 50期生 】



【 スナップ⑳-2 51期生 】



【 スナップ⑳-3 52期生 】



4年間を振り返って

51期生 主将 加藤 僚
第5普通科連隊（青森）

合 掌

長雨の候、皆様には、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度は、防衛大学校少林寺拳法部創立50周年、心よりお祝い申し上げます。51期を代表いたしまして一言御挨拶をさせていただきます。

昨今の国内外情勢にかんがみ、現在の自衛隊は非常に厳しい環境の中にあり、幹部自衛官に対する期待感は益々増大しているものと確信しております。防衛大学校の3本柱の1つであります校友会、その中で特に「人づくり」としての少林寺拳法は、まさに幹部自衛官としての資質を養う絶好の場であると確信しております。現役拳士の皆さんは、日々がむしゃらに稽古に励んでいることと思いますが、私もこの文章を書いていますと、現役拳士として防大で稽古に明け暮れていた日々が思い出されます。つたない文章となりますが、当時の思い出を少しばかり申し述べたいと思います。

防大少林寺拳法部の伝統といえば「団体演武」であります。当時の団体演武の理念は「気合」「ガチンコ」「統制美」でした。特に気合は会場を一瞬にして静かにするほどの気合であり、まさに少林寺拳法の真髄ともいえるものでした。いつしか歴代の先輩方のように団体演武に出たい、そして優勝したいと思うようになり、当時では珍しい同期だけによる団体演武により日本一に輝くことができたことはまさに感動の極みでした。

4学年となると、「人づくり」としての少林寺拳法として悩む日々が続きました。如何に後輩を集め、そして育てるか。「心、技、体」を育て、如何に魅力を伝え楽しんでもらえるかに悩んだ日々でした。当時は部員数の減少に歯止めをかけ、部員数が充実してきた頃であり、この流れを変えてはいけない、これから新しい時代を築き上げていかなければいけないという重責に悩んだ日々でした。思い返せば、当時私が入部した決め手となったのは諸先輩方へのあこがれであり、人が集まる原点はそこにある、今私たちはそのような存在にされているのかを考えさせられた1年でした。本当にきつい1年間でしたが、4年間で一番充実した1年間でした。

いろいろと振り返りながらも、この4年間で一番の宝物、それはやはり同期です。今の私があるのも、また、この充実した4年間過ごすことができたことも同期の存在が大きいと確信しております。あげればきりがなほど沢山の迷惑をかけて来ましたが、お互い助け合いながら、切磋琢磨して乗り越えて来ました。これはなにものにも替えがたい4年間です。この場を借りて御礼を述べたいと思います。

そして現役拳士の皆さんにおかれましては「今」を一生懸命に励んでいってください。防衛大学校少林寺拳法の「今」を築き上げていくのは間違いなく現役の皆さんです。良き

を引き継ぎ、悪しきを変え、自らの信念を信じ一生懸命に現役時代を過ごしてください。
必ずや、立派な拳士、社会人そして幹部自衛官となれることでしょう。

最後になりましたが、これからの少林寺拳法のますますの発展を祈念してご挨拶とさせていただきます。本日は本当におめでとうございます。

結 手



上段左：3 学年関東大会

上段右～下段右：3 学年春合宿

中段左～下段左：3 学年夏合宿

【 スナップ④ 51 期生 】



防大少林寺拳法部 50 周年記念寄稿

52 期生 主将 上田桂裕

海自 第 1 航空隊 (鹿屋)

防大少林寺拳法部が創設 50 周年を迎えましたことを心よりお喜び申し上げます。このような記念すべき行事に際し、記念寄稿させていただく機会を得ましたことを誇りに感じております。

私は現在、海上航空発祥の地である「鹿屋航空基地」におきまして、P-3C 哨戒機の操縦士として勤務しております。緊迫化する東シナ情勢の中、日夜哨戒・監視活動に励んでいる次第であります。状況によっては、寝る間もなく離発着を繰り返す日々が続くこともあり、精神的にも肉体的にも過酷な環境におかれることが多々ありますが、これまで弱音を上げずに職務に専念することができたのは、ひとえに大学時代に少林寺拳法部で培った気力と体力の賜物であると確信しております。大学時代に流した多くの血と汗と涙は、今こうして還元されているのだと思うと、現役の後輩には、是非とも自信を持って最後まで頑張り抜いてもらいたいと思います。

さて、少林寺拳法部での思い出について述べたいと思いますが、同期で宴会をすれば、話が尽きる前に酒が尽きて、朝を迎えるほど思い出は深いもので、どの話を厳選して伝えるかは至難のことです。特に、私たちの期は、多くの宣誓・先輩方の手を煩わせた有数の「出来の悪い期」であり、輝かしい栄光の思い出話を語るには乏しいのですが、同期の失敗によって頂いた先輩からの無償の愛については、語ることの尽きない期であります。

私たちの期は、入部当初から体力に自信がない者が多く、平均して技術力が低かったため、それを克服するための「特別プログラム」を組まれることが日常でした。それは、今から考えると吐き気を催すような、文字通り「地獄」の日々であり、部活の時間が近づくにつれて、キュルキュルと痛む胃を必死に抑え込みながら道場に通ったことを今でも鮮明に覚えています。

「辛さ」を「楽しさ」が超えることができず、何度となく退部を考え、その度に同期に説得され、また反対に辞めようとする同期を引き留めるという日々が続きました。何のために辛い思いをしているのか、何が楽しくて続けているのか。そんな漠然としてモヤモヤを抱えながらも、がむしゃらに前だけを見て同期と励ましながら日々を過ごしました。真っ暗闇の中をただひたすらに進むと突然眩い光がさしました。「黒帯授与」でした。同期全員が抱き合って号泣しました。この時に少林寺拳法部員であることの自覚とプライド、そして何より強固な同期愛が芽生えました。その後も体力的な「地獄」は相変わらず続きましたが、目指すべきものを得た後は、同じ苦ではありませんでした。そうして先輩方の熱意あふれる指導のもと団体演武の練習を乗り越え、5 連覇を成し遂げることができた時、

人生で一番の大号泣をしました。少林寺拳法部における日々は、この「涙」にこそ、その価値が集約されていると思いました。政権になってからは、後輩にこの「価値」を味あわせたい一心でした。厳しいことも言いましたし、過酷な練習計画もしましたが、最後に後輩の涙を見ることができた時に、何とも言えない救いを感じました。

50周年を迎えましたが、これから先も「キツイけれど楽しく、やりがいのある部」でありますこと、また今後益々の発展をOBの一人として願っております。繰り返しとなりますが、防大少林寺拳法部創立50周年を心よりお祝い申しあげ、結びとさせていただきます。

結 手



【 スナップ㊦-1 53期生 】



【 スナップ㊦-2 54期生 】



【 スナップ㊦-3 55期生 】



【 スナップ㊦-4 56期生 】



【 スナップ㊦-5 57期生 】



防大少林寺の精神をいかして

53期生 主将 礒畑 良太
第17普通科連隊（山口）

防衛大学校少林寺拳法部創立50周年おめでとうございます。53期主将の礒畑です。現在、第17普通科連隊で勤務しており、赴任して4年目になります。この間、小隊長、レンジャー教官を経験しましたが、心の支えとなっているのは防大少林寺で学んだ精神だと感じています。それは、「防大少林寺以上に過酷なことはないだろう、あの時を耐えたのだから大丈夫だ」という思いがあるからです。

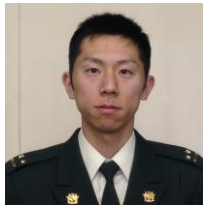
私が防大少林寺に入部した動機は単純で肉体的、精神的に強くなりたかったからです。そんな単純な思いで入部してからの日々の練習は非常に過酷でした。ランニング(笑顔で)、懸垂、基本練成、演武、乱捕りととにかくついていだけで精一杯でした。一番過酷な時期は、3年生でした。夏合宿が始まり、団体演武の練習まっただなかでの次期主将と告げられた後の練習です。同期を引っ張るのと同時に4年生から指導を受けたところを指摘し合って修正していく。そして練習が終わり夜に同期で集まってビデオ研究をして、明日はここを改善していこうと決めて一日が終了するという日々でした。土日も3部練で休む暇もなく大会前の2か月半は今でも過酷な日々だったなとしみじみと感じます。大会の結果は練習と先輩の指導の成果もあり全日本4連覇を果たしました。

山口に赴任し、小隊長となって初めてのことばかりで何をしたらいいかわからない時期がありました。防衛中隊検閲の5夜6日で、1日目から雨のことがありました。BOCに入校前で防衛要領、指揮要領もわからず巡回指導しかしていませんでしたが非常に体力的にも精神的にも疲労しました。しかし、防大少林寺の団体演武の練習で終わりの礼が始まりの礼とふらふらで練習した日々と比べればなんともないという思いで乗り切ることができました。

振り返れば当時はきついことでも今ではいい思い出です。同期等と話すときは笑い話になっていますが。今後も困難な壁にぶち当たろうとも防大少林寺で学んだ精神を胸に人生を送ろうと改めて感じました。



【 スナップ②⑥ 53期生一同 】



創立 50 周年に寄せて
— 少林寺拳法を振り返る —

54 期生 主将 坂口 雄幸
第 397 会計隊 (大久保)

合 掌

この度は少林寺拳法部創部 50 周年大変おめでとうございます。54 期一同を代表しましてお祝い申し上げます。

さて、54 期についてですが、1 名を除き皆が未経験者であったため、初めて出会った防大少林寺拳法部がそのまま少林寺拳法を意味していました。そもそも少林寺拳法とはどのような格闘術なのか (後に昇級審査の勉強にてそれは本当の目的のための一手段に過ぎないと知ることになるのですが。) ということすらよく分からぬままに入部を決めた者は私だけではなかったでしょう。

そこには心静かに自分と向き合える鎮魂行という神聖な時間、先輩方が手取り足取り教えてくださる技術修練の場、そしてもちろん気力・体力の限りを爆発させるトレーニングと、一日の活動内容は文字通り「心・技・体」全てを取り揃えたものとなっており、明日がこなれば良いのと思うほどヘトヘトになる一方で、これ以上はないというほどの充実感を得ながら日々を過ごすことができました。

躰・形をきちんと守ることの大切さを学んだ 1 学年。下を持つことで、見られる自分を意識した 2 学年。団体演武のため、同期で感情をぶつけ合い伸びていった 3 学年。自分たちのあり方を模索して先生、監督、OB、他大学の方々とも多く交流をもった 4 学年。

どの部分を掬い上げてみても防大少林寺拳法部での活動を通じて私たちが経験できたものは貴重かつ価値のあるものでした。

遠くから見れば大抵のものは綺麗に見えるという言葉は、過去を過度に美化することへの反発としてよく言われます。私はそれでも良いのだと思います。少なくとも、それが現在の否定としてではなく原動力として働くのであれば。

ところで、『星の王子さま』で知られるサンテグジュペリは、『人間の土地』の中で次のような言葉を残しています。

「真の贅沢というものは、ただ一つしかない。それは人間関係の贅沢だ。」

彼の職業は郵便物を届ける航空機の操縦手でした。彼とその僚友は、まだ安全な航路が開拓されていない時代に人と人との言葉を繋ぐメッセンジャーとして、日々命がけの飛行を繰り返していました。

時に命の危険が身に迫りうるということ。けれども誰かがやらなければならないということ。この二点において共通な世界を生きる自衛官として、実際の有事は経験していないものの、私はサンテグジュペリの言葉に深く心打たれます。人間関係すなわち縁こそが何より大切なものであると。

私にとっての僚友は防大少林寺拳法部の同期です。今まさに自分と同じ立ち位置にいて、離れていてもかつて隣で励まし合った姿をまざまざと浮かべることのできる仲間の存在こそが最高の贅沢であり宝物です。

社会のある立場において「人」としての質を磨き、周りの人を感化していくこと。

つまり一人ひとりが水面に放られた石が生む波紋のように周囲に影響力を持つこと。

それが少林寺拳法という生き方が目指す人物像だと理解しています。

そうした人間になるべく、それぞれの場所で奮闘する同期の姿を力に毎日少しずつ波紋を大きくしていく努力をしていく所存です。

最後になりましたが、防大少林寺拳法部の今後ますますの発展を祈念するとともに、こうして今も皆様と繋がっていただける「縁」に感謝し、54期代表の言葉とさせていただきます。

結 手



【スナップ②⑦-1 54期生 約20年ぶりの校外合宿(秩父:長瀬荘)】



【スナップ②⑦-2 54期生 自衛隊大会(厚木)】



【スナップ②⑦-3 54期生～57期生】



【スナップ②⑦-4 54期生 納会】



防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年記念

55 期 主将 尾上 真一

第 1 空挺団特科隊 (習志野)

この度、防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年を迎えるにあたり、55 期一同心からお祝い申し上げます。私たち 55 期生も防衛大学校を卒業しはや 3 年が経ち、各自衛隊の初級幹部として先輩方々に叱咤激励されつつ、教育訓練及び恒常業務等に邁進しております。

さて、防衛大学校少林寺拳法部も 59 期政権となり新たな目標に向かって日々稽古に励んでいると思います。部員のみなさんが、今一番感じていることは何でしょうか？

もちろん各学年、各人によって違いはあると思いますが、58 期政権とは変わっていると思います。当然私たちも学年が変わるごとに感じることや考えることは変化していきました。

まず 1 年生のころは上級生に言われるがまま、ただ一生懸命稽古に励んでいました。その中でも印象に残っていることは、当時白帯から茶帯に変わる際の儀式的なものに、ブラウンシーズンというものがありませんでした。その内容は基礎を固めるというものと、気力・体力を向上させるものがあり、その大半が後者であったと思います。体力的にも精神的にも辛いですが、それを乗り越えた時の達成感は大きく、同期の絆もさらに強くなりました。

2 年生のころは、1 年生の手本になることを求められたこともあり、上級生もさらに厳しくなりました。私たちの期はいわゆる「粗相」も多く、黒帯から白帯に戻されたこともありましたが、その頃の辛さは今でも覚えています。その中でも幸運なことに私は 3 年生と一緒に団体演武に出場できることになりました。嬉しい反面、プレッシャーもかなりありました。全日本が近づいてくると「とおす」回数も増え、身も心もボロボロになっていきましたが、最後の 1 週間で進化し、見事日本一に輝くことができました。これも 1 年生の頃から積み上げてきた基本・基礎、気力・体力があったからであり、それまで厳しくも優しく指導してくれた先輩方々には心から感謝しています。

しかし、4 年間で 1 番大きな壁にぶちあたったのが 3 年生の時でした。私たちの期は一番団結しなければならない時に団結できず、結果として団体演武連覇を閉ざしてしまいました。その悔しさは言葉で表せるものではありませんでした。

その中、私たちは政権になりました。最初は悩み苦しみましたが、試行錯誤をくり返し、最終的に後ろ姿で後輩に示していくことに決めました。口で指導するだけでなく、自分たちの演武をみせること・大会に出場して結果を出す等、後輩たち自身の目で見えて感化されれば・・・と努力しました。

今の政権 (59 期) も悩んでいることはたくさんあるでしょう。プレッシャーもあるでしょう。しかし、それは過去の先輩方々も感じてきたことであり、必要以上に不安に思うこ

とはないです。その悩みについて同期と話し合い、自分たちの考えた形で運営していけばよいと思います。そして後輩の悩みにも耳を傾け、その学年に応じたアドバイスをしてあげてください。そうすれば少林寺拳法部としてひとつにまとまっていくでしょう。

少林寺拳法部が創立 50 周年を迎えることができたのも、先輩方々のご指導・ご鞭撻あつてのことです。その伝統を継承していくために、私たち 55 期も貢献していきたいと思っていますので、皆さんこれからも頑張ってください。応援しています。



【 スナップ⑳-1 55 期生 】



【 スナップ⑳-2 56 期生 】



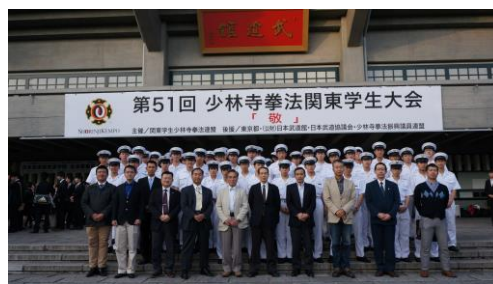
【 スナップ⑳-3 57 期生 】



【 スナップ⑳-4 58 期生 】



【 スナップ⑳-5 59 期生 】



【 スナップ⑳-6 59～61 期生 関東大会 】



【部旗の完成 56 期生作成 57 期政権で披露】



【菅野元部長の寄贈の部旗披露式】



「全員で」

56期生 主将 佐藤 康平
第11普通科連隊（滝川）

合 掌

この度は防衛大学校少林寺拳法部創立50周年誠にありがとうございます。今回創立50周年という記念日を迎えられたのも諸先輩方から受け継がれてきた伝統が脈々と引き継がれているからこそであると確信しております。申し遅れましたが私56期主将の佐藤康平と申します。諸先輩を前にして恐縮ではありますが、記念に際しまして一筆とらせていただきます。

56期が3学年時、目標としては当然我が部伝統である団体演武での全日本学生大会最優秀賞でした。もう二度としたくないような厳しい練習でしたが、今思い返すとあれほど何か一つのものに夢中になった時期はありませんでしたし、また今後もこれ以上ないと思います。結果として自分たちは最優秀賞を取ることができませんでした。大会後の慰労会において56期全員で号泣したのを昨日のように覚えております。そこで感じたのは、このような悔しい気持ちを後輩には決してさせない、の一点でした。こうして自分たちはこの思いを胸に政権を交代して56期政権が部の指揮をとりました。私たち56期の方針としては「全員で」というものでした。これは全日本を取れなかった自分たち56期が後輩たちを指導しても、「全日本を取れなかった＝全日本をとらせることができない」のではないかと、思いまは自分たちが後輩以上に努力して技の向上を図る必要があると思いこのような方針になりました。政権になると後輩の指導や部の運営など自分たちに集中することは当然難しく、しかし56期は自らの時間を割きよく練習をやってくれたと思います。そしてその年の全日本学生大会では、3年ぶりに団体演武で最優秀賞を取ることができ、またほかの種目でも入賞することができました。先輩方にとっては取るに足らない結果かもしれませんが近年なかなか賞を取れなかった我が部にとっては大きな成果であったと確信しております。祝勝会で喜ぶ57期の姿を見たらなおさらのことでした。

防大少林寺拳法部に入って得たものとは聞かれたら、「日本一になれたこと」「心身ともに強くなれた」など人によって様々ではあると思いますが、私は迷わず「素晴らしい同期と出会えたこと」を挙げるでしょう。56期13名途中部を離れたものはおらず、それぞれに強烈な個性があり、ぶつかり合うこともありました。本当に今後も付き合っていきたい同期ばかりであります。

このような素晴らしい出会いを与えてくれたのも、この少林寺拳法部が半世紀という長きにわたり成果を収め、よき伝統を残し続けた結果であると思います。今後も引き続き伝統ある少林寺拳法部の活躍とさらなる発展を祈願いたしまして結びの言葉とさせていただきます。本日は本当におめでとうございます。 結 手



50周年に寄せて

57期生 主将 盛満 昭彦
空自 航空機操縦課程 (静浜)

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年を心よりお祝い申し上げます。私たち 57 期は、防衛大学校を卒業してまだ 1 年程しか経っておらず、陸上・航空要員の者はようやく部隊での仕事や雰囲気にも慣れてきたところです。海上要員は、遠洋航海真っ最中であり日々の訓練に励んでおります。

さて、57 期の思い出といえばやはりブラウン及びブラックシーズンでしょう。

ブラウンシーズンでは、約 1 週間で行われた。ひたすら走って拳立して、鉄棒に付いて、また走って、気づけば同期をおんぶしながらドコモ坂を駆け上がって……。最初の 3 日間は、ただただ苦痛であり、悪夢でしかなかった。筋肉痛は当たり前。校友会前にお腹が自然と痛くなるのも当たり前だった。しかし、この苦痛を乗り越え続けること 3 日。なぜか、苦痛で嫌だったものが楽しく感じるようになってきた。この時、皆の頭には「ついに防大で生き抜くに必要なド M さが身に付いた!」「ダーマの加護を得られた」とよぎっただろう。この勘違いのおかげで全員でブラックシーズンが来た。57 期のブラックシーズンは夏合宿中に行われた。20km マラソンをしてからのポンド階段 57 本ダッシュ。そして千本シリーズで締めくくった。ポンド階段ダッシュは想像以上の過酷さだった。5~6 本で心が折れそうになる。だがしかし、気づけば 10 本、20 本とこなしていた。まさに、無我の境地というやつを全員体験していた。そして、待ちに待った千本シリーズ。ポンド階段を終えた時に黒帯を頂いていたので、その帯を締めてやる気十分の 57 期だった。しかし、その式はすぐに崩壊する。なぜなら、反省で拳立して開始 5 分で帯が土でぐちょぐちょになったからだ。皆が拳立ての後帯を 2 度見した。そして、なぜかお互いの顔を見て笑った。

このようなシーズンを乗り越え、団結が生まれ、辛いことも笑いに変えられるようになった 57 期は 3 学年時、全日本学生大会において団体演武の部で最優秀を奪還することができた。そして、今では全国各地に散らばり日々国防に貢献しようと邁進している。

最後になりましたが、私は防大少林寺拳法部で 4 年間練習できたことを誇りに思います。今後とも、後輩たちが逞しく人間的にも大きく成長していくことを願っています。



50周年に寄せて

58期生 主将 仲矢 光希
海自幹部候補生学校候補生
(江田島)

この度は、防衛大学校少林寺拳法部が創立 50 周年を迎えますことを心からお喜び申し上げます。創立当初と現在を比較してみると、この 50 年間での変化は大変大きなものであることと思います。私が 58 期として少林寺拳法部に在籍中、多くの先輩、関係者の方々とお会いする機会があり、草創期からの少林寺拳法部の練習の様子、大会の結果、部の方針などをお聞きいたしておりました。私の率直な感想は、昔と今では少林寺拳法部の雰囲気は全く違うという事です。乱獲りの縮小化、演武の制限化、ライバル校の変移にともない練習内容は年々変化しています。技術練習も屋外でやるようなことはなくなり、部員数も年によって様々です。私が認識しているだけでもこの 50 年の変化は相当なものです。また、それぞれの時代によって、この部での思い出も様々なものがあることでしょう。

以上のことは、みなさん十分にご承知のことであると思います。このように記念誌への投稿の機会をいただけたため、若輩者の OB としての考えを書かせていただきたいと思います。少林寺拳法の組織自体がここ数年で大きく変化し、防衛大学校の態勢も年々変化する中で、少林寺拳法部が様相を変えていくことは当然のことであると思います。私は政権時代、こんなにも変化している少林寺拳法部がこの 50 年間で継承してきた伝統とは何なのかを考えました。防大少林寺拳法部の伝統とは何であるのでしょうか。体力錬成、練習方法、練習量、といったような形として継承できるものなのでしょうか。そうではないと思います。私が考え出した答えは、目標に向かっていく強い信念であります。私が入部したときから、部の目標は全日本学生大会での優勝、特に団体演武での優勝でした。どんなに日程が厳しくても、可能性が低くても、目標を変えることなく毎年練習に打ち込んでいました。私たちが当たり前のように考えているこの理念こそ、防大少林寺拳法部の伝統であり、強みであると思います。この伝統があるからこそ、我々は時代の変化に流されることなく、高い目標を持つ組織であり続けることができるのだと思います。この伝統は、先輩方によって確立され、先輩方の功績が今の我々のささえになっていることは間違いありません。私自身、この部活の伝統を継承する一員になれたことをうれしく思っています。

最後ではありますが、近年一般大学の勢力が強まり、我々も遅れをとらぬよう必死に模索しています。このような時こそ強い信念が必要とされる時だと思います。諸先輩方をはじめ、関係各位の方々が、現役部員に接する機会がございましたら、ぜひ心構えについても伝えてくだされば後輩の参考になることと思います。

50 周年を迎えられましたこと、本当におめでとうございます。今後の部の発展と伝統の継承を願い私の言葉とさせていただきます。



創立 50 周年に寄せて

59 期生 主将 戸本 宗一郎
第 4 学年 機械工学専攻

今年度、奥平先生の指導のもと 10 期学生が防衛大学校少林寺拳法部を創部してから、50 周年をむかえます。当時の芝生での練習風景は今ではありませんが、場所を総合体育館に移し、現在も防衛大学校少林寺拳法部は日々修練に打ち込んでいます。私たち 59 期が防大少林寺拳法部に入部して、はや三年の月日が経ちました。今では私たちが政権として、部を運営していく立場に立っています。私たち 59 期が政権を運営する年が、50 周年を迎える記念すべき年であることに不安もありますが、それ以上に多くの期待に応えられるように頑張っていこう、という原動力にもなっています。

近年我が部の伝統の一つと言ってよい団体演武において、49 期政権時から全日本学生大会 5 連覇をした後、規定変更に苦しめられながら最優秀に返り咲いたのは、5 年間で 56 期政権時の 57 期団体演武の一度のみとなっています。やはり私たちの目標は、我が部の伝統の団体演武で日本一に輝くことであり、これは最低目標でもあると考えています。このように、強かった防衛大学校をもう一度よみがえらせるべく、伝統を再度確認するというところに重点を置き、59 期政権の運営方針を「不易流行」とし、日々練習に打ち込み、この方針のもと 60 期以下に指導を行い、新時代の「強い防大」を築き上げていくことが、私たちの責任だと思っています。私は政権になり約半年を過ごしてきましたが、毎日多くの事に気づかされ自分の至らなさを感じています。しかし諸先輩方が築き上げてきたこの部を日本一にすべく毎日試行錯誤し練習に取り組んでいます。

突然ですが、私は少林寺拳法が好きなの一人であると自覚しています。それは各先生方に教わる技や考え方、さらに年月を重ねるごとに面白くなっていく少林寺拳法、もっと少林寺拳法の本質を追求していきたく感じるからです。また少林寺拳法を通して各大学の友人と出会い、この部の先輩方、後輩に出会い、大切な同期と出会うことができました。その少林寺拳法を教えてくれたのは防衛大学校少林寺拳法部であります。結局のところ、私はこの部が好きなのです。少林寺拳法を教えてくれ、様々な出会いをくれ、多くの試練を乗り越えさせてくれたこの部に感謝しています。私に限らずこの部が好きでさらに誇りを持っている先輩方も少なくないと思います。私はこのように防大少林寺拳法部を通して少林寺拳法を知り、人とつながり、人として強くなれたと感じています。50 年続いてきたこの部に誇りを持ち、私たちはこれからも後輩たちにこの誇らしい部を受け継いでいってもらえるよう、部を発展させていきます。

最後になりましたが、うまくいかないことばかりの政権ですが、これからも全力で部の運営に励んでいきたいと思っておりますので、部長、先生、監督、顧問、OB、OGの方々には今後ともご指導、ご鞭撻のほどをよろしく願います。

国際貢献活動で活躍する OB



イラク復興支援活動に参加して

25 期生 小野寺 靖

陸上自衛隊会計監査隊長（市ヶ谷）

合 掌

防衛大学校少林寺拳法部創立 50 周年を心からお慶び申し上げます。この度、投稿依頼を頂き、僭越ですが私のイラク復興支援活動での経験を紹介させていただきます。

私は、平成 18 年 2 月から 5 月までの 3 ヶ月間、第 9 次イラク復興支援群長を命ぜられ、第 5 次復興業務支援隊の 100 名を含む約 600 名の隊員とともに、イラクのサマーワにおける復興支援活動を実施しました。

第 8 次群までの活動によって、陸上自衛隊の復興支援は相応の成果が得られ、第 9 次群の派遣は、陸上自衛隊の活動の総仕上げとサマーワからの撤収を見据えたものでした。イラクへの派遣は最終的に第 10 次群まで続きましたが、私たち第 9 次群は、活動の最終段階まで、「いつまで復興支援を継続するか?」、「誰がいつサマーワを撤収するか?」、つまり帰国時期が不明のまま、復興支援活動を継続しつつ水面下で撤収準備を進めることになりました。活動継続と撤収準備は態勢的に相反する事で、難しい対応が求められました。

当時、日本人の勤勉で緻密な働きぶりは、多くの住民の支持を得ていました。しかし、欧米とそれに協力するすべてを敵視する過激な勢力や、更なる支援を求め自衛隊の帰国を望まない勢力が存在し、デモや火器・爆弾を使用した妨害行動も行われ、油断はできませんでした。第 9 次群が活動を開始した時点で、自衛隊は一発の銃弾も射たず、誰も傷つけず、一人の自衛官の命も失っていませんでした。難しい活動を継続しつつも不要な争いを避け、約 600 名の部下全員を無傷で日本に連れて帰ることが、実は私の最大の任務でした。だからといって、各種脅威を恐れて基地に引きこもるのではなく、支援を継続し現地の期待に応えることが、日本に対する支持を高め反対派を押さえ込む最良の手段でした。

脅威に囲まれながら、私たちが復興支援活動を継続できたのは、現地の目線に立ち笑顔で手を振って活動に当たっただけではなく、十分な訓練を積み、常に武器と弾薬を携行し、各種の事態に対応しうる周到な準備のもと自信を持って任務に臨んでいたからです。一方、他国軍に見られた、武器を振りかざして一般市民を威圧する行為は、反感を買い自らを危険にさらしました。列国からも日本のやり方は評価を受けました。少林寺拳法で「正義なき力は暴力なり、力なき正義は無力なり。」という言葉を学びましたが、日本人の素晴らしい精神文化と自衛隊の精強さは世界に誇れる正義と力であることを実感いたしました。少林寺拳法部で培った精神と絆を大切に、皆様が発展されることをお祈りしております。

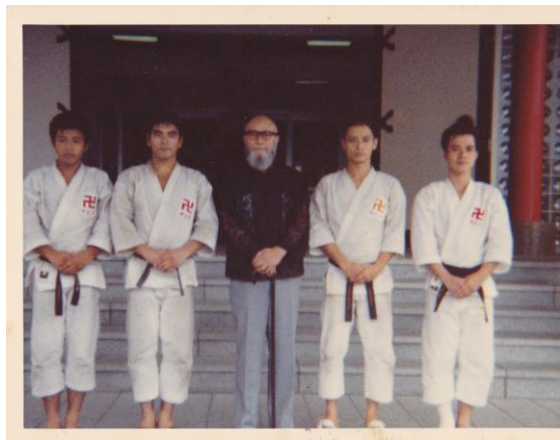
結 手

**「創立 50 周年」
お世話になった恩師を偲ぶ**

開祖を偲ぶ



【 1977年 第13回全国大会表彰式 団体演武 開祖に礼っ！（23期生3年生時） 】



【1979年夏 本山帰山 開祖と （24期生4年生時） 】

左から佐藤拳士・松田拳士・出口（栴見）拳士・高澤拳士

開祖法話「私は人の質ということに重大な関心を持っている！」から

(1980年3月26日春季大学合宿D週:25~27期生、約100名が参加)

・・・今度の合宿は恵まれているね。天気もよかったし、寒くもないし、暑くもないし。わずか1週間だったが、私、とうとうこれで三遍出てきた。(中略) 私はその時その時を一生懸命に生きようとして生きてきたつもりです。(中略) よく例に引くんだが、金属は金属でも金もあればプラチナもあれば鉛もある。あるいは合金の真鍮みたいなものもあれば、まあ、このごろのステンレスみたいのものもある。いろいろ、自然なのか、つくられたのかわからんがとにかく質がある。で、人間にもやっぱり質があると思うんですね。(中略) だから人間の場合も私、一緒だと思うんですね。少林寺という、これは一つの手段にすぎないんだけど、生き方の問題の中で適する人と適せん人があると思います。しかし、まあ、人間であるということについてはあまり大した違いはないはずなんで、ある程度は変えられるんじゃないかと思う。まあ、そういう中で諸君は縁があって少林寺をやって、まあ、ここまで来てくれた。

こないだも、いや、昨日か一昨日でしたか、私、防大の生徒を集めてちょっと話しをした。その後で女の子だけ会いました。君たちに会う気がないのではないんです。防大の生徒には、これはこないだちょっと触れたが、将来の日本の運命は本当に変えられる戦力を基本にした青年の集団である。これらの考え方がちょっと方向を間違うと、とんでもない方向にいく危険があるので、私は過去の例を引きながら、どうしたらええかというようなことに触れてみたいと思うて話しかけをした。それは期待を持っているからですね。君たちはどうでもええということではないです。

それぞれの分野で何をしたらろうけれども。世界中の過去の歴史、現在を含めて、いつでも革命があったり、変革がおこなわれるときには、兵隊が動く。要するに武器を持つて人たちが中心になるんです。思想をもったマルクス・レーニンでも最後は兵力を使わなければ革命はできないのです。だから、その人たちの考え方、生き方というものが一番重要だから話をした(以下略:開祖はこの法話の約1カ月半後の5月12日、遷化された)。



奥平正人先生を偲ぶ

防衛大学校少林寺拳法部誕生の思い出

(防大25周年(平成元年)を記念してお送りいただいた書簡)

創設当時の状況を書いてほしいと請われるままにペンを取りました。まとまりのないものですがお許しください。

何はさておき、現在の活動状況は素晴らしいの一言につきると思います。OB、現役の皆さんが一体となって少林寺の競技・技術を現実に表明した成果であると思います。同慶の至りで、陰ながら喜んでいきます。設立当時の状況について、簡単に述べてみませう。

一、学生の反応

昭和40年4月、防大指導官として着任して驚いたことは、学生のクラブ活動が非常に盛んに行われていることでした。陸士・部隊では到底考えられない。

少林寺拳法部も当然あるだろうと聞いてみると、ないという返事でした。そこで、本山のある香川県出身の学生に少林寺拳法について尋ねてみると次のような返事でした。あれは進学等を志す高校生はしていない。いうならば、一寸レベルの低い(?)、柄も余りよくない(?)人がしている!

一寸異様な感じがした次第です。良く考えてみれば自分も程度が低いのだから仕方ないのです。

- 学生委員長(校友会活動)が、4大隊にいたので聞いてみると、これ以上部の数は増やしたくない。まして少林寺拳法を学生がやるといっても認めない。潰すという気配でした。(当人は空手部所属でした。)自主的に行う学生のクラブ活動を左程まで束縛することはおかしい。よくないと思い、前期の香川県出身の学生に諮って何人かで考えてみることにした。
- 集まった学生はたぶん7人位であったと思う。早速4大隊の屋上で練習を始めたのが、たちまち14~15名集まるようになったのです。陸幕にいた田村倉蔵先生も支部ができること(防大に少林寺拳法部が定着すること)を非常に喜んでくれ、かつ応援をしていただいたものです。開祖にも田村先生と箱根の宿に伺い、この件を話すと大変喜ばれ、ぜひやってほしい旨語られていたのが今でも印象に残っています。

二、学生の入会(入部)状況

指導者格の4年生数人と1年生が中心かと思ったら、3・2年生も入ってきた。防大在職中、この傾向は続いたように思う。一群(軍)、二群と絶えず選別される他のクラブと違う点のはっきりと浮彫りされることになった。少林寺拳法部を行わずることによって、「他人を立て、自分も立ち。自分も立たんとすれば、他人を立てよ・・・」「上級者は下級者を活かし、下級生は上級生をたて・・・」を具現化することになる。かくして、部員数は、2~3年にして他の部より多くなるということになった。

三、技術について

科目表は現在のように立派なものではなかったが、一応整っていた。それに従ってやるわけですが、指導するものもレベルが低く、現在のように一気動作・拳理体感等といった用語もなく、基本的な・原理的な動作が中心となっていた。科学的思考力のある防大生のことだから、技術のマスターも早かった。昇級・昇段は条件を満たせば、最短コースで手続きをした。目安としては1年やれば初段に、4年卒業までに三段をとる。学生は卒業時

三段は、他の部との関係からか判らないが、なかなか三段受験を遠慮したように思う。

特に印象に残っているのは、2年くらいやった学生が、少林寺拳法には、教義・哲学があると述べていた。無手の格闘技(?)ととらえなければ、限界を感じるのも当然です。その限界を感じた時に、救い・目標を与えたのが教義(考え方)だったのでせう。技術と教義(学科)は並行して行わなければならないゆえんです。

四、大会等を見て

他の大学生や、隊員の動作と非常に差がある。他が悪いというのではなく、防大生の動作は、ごく自然で気取ったところもなく、かつピリッとしていて品があるように思う。これは、開祖も事あるごとに強調していたものです。市民として、国民としてごく自然な行動ができることが必要だし、一寸違うところは、何となく品(品位)があつてほしいと。大会等の結果をみますと必ず上位で、かつ各種目に及んでいる。創設期では考えられないことでした。これは、各々後に続く学生が、技術その他において極限に挑みつつ個人として、団体グループとして修練した成果であるのは、いうまでもありませんが年々継承されている結果であります。

五、防衛思想と少林寺教義

結論的にいうと、全く相通ずるものであります。少林寺の教義について云々する必要はありませんが、皆さんの学生生活・隊員活動・市民生活に活かしてほしい。

釈尊の残した道に縁を得たのです。法(ダーマ)は、キリスト教、道教と別のものではない。人間の生きざまを教える原理で、将来人間が続くかぎり変わることはないと思います。先手をとってはいけない、後手であっても決して負けてはならない。「百戦百勝は善の善なるものなり」(孫子)決して争ってはならない。個人でも国家間においても。争いを仕掛けられないように内容の充実したものに努力は決して忘れてはならないと思います。

設立してから25年経っていると聞きますと、もうそんなになったかと感慨無量です。それもその筈、自分は老人社会に入ったのです。(法律上、老人といえは65歳以上の方です。)私は年をとってから少林寺を始めたので決して皆さんのように上手ではありません。しかし、やると決意した以上続けようと思ひ現在もやっています。(細く長く)結果はどうかと問われれば続けていて大変よかつたと思っています。皆さんも続けて就業されることを希望します。

立派な防大教育方針のもと、自らつくった学生綱領を實踐徳目として行動している皆さんの善とは遙々たるものと信じます。部隊においても、市民としても期待される人物です。

物質的に恵まれた状況にある日本、いや世界においても人間として精神的な面の豊かさ・充実を忘れてはいけないと叫ばれだしました。仏教の三法印・(四法印)四苦八苦・四諦八正道等々について、暇の折には一寸考えてみませう。人間が集まってできている社会です。その衝に当たる人の質によって大きく左右されるのも至極当然のことといえよう。

少林寺は、質のよい人間をつくることを目指しています。人造り、世直しのために。国・社会の宝とまでは言われなくとも、一隅（片隅）に明るさを与えることができれば幸せではありませんか。

思いつくままに書いて、まとまりのないものになりましたがお許しください。皆さんが立派な幹部になり、いや立派な人生を築かれることを念願してやみません。

防大拳法部員の活躍についての報告

（昭和 44 年 4 月 25 日、勤務を終え浜松南支部長のときに開祖に宛てた書簡；会報に掲載される。）

合 掌

若葉もゆる新緑の候となりました。

管長先生にはその後如何お過ごしでしょうか 全国拳士景仰の中心、団結の核心であられま
す先生の益々のご清健を心からお祈り申し上げます。

さて、突然ながら 防大拳法部の近況についてご報告いたします。それは昭和 44 年度最
上級生である第 4 学年のクラブ部員から学生長が多数選定、学校指名を受けたことです。
内訳は学生隊長学生長 1 名、中隊長学生長に 2 名、その他ですが。部員及び防大少林寺クラブ
に関係した者ひとしく喜びとするところであり光栄に思っているものであります。少林寺
拳法がその 4 年間の苦節に耐えて、その真価を発揮したとも云える快事であります。これ
には次の点に意義があるのではないかと愚考しています。第一には、クラブ員に、指導
力と知力、体力の優れた者がいることであり、逆に云えば、三力を兼備した学生が少林寺
修行に熱意を傾注している証左ともいえます。第二には大学生の勉強と運動部のクラブ活
動の両立を証明、その両立を実践できるのがこのクラブであり、かつ行動力を他の部以上
に身につけることのできるを証明したことになります。

将来とも防大枢要の指導的立場に立つ学生が輩出すると思えます。現代の第 3 学年の
部員にも 4 年生に勝るとも劣らない者が多数みられます。又新一年生の新入部員は約 40
名で大柄で全日本学生大会を楽しみにしているそうです。

次に防大卒業生の部隊にあつての活動は必ずしも期待に添い兼ねる点もあるかと思いま
すが、今しばらく時間をかけてお見守り下さい。学生長の編成、学生長の任務意義等もつ
いて詳しく御報告しなければ十分納得いただけないかと思えますが以上概要だけとりあえ
ずご報告申し上げます細部については夏指講時にさせて下さい。

管長先生の偉大なるご指導のもと防大のクラブ設立に参画したものとして嬉しさのあま
り筆をとりました。ご健康とご発展をお祈りしつつ

結 手

（先生は平成 16 年の 40 周年にもご出席され、お元気であったが平成 23 年 1 月逝去された。）

田村倉蔵先生を偲ぶ



【学生に法話をする田村先生：29期政権時】

田村倉蔵先生は、昭和 53 年～平成 13 年の 23 年間、同年にお亡くなりになるまで長きにわたり、防大少林寺拳法部の育成に貢献された。先生のご指導は、技術のみならず人造りとしての行としての少林寺拳法の教えを、旧軍時代の自らのご経験などを交えながら、わかりやすく、ユーモアを交えてご教示いただいた。

三崎敏夫先生を偲ぶ



【学生に技術指導する三崎先生：昭和 50 年代初頭】

三崎敏夫先生は昭和 50 年代初頭まで、ご指導をいただいた著名な先生である。頭髪は五厘の坊主頭で、指導の際は必ず二人の弟子の先生を従え、常に黒のダブルの服をまとい、来校された。先生の豪快な突き、逆手の引き、顎、張った胸。学生はしばし目を見張るばかりであった。平成 18 年にご逝去された。

丸川武志先生(初代部長)を偲ぶ



丸川武志先生は、電気工学科の教授をされていた先生であり、創立以来、防大少林寺拳法部を指導をされるとともに温かく、学生を見守っていた。30 期代初頭までの学生にとってはなじみの深いお方であった。平成 19 年にご逝去された。

防大少林寺拳法部の今



上段：団体演武練習風景

下段：「先生日」における神田先生（左）と頼富先生（右）のご指導

現役からひとこと（抱負もしくは目標：59-61期生）

59期政権（4学年）



【 59期政権一同 】

1 副将：井口 賢

少林寺拳法部に入って、先輩方から多くのことを学んできました。脈々と受け継がれてきたこれらの教えをしっかりとまとめ、後輩に引き継いでいくことが私たちの役目であると考えます。積み上げられた伝統にさらに輝きを加えられるよう邁進していきます。

2 統制長：結城 翔伍

この伝統ある少林寺拳法部に入ったことは私の一生の宝である。かけがえのない同期、先輩、後輩に恵まれこの部で活動できる今を大切に、先輩方が築いてきた伝統と誇りを後輩に継ぐことは私の使命である。

3 道場長：中山 真利奈

技の上達は日々の積み重ね。技が上達したからといって、うぬぼれた行動をとらず、うぬぼれた自信を持たないように、持ち前の根性で日々の練習に励み、全員が少林寺拳法をやってよかったと思えるような部活にしていきたいと思います。

4 森 拓海

少林寺拳法と出会ってから約3年近くの時間がたった。この3年間で得られたものは多く、非常に感謝している。私にとって防大少林寺拳法は誇りである。この誇りを守ってきた先輩方と守っていく後輩達のためにも全身全霊で部に尽くしていきたい。

5 山田 正嗣

自分なりにできることを突き詰めていって得意分野としつつも、それだけに頼らず苦手なことも克服していき、総合力の底上げを図るようなやり方で、修練を積み重ね、強い”人”を作りたいと思います。

6 山口 滉司

長い歴史とその重みのあるこの部活で、先輩方の教えと反省を糧とし、自分のためのみならず、後輩達のために活かしていきたい。残されている時間は限られているため、熟考して悔いの残らないよう行動していきたいと思う。

7 小林 岳海

少林寺拳法部で私は多くの出会いと同期と共に競い合って成長してきました。私は少林寺拳法部を今まで続けてきたことを本当に良かったと思っています。今までこの部で教えてもらった事を今度は政権となり下級生にしっかりと教えていきたいと思っています。

8 小椎尾 憲造

私はこの部でたくさんの素晴らしい先輩、後輩、そして同期に恵まれた。彼らにはたくさん助けられたし、彼らのおかげで私は成長できた。今後は自分のためだけでなく部のためや仲間のために何かできるよう修行に励みたい。

9 浅井 亮

全ては人の質にあるので、肉体及び精神の鍛錬を行い、完璧な人間を目指す。また、自己の充実を図るとともに周りの者も引っ張っていき、部全体の活性化を図りたい。

10 川口 剛史

伝統ある防大少林寺拳法部に入って後悔はない。同期と競い励ましあうことの大切さや大会等で成績を残すことの難しさを学んだ。まだ私が加入して約3年の歳月しか経過していないが、これからもこの伝統が途切れることの無いように尽力していきたい。

11 山田 竜矢

少林寺拳法を通じて、大切な仲間と出会い、たくさんの宝を手に入れた。修練をすることで、生涯欠けることのできない仲間を持つことができ、己よりも他の幸せを考えられる人間になれたことは、自分の誇りである。政権となった今、良き伝統を部に継承していくことに全力を尽くしていきたい。

12 菊井 健太

この少林寺拳法部に入って多くのことを学び、肉体的精神的に大きく成長する事が出来た。また、多くのすばらしい先輩、同期、後輩に恵まれた。これからも初心を忘れずに基本からしっかりと修行に励みたい。

13 宮里進斗

少林寺拳法部での練習はキツイものだが、その練習の中で大切な仲間、私を慕ってくれる後輩たちに恵まれたことは私にとって大きな宝である。また、修練により己を鍛え

るのみでなく、他人のことも考え行動できるようになり自分の成長を実感している。現在政権となり伝統を守りつつ、新しいことを残していけるよう努力して行きたい。

60期生（3学年）



【 60期一同 】

1 中嶋 律也

自分で自分を捨てない、あきらめない。うぬぼれはいけませんが、自分で見つけた自信を持つ。

2 武田 一希

今日よりも明日を、明日よりも明後日を。常に今の自分以上を目指す。

3 岩井 雄馬

初心を忘れず謙虚な姿勢で、一日いちにちの練習に精一杯励む。

4 山下 亜院

上達には努力と忍耐が必要だ。根気と努力のみが非凡への唯一の道である。

5 中山 孔一朗

常に初心を忘れずに肉体の強化のみならず精神の練磨を継続して行っていく。

6 岡本 直也

黒帯に恥じない実力を身につける。

7 松本 光平

できないことを何度でもやる。

8 山田 和輝

できないところを少しずつ是正して少しでも綺麗な形を作る。

9 立花 祐太

一番練習して一番上手くなるのは私です！！！！笑

10 須釜 一樹

自分に何ができるかを考え、出来ることから1つずつ積み上げていく。

11 東原 和毅

防大少林寺拳法部の伝統に恥じない実力の取得。

12 磯崎 雄哉

基本を忘れず一つ一つ丁寧に練習していく。

13 金沢 克則

少林寺拳法を通じて自らを見つめなおし、ここで得られた仲間と高みを目指す。

14 ブン ティリナ

練習中は集中して、全力を出す。言われたことをちゃんと意識してなおす。

15 矢花 純一

防大少林寺拳法部史上最強の拳士になる！60期団演で去年の雪辱を果たす！

16 藤城 司

人事を尽くして天命を待ちます。

61期生（2学年）



【 61期一同 】

- 1 平 行弘
小さなことからコツコツ積み重ねて自分を磨き上げ強くなります。
- 2 藤澤 宏司朗
隣人は愛すべき仲間であり己の視る自分こそが敵。歩みを止めるな。前を向け。思い描いた自分を超えろ。その先に立つ己を知れ。
- 3 ウェン ニュ ハイ
前を見て、自分・相手を認識できるようになれば、勝利は自分の手中にある。
- 4 渡辺 大輔
周りの人に気を配り、技を盗み、自分と比較して成果をなす。
- 5 信太 啓輔
素直さを失うことなく、日々研鑽し、常に上を目指す。
- 6 工藤 将人
少しずつでもよいので、よく考え、継続していきたい。
- 7 森合 隆之介
毎日の練習で出来るようになったことを積み重ねていく。
- 8 加藤 晃輔
なにかつかめた気がした時はそれを大事にしながら頑張っていきたい。
- 9 大内 哲也
納得のいく練習をして研鑽を積む。
- 10 山内 拓弥
基本から一つずつ積み上げていくことが、勝利への近道！
- 11 須藤 琢朗
為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり
- 12 天野 極
基本から。
- 13 臺座 義崇
自分の歩みは自分で決める。前にあるものが何であるか、構わずに突き進む。その先には明日がある。
- 14 庄谷 隼介
諦めずに自分が満足のいくまであがき続けます。
- 15 武次 将吾
目の前にある壁を一つずつ乗り越えていきたい。
- 16 鳴海 洸成
毎日毎日の練習を大切にし、スピード、キレをつけていく。
- 17 渡邊 健太
基本に重点をおく。

62 期生（1 学年）

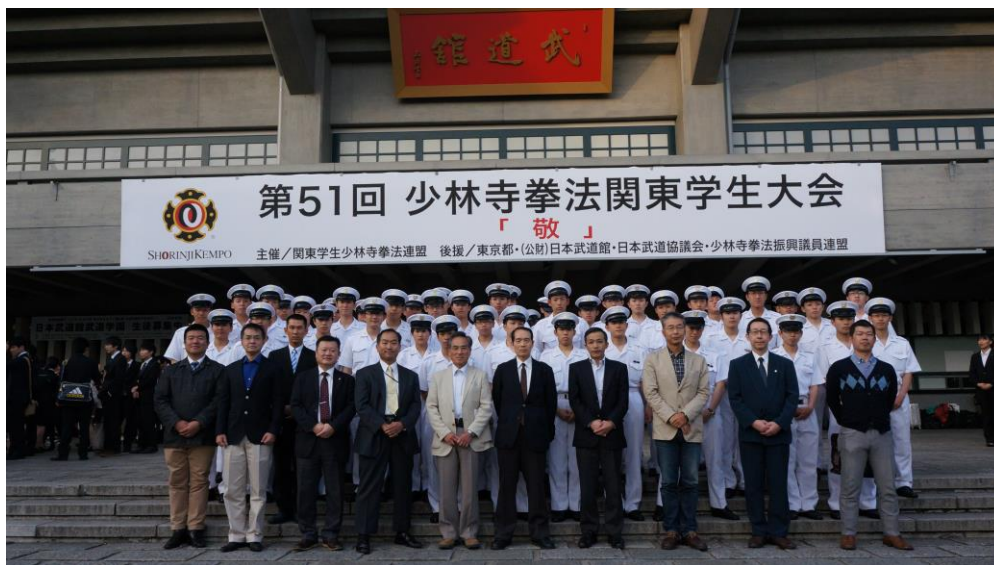


【 62 期生一同 】

平成 26 年度始動～！



【 26 年度新入生歓迎会 於ソレイユの里】



【 平成 26 年度 第 51 回 関東学生大会 】

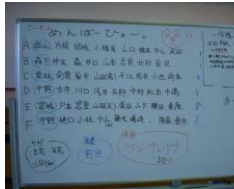


【 平成 26 年度 早慶防 合同練習 】

明治、早稲田、慶応、慶応理工、青学、東海、日女、上智、筑波、明治学院の計 10 校、百数十名が参加

今日の防大少林寺拳法部現役拳士たちの一日

- 1615- 鎮魂行の実施
- 1620- 体操・ストレッチ
- 1625-1645 ランニング
- 1645-1700 全体基本
- 1700-1755 学年別練習
- 1800-1815 運用法
- 1815-1820 作務
- 1820- 伝達・解散



【 鎮魂行 】



【 体操 】



【 ランニング 】



【 基本練習 】



【 学年別練習 】



【 運用法練習 】



【 作務 】

防大少林寺拳法部の最近の平均的一年間の活動

- 4月 関東学生大会準備・新入生勧誘 (防大入校式)
- 5月 関東学生大会参加・新入生歓迎会・早慶防合同練習会
 ※早慶防は25年度は早慶のほか、慶応理工、青学・昭和・日女体・上智・明治・一橋・津田塾等総勢183人参加。
- 6月 昇段・昇級審査 (神奈川県大会・可能であれば参加)
- 7月 (定期訓練)
- 8月 夏合宿
- 9月 全日本大会準備・錬成
- 10月 全日本大会準備・錬成 (前期定期試験)
- 11月 全日本学生大会参加・開校祭演武披露 (開校祭)
- 12月 三浦ブロック大会参加 (全国大会・可能であれば参加)
- 1月 寒稽古・全自衛隊大会
- 2月 奥平杯大会・納会・奥平 (OB) 総会・ブロック新年会 (後期定期試験)
- 3月 春合宿 (防大卒業式)

※ 原則として1ヶ月に1回「先生日」を設定

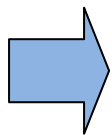
※ 状況に応じ2ヶ月～四半期に1回実施される三浦ブロック合同練習会に参加



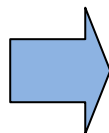
【 新入生勧誘ポスター 56期政権時 】



【 新入生歓迎会 箱根ユネッサン 55期政権時 】



【 関東大会参加 54期政権当時 】



【 早慶防合同練習 58期政権時 】



【 夏合宿 左： 53期政権時 右：56期政権時 】



【 本山合宿 57期生参加時 】



【 全国学生大会参加 58期政権当時 】



【 三浦ブロック大会 55期政権当時 】



【 全自衛隊大会 56期政権時 】



【 卒業式 】

【 奥平杯・奥平会総会・納会 】

学生支援体制

2014.04.01 現在

【 防大少林寺拳法部 】

I 部内顧問団

部長	電気情報学群通信工学科	教授	高橋 信明
先生		7段 正範士	神田 憲和
		6段 准範士	頼富 英武
監督	第1大隊次席付指導教官	3等陸佐	渡邊 俊明 (#44)
顧問	防衛学教育学群戦略教育室	1等陸佐	藤原 修 (#28)
	戦略教育室	1等海佐	上野 清昭 (#28)
	戦略教育室	2等陸佐	濱田 秀 (#27)
	第44中隊次席指導教官	3等海佐	堤 允良 (#45)
	訓練部武器係長	1等陸尉	永田 忠義 (#49)
	第113小隊指導教官	1等陸尉	松岡 晋 (#50)
	電気情報学群通信工学科	教授	葉玉 寿弥
	電気情報学群通信工学科	教授	西田 謙
	応用化学群応用化学科	准教授	有賀 敦
	応用化学群応用物理学科	准教授	斎藤 文一
	電気情報学群通信工学科	准教授	和田 篤
	電気情報学群通信工学科	講師	島 宏美

II 部外顧問団

2段 少拳士	加藤三千夫 (#15)		
7段 正範士	出口 潔 (#24)	6段 准範士	佐藤 秀幸 (#24)
4段 正拳士	坂本 卓巳 (#25)	4段 正拳士	内山 哲也 (#25)
5段 正拳士	相良 達也 (#26)	5段 大拳士	米山多佳志 (#27)
4段 正拳士	吉武 辰明 (#31)	5段 大拳士	山口 直人 (#32)
6段 大拳士	高取 哲郎 (#37)		

【 26 年度奥平会役員 】

会 長 佐藤 秀幸 (#24)
 顧 問 石渡 幹生 (#17)
 顧 問 鈴木 陽 (#17)
 副 会 長 坂本 卓巳 (#25)
 副 会 長 濱田 秀 (#27)
 総 括 (正) 濱田 秀 (#27)
 総 括 (副) 渡邊 俊明 (#44)
 庶 務 (県連) 濱田 秀 (兼)
 (ブロック) 渡邊 俊明 (正：兼)
 堤 允良 (副：兼)
 (全自衛隊) 米山 多佳志
 (関東 OB 連合) 米山 多佳志 (兼)
 広 報 堤 允良
 会 計 (正) 濱田 秀 (#27)
 (副) 永田 忠義 (#49)
 会計 監査 山形 克己 (#20)



【 26 年度顧問団 】



【 20 年度顧問団 】



【 21 年度顧問団 】



【 22 年度顧問団 】



【 23 年度顧問団 】



【 24 年度顧問団 】



【 25 年度顧問団 】

思い出写真館

—各期から寄せられたスナップ写真集—



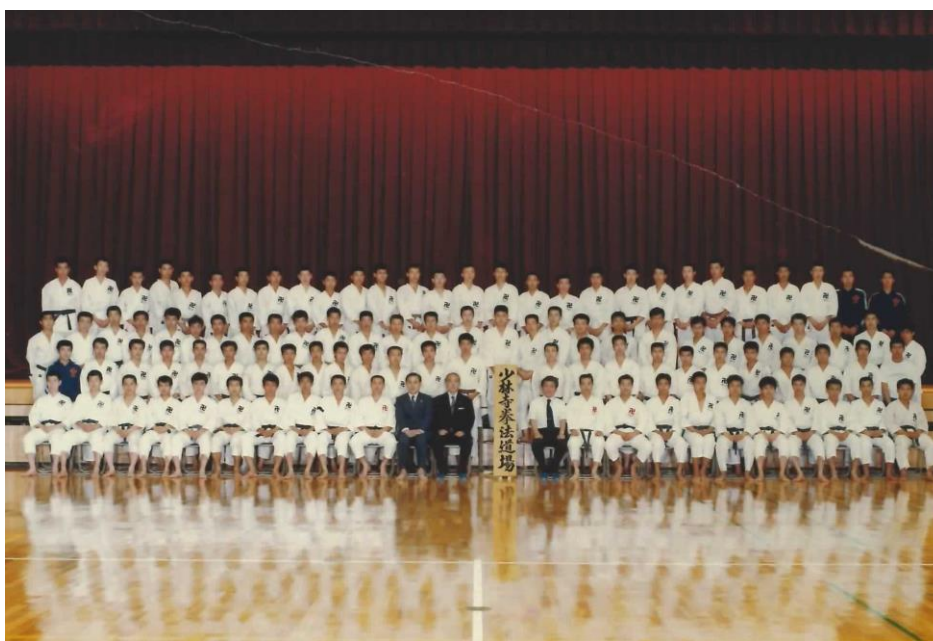
【 23期生：4学年時 三木主将・井口・日高・広塚・池邊各氏 】

※ スナップ写真は各期の代表者が送付（送信）していただいたもので、各期代表者のコメントの余白に掲載されていないものを中心に掲載しております。

少林寺拳法部道場 ～ 聖なる場所 ～

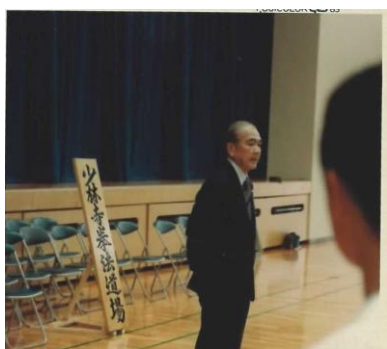


【 芝生青空道場 昭和 52 年 】



【 少林寺拳法部道場落成 昭和 58 年 】

4 代校長土田学校長に看板の揮毫をいただいた。



● 政権運営 ～覇者としての運営に思いをめぐらせる日々～



【15期生のスナップ】

● 錬成の日々 ～守・破・離を目指して～



【15期生の演武】



【23期生の演武】



【三崎先生のご指導：22期政権】



【25期生による乱捕指導風景】



【体力錬成(鉄棒)33期生が1年生時】【練習終了前の肩車騎馬立:28期生が4年時】



※ その日その日の練習を緊張感をもって行った。たとえ和やかな練習が続いたとしても、練習の最後には体力錬成が待っていた。極めつけは肩車騎馬立で、4年生に腹部に対し突蹴りをお見舞いされるのであった・・・。

大会参加 ～ 厳しい練習に報いが来る時 ～

優勝盾を前にして



【 15 期生 】



【17 期生】

全日本最優秀演武



【 23 期生 三木・池邊組最優秀 】



【 27 期生 】



【 28 期生 全日本大会最優秀カップ 】



【 30 期生 全日本大会出場中】



【 31 期生 全日本大会出場 】



【 33 期生全国大会出場 】

合 宿 ～ 限界に挑戦 ～



【 17 期生 】



【 拳法名物拳立：23 期生 】
百回単位は当たり前。腰が・・・



【千本突蹴：26 期生が 1 年生時】 【海中突進み：25 期生が下級生時】



【 赤城青年の家にて：28 期政権 】



【 29 期政権 】



【 岩手山にて：30期政権 】



【走る・・・：28期政権】



【走る・・・：31期政権】



【走る・・・：39期政権】



【ペリー間前にて走る・46期政権】



【 校内合宿のランニングは陸上競技場で終了することが多くなった：46期生】



本山合宿 ～ 少林寺の面白さ・妙味に触れるとき ～

● 17期生



【 17期生 】



【 26期生 】



【 31期生 】



【 54・55期生合同参加 】

開校祭 ～ 華麗なる演武披露 ～



【 28期生 開校祭 披露演武 】



【 57期政権における時計台下演武 】

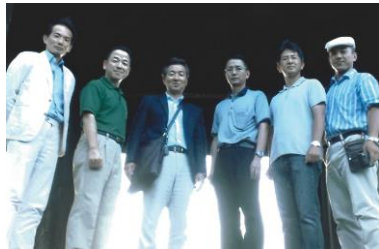


※ 往年は棒倒しの合間の団体演武が多かったが、近年では、前日の土曜日に時計台下で演武披露をしたのち、2日目に棒倒しの合間の演武を行うようになった。

任官・退官後も集うOB ～ 校友会で苦労した同士の絆は強い ～



【 23期生を中心とした有志の集い 】



【32期生を中心とした有志の集い】

【54・55期生有志の集い】

【54～57期生有志の集い】



【 目黒地区を中心とした有志の集い 】



【 関西地区を中心とした有志の集い 】

【沖縄を中心とした有志の集い】

防衛大学校少林寺拳法部 50 年の歩み

西暦	元号	政権	部員数	記 事
1965	40	10	33	1965.5.6 当時 4 大隊指導教官であった奥平正人 2 空佐の指導のもと、少林寺拳法会発足。芝生の上での練習は当時からであった。
1966	41	11	34	
1967	42	12	42	
1968	43	13	47	1968.5.9 同好会として承認 ●関東大会 (団体乱捕) 準優勝 ○関東新人大会 優勝
1969	44	14	64	○関東新人大会 (団体乱捕) 第 3 位 ★全日本大会 (自由組演) 第 5 位
1970	45	15	77	●関東大会 (団体乱捕) 準優勝 ○関東新人大会 優勝 ★全日本大会 (団体乱捕) ベスト 8
1971	46	16	79	●関東大会 (個人乱捕) 準優勝 (自由組演武) ベスト 4 ○関東新人大会 優勝 ★全日本大会 (個人乱捕) 優勝
1972	47	17	83	●関東大会 (団体乱捕) 優勝 ★全日本大会 (団体乱捕) 準優勝
1973	48	18	85	●関東大会 (自由組演武) 優秀 1974.2.19 部昇格を承認
1974	49	19	84	●関東大会 (自由組演武) 最優秀 ★全日本大会 (組演武) 優秀 ○関東 6 大学乱捕大会 優勝
1975	50	20	82	★全日本大会 (団体演武) 最優秀 ○関東 7 大学乱捕大会 準優勝
1976	51	21	85	●関東大会 (組演武) 最優秀 ★全日本大会 (組演武) 優秀 ○関東 8 大学乱捕大会 優勝
1977	52	22	83	★全日本大会 (組演武) 最優秀 (団体演武) 最優秀 ○関東 10 大学乱捕大会 優勝
1978	53	23	91	●関東大会 総合優勝 ★全日本大会 (団体演武) 最優秀

1979	54	24	102	○関東学生演武会 ◇自衛隊大会	参加 特別賞
1980	55	25	111	1980.5 開祖遷化 ★全日本大会 (団体演武) ◇自衛隊大会	最優秀 特別賞
1981	56	26	113	●関東大会 (組演武) ★全日本大会 (団体演武) ☆全国大会 (団体演武)	優良 最優秀 優秀
1982	57	27	114	●関東大会 (組演武) ★全日本大会 (組演武) (団体演武) ☆全国大会 (組演武) (団体演武)	優秀 優良 最優秀 優良 最優秀
1983	58	28	112	●関東大会 (組演武) ★全日本大会 (組演武) (団体演武) ☆全国大会 (組演武) (団体演武)	優秀 最優秀 最優秀 優良 最優秀
1984	59	29	110	●関東大会 (団体演武) ★全日本大会 (組演武) (団体演武) ☆全国大会 (組演武) (団体演武) ◇全自衛隊大会 (組演武)	最優秀 最優秀 最優秀 敢闘 最優秀 最優秀
1985	60	30	110	★全日本大会 (組演武) (団体演武) ◇国際親善大会 (一般団体の部)	最優秀 優良 敢闘賞
1986	61	31	98	◇全自衛隊大会 (団体演武) (組演武) ●関東大会 (組演武) (団体演武) ☆全国大会 (一般団体の部) ★全日本大会 (組演武) (団体演武)	最優秀 最優秀 最優秀 優秀 優秀 最優秀 最優秀
1987				●関東大会 (団体演武) ◆横須賀市民大会 (組演武)	最優秀 最優秀

1987	62	32	89	<ul style="list-style-type: none"> (団体演武) 奉納演武 ◇全自衛隊大会 (団体演武) 最優秀 (組演武) 最優秀 ★全日本大会 (団体演武) 敢闘 (組演武) 最優秀 (三人掛) 最優秀
1988	63	33	81	<ul style="list-style-type: none"> ●関東大会 (組演武：少拳士) 最優秀 (組演武：級・衆敵) 優秀 (団体演武) 優秀 ◆神奈川県大会 (組演武：少拳士) 最優秀 ★全日本大会 (組演武：級・准・中拳士) 最優秀 (衆敵闘法) 最優秀 (団体演武) 最優秀 ◆横須賀市民大会 (級拳士の部) 優勝 (有段者の部) 優勝 ◇全自衛隊大会 (組演武：団体演武段外・参段以上) 最優秀
1989	H1	34	76	<ul style="list-style-type: none"> ●関東学生大会 (組演武：級拳士) 最優秀 (組演武：少拳士) 優秀 (有段者衆敵闘法の部) 敢闘 (級拳士衆敵闘法の部) 優秀 (団体演武) 優秀 ★全日本大会 (組演武：准拳士) 最優秀 (組演武：級拳士) 優秀 (組演武：中拳士) 敢闘 (有段者衆敵闘法の部) 最優秀 (級拳士衆敵闘法の部) 優秀 (団体演武) 優秀 ◇全自衛隊大会 (組演武：級・初二段) 最優秀 (組演武：参段以上) 優秀 ◆横須賀市民大会 (組演武：級・有段者) 最優秀 (組演武：級) 優秀
1990				<ul style="list-style-type: none"> ●関東学生大会 (組演武：級拳士) 優秀

1990	2	35	69	<p>(組演武：少拳士) 優 良 (団体演武) 最優秀</p> <p>★全日本大会 (組演武：准拳士) 最優秀 (組演武：中拳士) 敢 闘 (有段者衆敵闘法の部) 最優秀 (団体演武) 最優秀</p> <p>☆全国大会 (団体演武) 最優秀</p> <p>◇全自衛隊大会 (組演武：級拳士) 最優秀 (組演武：級拳士) 敢 闘 (組演武：初弐段) 最優秀 (組演武：参段以上) 最優秀</p> <p>◆神奈川県民大会 (団体演武) 最優秀</p> <p>◆横須賀市民大会 (組演武：級拳士) 最優秀</p>
1991	3	36	73	<p>●関東学生大会 (有段者衆敵闘法の部) 優 秀 (団体演武) 最優秀</p> <p>★全日本大会 (組演武：級拳士) 優 良 (組演武：中拳士) 敢 闘 (組演武：中拳士) 優 良 (有段者衆敵闘法の部) 最優秀 (団体演武) 最優秀</p> <p>◇全自衛隊大会 (組演武：級拳士) 最優秀 (組演武：初弐段) 最優秀 (組演武：参段以上) 最優秀</p> <p>◆横須賀市民大会 (組演武：級拳士) 最優秀 (組演武：有段者) 最優秀</p>
1992	4	37	63	<p>★全日本大会 (有段者衆敵闘法の部) 優 良 (団体演武) 最優秀</p> <p>◇全自衛隊大会 (組演武：級拳士) 優 秀 (組演武：准拳士) 最優秀 (組演武：中拳士) 優 良 (団体演武) 最優秀</p> <p>◆横須賀市民大会 (組演武：級拳士) 最優秀 (組演武：初弐段) 最優秀 (団体演武) 最優秀</p>
1993				<p>●関東学生大会 (組演武：段外) 優 秀 (有段者衆敵闘法の部) 優 良</p>

1993	5	38	63	<p>(団体演武) 最優秀</p> <p>★全日本大会 (団体演武) 最優秀</p> <p>◇全自衛隊大会 (組演武：級拳士) 最優秀</p> <p>(組演武：級拳士) 優 秀</p> <p>(組演武：初弐段) 優 秀</p> <p>◆神奈川県大会 (団体演武) 最優秀</p>
1994	6	39	59	<p>●関東学生大会 (組演武：段外) 最優秀</p> <p>(組演武：段外) 優 秀</p> <p>(組演武：少拳士) 最優秀</p> <p>(有段者衆敵闘法の部) 優 良</p> <p>(団体演武) 最優秀</p>
1995	7	40	56	<p>●関東学生大会 (少拳士) 最優秀</p> <p>(中拳士) 敢 闘</p> <p>(男子二人掛け) 敢 闘</p> <p>(団体演武) 優 秀</p> <p>★全日本大会 (少拳士) 敢 闘</p> <p>(中拳士) 優 良</p> <p>(男女混合) 敢 闘</p> <p>(男子二人掛け) 優 秀</p> <p>(団体演武) 最優秀</p> <p>☆全国大会 (中拳士) 優 秀</p> <p>◆横須賀市民大会 (段外) 優 良</p> <p>(初弐段) 優 良</p> <p>(中拳士) 優 良</p> <p>(男女混合) 最優秀</p>
1996	8	41	52	<p>●関東学生大会 (段外) 敢 闘</p> <p>(少拳士) 最優秀</p> <p>(男女混合) 最優秀</p> <p>(男子二人掛け) 敢 闘</p> <p>(団体演武) 最優秀</p> <p>★全日本大会 (段外) 最優秀</p> <p>(准拳士) 優 良</p> <p>(中拳士) 敢 闘</p> <p>(団体演武) 優 秀</p> <p>◆横須賀市民大会 (段外) 優 秀</p> <p>(男女混合) 優 秀</p>

1996	8	41	52	◇全自衛隊大会 (段外) (准拳士)	最優秀 優 秀
1997	9	42	34	●関東学生大会 (少拳士) (男子二人掛け) (団体演武) ★全日本大会 (級拳士) (団体演武)	最優秀 優 良 優 秀 敢 闘 最優秀
1998	10	43	30	●関東学生大会 (男子段外) (男子単独有段) (団体演武) ★全日本大会 (男子単独有段) (女子単独有段) (男女有段) (男子三人掛け) (団体演武)	最優秀 優 秀 最優秀 優 秀 敢 闘 敢 闘 優 秀 優 秀
1999	11	44	31	●関東学生大会 (男子段外) (男子段外) (男女有段) (団体演武) ★全日本大会 (男子段外) (男女段外) (女子単独) (男女有段) (団体演武) ◇全自衛隊大会 (組演段外) (組演初弐段) ◆横須賀市民大会 (一般単独) (一般段外) (一般初弐段) (一般参段以上)	優 良 敢 闘 敢 闘 優 良 敢 闘 最優秀 敢 闘 優 良 敢 闘 最優秀 優 良 優 秀 優 秀 優 秀 最優秀
2000	12	45	35	●関東学生大会 (男女段外) (団体演武) ★全日本大会 (男子段外) (男子弐段) (団体演武) ◆神奈川県大会 (団体演武)	優 秀 優 秀 敢 闘 優 良 優 良 最優秀

2000	12	45	35	<p>◆横須賀市民大会 (男子段外) 最優秀 (男子初弐段) 優良 (女子初弐段) 優秀</p> <p>◇全自衛隊大会 (单独段外) 優秀 (男子段外) 最優秀 (男子初弐段) 最優秀 (男子初弐段) 優秀 (団体演武) 最優秀</p>
2001	13	46	30	<p>●関東学生大会 (男女段外) 敢闘 (男女有段) 敢闘 (団体演武) 最優秀</p> <p>★全日本大会 (男子初段) 敢闘 (男子三人掛け) 優良 (団体演武) 優良</p> <p>◆神奈川県大会 (一般男子初段) 最優秀 (一般男子弐段) 優良 (一般自由) 優秀</p> <p>◆横須賀市民大会 (一般男子段外) 優秀 (一般男子段外) 最優秀 (一般男子有段) 最優秀 (一般男女有段) 優秀 (一般单独) 最優秀</p>
2002	14	47	33	<p>●関東学生大会 (男子段外) 敢闘 (団体演武) 優秀</p> <p>★全日本大会 (男子参段以上) 敢闘 (団体演武) 最優秀</p> <p>◇全自衛隊大会 (男子段外) 最優秀 (单独有段) 最優秀 (初弐段) 最優秀 (参段以上) 優良 (団体演武) 最優秀</p>
2003				<p>●関東学生大会 (男子段外) 敢闘 (団体演武) 最優秀</p> <p>★全日本大会 (団体演武) 優良</p> <p>◇全自衛隊大会 (单独段外) 最優秀 (男子初弐段) 最優秀</p>

2003	15	48	44	(男子参段以上) 最優秀 (団体演武) 最優秀 ◆三浦ブロック大会 (段外) 敢闘 (男子有段) 敢闘 (単独一般) 敢闘
2004	16	49	48	●関東学生大会 (男子段外) 最優秀 (男子弐段) 敢闘 (団体演武) 優秀 ★全日本大会 (男子初段) 敢闘 (団体演武) 最優秀
2005	17	50	60	●関東学生大会 (団体演武) 最優秀 ★全日本大会 (団体演武) 最優秀
2006	18	51	65	●関東学生大会 (男子段外) 最優秀 (男子段外) 優良 (男子単独有段) 敢闘 (男子弐段) 優良 (男子三人掛け) 敢闘 (団体演武) 最優秀 ★全日本大会 (男女段外) 最優秀 (男子参段以上) 優良 (男子三人掛け) 最優秀 (団体演武) 最優秀 ◆三浦ブロック大会 (男子段外) 優秀 (男子段外) 優良 (男子単独有段) 最優秀 (男子単独有段) 優良 ◇全自衛隊大会 (単独段外) 最優秀 (単独有段) 最優秀 (初弐段) 最優秀 (参段以上) 最優秀
2007				●関東学生大会 (男女段外) 優秀 (男子参段以上) 敢闘 (団体演武) 最優秀 ★全日本大会 (男子段外) 敢闘 (男女初段) 敢闘 (男子参段以上) 敢闘

2007	19	52	63	(団体演武) 最優秀 ◆三浦ブロック大会 (初段) 最優秀 (弐段) 敢闘 (弐段) 最優秀 ◇全自衛隊大会 (初弐段) 優良 (参段以上) 最優秀
2008	20	53	55	●関東学生大会 (男子段外) 優秀 (男子単独有段) 敢闘 (団体演武) 優良 (運用法) 最優秀 ★全日本大会 (団体演武) 最優秀 ◇全自衛隊大会 (段外単独) 最優秀 (学生段外組演) 最優秀 (学生有段組演) 最優秀 (学生有段組演) 優秀 (学生有段組演) 優良
2009	21	54	51	●関東学生大会 (男子単独段外) 優秀 ★全日本大会 (団体演武) 第5位 ◇全自衛隊大会 (初弐段) 最優秀 (男子単独有段) 優秀
2010	22	55	59	●関東学生大会 (男子段外) 第5位 (男子弐段) 第4位 (団体演武) 第3位 ★全日本大会 (団体演武) 第3位 ◆三浦ブロック大会 (段外) 優秀 (有段) 最優秀 (単独有段) 最優秀 ◇全自衛隊大会 (段外) 優良 (単独有段) 最優秀 (初弐段) 最優秀 (初弐段) 優秀 (初弐段) 優良 (単独初弐段) 優秀 (参段) 最優秀 (四段以上) 最優秀 (団体演武) 最優秀

2011	23	56	54	<p>●関東学生大会 (三人掛け) 第5位 (団体演武) 第2位</p> <p>★全日本大会 (男子段外) 第4位 (単独有段) 第3位 (団体演武) 最優秀</p> <p>○埼玉理工系大会 (男子初段) 優 秀 (男子段外) 優 秀</p> <p>◇三浦ブロック大会 (一般有段) 優 秀 (一般段外) 最優秀 (一般段外) 優 秀</p>
2012	24	57	64	<p>●関東学生大会 (団体演武) 第6位 (男子茶帯) 最優秀</p> <p>★全国学生大会 (男子緑帯) 第3位 (男子茶帯) 最優秀 (単独有段) 第5位 (団体演武) 優 秀</p> <p>◆神奈川県大会 (一般男子三段) 最優秀 (一般男子二段) 最優秀 (一般男子二段) 優 良 (一般男子二段) 第4位 (一般男子級拳士) 最優秀 (一般男子級拳士) 優 良 (一般男女有段) 最優秀 (一般団体) 最優秀</p> <p>◆三浦ブロック大会(一般有段) 最優秀 (一般有段) 優 秀 (一般段外) 最優秀 (一般段外) 優 秀</p>
2013	25	58	72	<p>●関東学生大会 (団体演武) 第3位 (男子段外) 第3位 (男子弐段以上) 第3位</p> <p>★全日本大会 (団体演武) 第2位</p> <p>◆神奈川県大会 (団体演武) 第2位 (一般男子級拳士) 最優秀 (一般男子級拳士) 最優秀 (一般男子参段以上) 優 良</p>

2013	25	58	72	(一般男子参段以上) 優 秀 (一般男子参段以上) 優 秀 (一般男子弐段以上) 優 秀 (一般男女有段) 優 秀 (一般男子初段) 優 秀 ◆三浦ブロック大会 (一般初段の部) 最優秀 (一般初段の部) 優 良 (一般級拳士の部) 最優秀 (一般級拳士の部) 優 良
2014	26	59	65	●関東学生大会 (団体演武) 第4位

防衛大学校 50 周年記念大会委員

実行委員長	佐藤 秀幸 (#24)	
祝賀会責任者	出口 潔 (#24)	
祝賀会企画 (長)	坂本 卓巳 (#25)	(副) 濱田 秀 (#27)
	白水 裕人 (#28)	北原 秀章 (#28)
	堀 修二郎 (#35)	
会場係 (長)	田草川 茂人 (#25)	(副) 大内 元 (#25)
司会担当 (長)	荒川 紗恵 (#54)	(副) 吉武 辰明 (#31)
	永島 透 (#42)	
受付担当 (長)	阪井 旭 (#46)	(副) 奈良 一志 (#40)
会計担当 (長)	藤原 修 (#28)	(副) 藤原 宏匡 (#48)
写真担当 (長)	松尾 嵩嗣 (#47)	(副) 福島 睦 (#26)
誘導担当 (長)	郡山 伸衛 (#49)	(副) 池ノ本 八郎 (#31)
渉外係 (長)	米山 多佳志 (#27)	(副) 渡邊 俊明 (#44)
VIP・招待係 (長)	中村 健蔵 (#24)	
	(副) 矢野 光宏 (#28)	大塚 和也 (#32)
プレゼンテーション係 (長)		
	山口 直人 (#32)	(副) 田口 芳郎 (#32)
記念誌責任者	濱田 秀 (#27)	
DVD 責任者	山口 直人 (#32)	
会計責任者	藤原 修 (#28)	



防大少林寺拳法部顧問
濱 田 秀 (27 期生)

編集後記

合 掌

OB・現役・関係者の皆様、部創立 50 周年、あらためましておめでとうございます。

50 周年と一言で申しますが、大きな時間のスパンであります。防大少林寺拳法部生みの親、故奥平正人氏が、この小原台に創設を決意し、その志の灯を学生に伝えたのは、はるか 50 年前の 1965 (昭和 40) 年のことでした。私個人の短い人生に照らし合わせたとしても、その時はいつだったかと振り返りますのならば、三つ子の歳だったわけであり、時間の長さというものを再認識・実感するのであります。

防大少林寺拳法部はこのように奥平先生と学生とのご縁から始まりました。さらに歴代の諸先輩方のご努力ももちろんのことなのですが、そして開祖をはじめとして、田村先生・神田先生・頼富先生・三崎先生、神奈川県連盟・横須賀三浦ブロック等少林寺拳法の諸先生方および丸川部長・菅野前部長・現部長をはじめとする学生に直接接する方々に見守られながら部が育成され、今日を迎えることができました。

私事で恐縮ですが、ちょうど 34 年ほど前、4 年生 (24 期生) をお見送りし防衛大学校 1 年生から 2 年生を迎えようかとしていた私は、政権交代した直後のやる気満々の 25 期生に引率され、初めて本山に赴きました。1980 (昭和 55) 年 3 月下旬のことでした。その中で私たち防大生 100 名あまりは「本山 D 合宿」に参加し、充実した 1 週間を過ごしました。防大にいれば多くの時間が費やされるであろう体力錬成の時間は本山合宿ではほとんどなく、かわりに少林寺拳法の技の練習と法話等の中身に迫ることができ、本当に「参加してよかった」と思える合宿でありました。本山の先生が練習中披露してくれた、即興に実施する迫力ある組演武も圧巻でした。防具を装着しない乱捕のようなパワフルな演武であり少林寺拳法にあって乱捕りと演武は別物ではないということを感じました。しかし開祖はいとも簡単にその先生を柔法で倒してしまう状況を拝見して 2 度圧倒された次第であります。そして忘れもしない 3 月 26 日、開祖はすでに相当体調が悪かった状況にもかかわらず、私達防大生を集めて話をしてくださいました。甲高い声の中に人を引き込む開祖の魅力が自然と伝わってまいりました。本誌「開祖を偲ぶ」での引用部分がそれです。自らの戦争のご経験をもとに日本の将来を思う気持ちと、将来武力を扱うこととなるであろう若い我々に対する思いが伝わって参りました。このことが本当に冷や酒のように効いてきたのは 40 歳を越えてからでした。開祖は約 1 ヶ月後遷化されました。

少林寺拳法という行を通じての人造りを目指した開祖・奥平氏の志は 50 年の時を越えて私達防大生・防大卒業者にも続いていると思っております。 結 手

少林寺拳法部創立 50 周年記念誌

発行日：平成 26 年 6 月 20 日

発行者：防衛大学校少林寺拳法部

防衛大学校少林寺拳法部奥平会

住 所：〒238-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校防衛学教育学群内

電 話：046-841-3810（内線 3853）

